

堂田・八反長

発掘調査報告

水尾川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1992年

兵庫県教育委員会

ドウ デン ハツ タン チョウ
堂田・八反長

発掘調査報告

水尾川河川改修工事に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1992年

兵庫県教育委員会

例 言

1. 姫路市岡田字堂田および字八反長に所在する堂田遺跡ならびに八反長遺跡の発掘調査報告である。
2. 両遺跡の発掘調査は兵庫県姫路土木事務所が施行した水尾川河川改修工事に伴うものであり、兵庫県教育委員会が4次にわたって調査を行った。

調査担当者

| | |
|--------|----------------|
| 昭和53年度 | 松下 勝・深井明比古 |
| 昭和55年度 | 松下 勝・山本二郎・水口富夫 |
| 昭和56年度 | 森内秀造 |
| 昭和57年度 | 森内秀造・平田博幸 |
| 昭和60年度 | 吉田 昇・西口圭介 |
| 昭和61年度 | 森内秀造 |
| 昭和62年度 | 大平 茂・村上泰樹 |

現在調査担当者は、山本が兵庫県教育委員会社会教育・文化財課に所属し、他の者はいずれも兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所勤務である（松下は故人）。

3. 遺物の接合・復元・作図等の整理作業は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区荒田町）において、上記調査担当者を中心として行った。
4. 土器・木器・石器の報告書番号は「確認調査（土山散布地を含む）」、「堂田遺跡」、「八反長遺跡」毎にそれぞれ〔1〕からとする。そのため3年度にわたって調査した「八反長遺跡」の場合は、3年度分を通しての報告書番号となる。
5. 木器の基本的な分類は『木器集成図録』—近畿古代編—に基づいて行ったが、固有の形態が生じた場合にはその都度器種を追加し、細分を行った。
6. 発掘調査時の写真撮影は各調査担当者が行い、復元後の土器・石器・木器の写真撮影は日之出写真館に委託して行った。
7. 出土木製品に関しては、奈良国立文化財研究所の工業善通・町田 章・上原真人の御三氏をはじめ多くの方々よりご教授を頂いた。
8. 現地では高橋学氏（現立命館大学助教授）に地理学のご指導をいただき、姫路市教育委員会の山本博利氏・秋枝 芳氏には市内遺跡に関してご助言をいただいた。
9. 出土金属器と木器に関しては、職員の加古千恵子・別府洋二の2名がアクリル樹脂処理とポリエチレン・グリコールによる保存処理を本事務所において行った。
10. 遺跡周辺図は、同土木事務所作製の計画図を使用させていただいた。
11. 本報告書の執筆・編集は各調査員が分担して行った。石器については、堂田遺跡分を久保弘幸が、八反長遺跡昭和57年度・60年度分については山本誠が担当した。

本文目次

| | |
|----------------|----|
| 第1章：調査の概要 | |
| 第1節；調査に至る経過 | 1 |
| 第2節；調査の体制 | 2 |
| 第2章：遺跡の調査 | |
| 第1節；遺跡の歴史的環境 | 3 |
| 第2節；調査および遺跡の概要 | 6 |
| 第3章：確認調査 | |
| 第1節；確認調査 | 9 |
| 第2節；遺物 | 11 |
| 第4章：全面調査 | |
| 堂田遺跡 | |
| 第1節；遺跡の概要 | 14 |
| 第2節；調査結果 | |
| A. 遺構 | 14 |
| B. 遺物 | 16 |
| 八反長遺跡 | |
| 第1節；遺跡の概要 | 30 |
| 第2節；昭和55年度の調査 | |
| A. 遺構 | 31 |
| B. 遺物 | 34 |
| 第3節；昭和57年度の調査 | |
| A. 遺構 | 39 |
| B. 遺物 | 48 |
| 第4節；昭和60年度の調査 | |
| A. 遺構 | 66 |
| B. 遺物 | 67 |
| 第5章：まとめにかえて | 81 |
| 結語 | 85 |

挿 図 目 次

- 第1図 周辺遺跡分布図
- 第2図 全面調査区位置図
- 第3図 両遺跡周辺等高線・旧河道復元図
- 第4図 両遺跡周辺概地形図
- 確認調査**
- 第5図 昭和53年度確認グリッド配置図
- 第6図 昭和56年度確認グリッド配置図
- 第7図 昭和61年度確認グリッド配置図
- 第8図 昭和53年度確認調査時出土縄文土器・弥生土器拓影
- 第9図 各年度確認調査時出土の土器
- 第10図 昭和53年度確認調査時出土の石器
- 第11図 昭和53年度確認調査時出土の木器
- 堂田遺跡**
- 第12図 南北トレンチ土層断面図
- 第13図 トレンチ出土の縄文土器（1）
- 第14図 トレンチ出土の縄文土器（2）
- 第15図 トレンチ出土の縄文土器拓影（1）
- 第16図 トレンチ出土の縄文土器拓影（2）
- 第17図 包含層出土の土器
- 第18図 包含層出土の瓦拓影
- 第19図 トレンチ出土の石器（1）
- 第20図 トレンチ出土の石器（2）
- 第21図 トレンチ出土の石器（3）
- 第22図 トレンチ出土の石器（4）
- 第23図 トレンチ出土の石器（5）
- 八反長遺跡（昭和55年度）**
- 第24図 調査区土層断面図
- 第25図 遺構全区および木器出土状況図
- 第26図 旧河道内出土の土器
- 第27図 旧河道内出土の木器（1）
- 第28図 旧河道内出土の木器（2）
- 第29図 旧河道内出土の木器（3）
- 八反長遺跡（昭和57年度）**
- 第30図 北調査区土層断面図
- 第31図 北調査区遺構全区
- 第32図 北調査区等高線図
- 第33図 溝2内木樋状木器出土状況図
- 第34図 土墳墓
- 第35図 方形周溝墓状遺構

- 第36図 壺棺出土状況図
- 第37図 柱穴平面図・断面図
- 第38図 南調査区土層断面図
- 第39図 南調査区遺構全図
- 第40図 南調査区等高線図
- 第41図 旧河道2土層断面図
- 第42図 旧河道2内上層木器出土状況図(1)
- 第43図 旧河道2内上層木器出土状況図(2)
- 第44図 旧河道2内上層木器出土状況図(3)
- 第45図 溝2内出土の土器(1)
- 第46図 溝2内出土の土器(2)
- 第47図 溝2内出土の土器(3)
- 第48図 溝3内出土の土器(1)
- 第49図 溝3内出土の土器(2)
- 第50図 土墳墓内出土の土器
- 第51図 方形周溝墓状遺構関連の土器
- 第52図 北調査区包含層内出土の土器
- 第53図 旧河道2内出土の土器
- 第54図 旧河道2内出土の銅銭拓影
- 第55図 堂田遺跡第2次確認調査出土の縄文土器
- 第56図 旧河道2内出土の木器(1)
- 第57図 旧河道2内出土の木器(2)
- 第58図 旧河道2内出土の木器(3)
- 第59図 旧河道2内出土の木器(4)
- 第60図 北調査区出土の石器
- 八反長遺跡(昭和60年度)
- 第61図 遺構全図
- 第62図 溝内出土の土器(1)
- 第63図 溝内出土の土器(2)
- 第64図 溝内出土の土器(3)
- 第65図 溝内出土の土器(4)
- 第66図 出土土器の拓影
- 第67図 弥生時代末から古墳時代の土器
- 第68図 出土の須恵器・陶器
- 第69図 出土の備前大甕
- 第70図 自然流路出土の木器(1)
- 第71図 自然流路出土の木器(2)
- 第72図 出土の石器(1)
- 第73図 出土の石器(2)
- 第74図 昭和55年度・57年度遺構図
- 第75図 昭和57年度・60年度遺構図

表 目 次

- 表1 年度別調査表
表2 周辺の遺跡地名表
表3 出土石器組成表
表4 出土石器観察表
表5 出土石器観察表
表6 甕における施文別分類表

写真図版目次

- 図版1 両遺跡周辺航空写真
堂田遺跡
図版2 上：トレンチ調査状況（東より） 中：旧流路砂礫層断面（東より）
下：黒色ビート層断面（東より）
図版3 出土の土器（13は須恵器、他は縄文土器）
図版4 出土の縄文土器
図版5 出土の石器
八反長遺跡（昭和55年度調査）
図版6 上：調査区全景（西より） 中：木器出土状況（東より） 下：木器出土状況
（北より）
図版7 上：水路1と杭列（東より） 下：水路1と杭列（北より）
図版8 上：木器出土状況（南より） 中：木器出土状況（東より） 下：木器出土
状況（東より）
図版9 旧河道内出土の木器
八反長遺跡（昭和57年度調査）
図版10 上：調査区全景（東より） 中：遺跡現状（南より） 下：遺跡現状（北より）
図版11 上：北調査区全景（北東より） 下：溝1内杭列（南より）
図版12 上：北調査区全景（西より） 中：溝2断面（西端） 下：溝2断面（中央）
図版13 上：溝2内木礎状木器出土状況（西より） 下：同上（北より）
図版14 上：溝2内前期弥生土器出土状況 中：同上 下：同上
図版15 上：土墳墓（東より） 中：同上（南より）
下：土墳墓と掘立柱建物址（東より）
図版16 上：方形周溝墓状遺構（南より） 中：同上（東より） 下：壺棺出土状況
（西より）

図版17 上：旧河道2全景（東より） 中：堤状遺構と杭列（東より）
下：同上（西より）

図版18 上：旧河道2内木器出土状況（西より） 中：同上（東より）

図版19 旧河道2内木器出土状況

図版20 溝2内出土の土器（1）

図版21 上：溝2内出土の土器（2） 下左：溝3内出土の土器
下右：方形周溝墓状遺構出土の土器

図版22 旧河道2内出土の土器・銅銭

図版23 旧河道2内出土の木器（1）

図版24 上：旧河道2内出土の木器（2） 下：出土の石器（5は北調査区出土）

八反長遺跡（昭和60年度調査）

図版25 上：調査区全景（南より） 下：調査区全景

図版26 上：溝2断面 下：溝1・2断面（右：溝2）

図版27 上：溝1内土器出土状況 中：火鑽臼出土状況 下：樋の子出土状況

図版28 上：紡織具出土状況 中：農具出土状況 下：盤出土状況

図版29 溝内出土の土器（1）

図版30 上：溝内出土の土器（2） 下：出土の石器

図版31 出土の木器

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経過

水尾川は姫路市内を南北に流れる船場川の支流である。この水尾川はたびたび氾濫を繰り返し、下流域に大きな被害をもたらすことから県姫路土木事務所によって改修事業が計画された。改修事業に伴い、事前に埋蔵文化財の確認調査が行われた結果、昭和40年代には、兵庫県教育委員会などによって桜ノ坪遺跡（昭和45年）、権現遺跡（昭和46年）などの発掘調査が行われている。

昭和50年代にはいと、姫路市岡田・土山・西庄地区など、山陽本線以北の改修工事が計画され、昭和53年度、昭和56年度、昭和61年度、昭和62年度の4回に分けて確認調査を行った。この結果、岡田地区内の2か所で遺構が発見され、小字名をとってそれぞれ堂田遺跡と八反長遺跡と名称が与えられた。

堂田遺跡は昭和40年頃に水路の付け替え工事中に発見された地点から西数メートルの距離にあり、昭和55年度に100㎡を対象に全面調査を行った。また、昭和57年度にJR山陽本線の南側の改修地内に試掘グリッドを2か所設定したが、遺跡はこの範囲までは及んでおらず、遺構は見られなかった。

八反長遺跡については、昭和55年度には対象面積1035㎡のうち、岡田橋の橋脚部分225㎡の発掘調査を先行して行い、昭和57年に残り810㎡の発掘調査を行った。また、昭和57年には、全面調査と並行して昭和53年度の試掘結果から必要とされた北側の地区の第2次確認調査を実施した。この結果、弥生時代の溝・遺物包含層などの遺構が検出され、新たに3820㎡が全面調査必要地区となり、このうち2000㎡については確認調査に引き続いて全面調査を実施した。残り1820㎡については、昭和60年度に発掘調査を実施し、八反長遺跡の全調査を完了した。

表1 年度別調査表

| 調査地区 | 調査年度 | 調査 | 調査者担当者 | 備考 |
|-----------------------|-------|----|------------------|-----------------------------|
| 岡田地区 | 昭和53年 | 確認 | 松下勝・深井明比古 | 堂田遺跡・八反長遺跡が全面調査対象遺跡に。 |
| 堂田遺跡 | 昭和55年 | 全面 | 松下勝・山本三郎 水口富夫 | |
| 八反長遺跡南地区 (第1次全面調査) | 昭和55年 | 全面 | 松下勝・山本三郎 水口富夫 | 八反長橋脚範囲のみ |
| 西庄・土山地区 | 昭和56年 | 確認 | 森内秀造 | 全面調査対象遺跡なし |
| 八反長遺跡南地区 (第2次全面調査) | 昭和57年 | 全面 | 森内秀造・平田博幸 | 第1次調査の継続地区 |
| 八反長遺跡 (第2次確認調査) | 昭和57年 | 確認 | 森内秀造・平田博幸 | 3820㎡が全面調査対象に (八反長遺跡北地区) |
| 八反長遺跡 北地区第1次全面調査 | 昭和57年 | 全面 | 森内秀造・平田博幸 | |
| 八反長遺跡 北地区第2次全面調査 | 昭和60年 | 全面 | 吉田昇・西口圭介 | 昭和57年調査の継続地区 |
| 土山地区 | 昭和61年 | 確認 | 森内秀造 | 全面調査対象遺跡なし |
| 土山地区 | 昭和62年 | 確認 | 大平茂・村上泰樹 | 全面調査対象遺跡なし |

第2節 調査の体制

6次にわたる発掘調査時の兵庫県教育委員会社会教育・文化財課の組織、およびその後の兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所での3カ年におよぶ整理作業の体制は下記に示すとおりである。

昭和53年度・第1次確認調査

社会教育・文化財課 課長・林五和夫／参事・田中幹雄／埋蔵文化財係長・村上敬揚／主任・山本三郎／技術職員・吉田昇

昭和55年度・堂田遺跡、八反長遺跡全面調査

社会教育・文化財課 課長・藤和重喜／参事・田中幹雄／課長補佐兼埋蔵文化財係長・池田義雄／主査・大村敬通／技術職員・吉田昇、深井明比古

昭和57年度・八反長遺跡第2次確認調査および全面調査

社会教育・文化財課 課長・藤本繁／文化財担当参事・吉本芳郎／埋蔵文化財調査係長・大村敬通／主任・西口和彦、小川良太／技術職員・水口富夫

昭和60年度・八反長遺跡全面調査

社会教育・文化財課 課長・北村幸久／文化財担当参事・森崎理一／埋蔵文化財調査係長・榎本誠一／主査・井守徳男

昭和61年度・土山散布地確認調査、および整理作業

社会教育・文化財課 課長・北村幸久／文化財担当参事・森崎理一／課長補佐兼埋蔵文化財調査係長・大村敬通／主査・井守徳男／技術職員・渡辺昇／補助員・高島千恵子、前田陽子、早川亜紀子、小川美奈、松本諒、出田恵子、石野照代、吉田圭子

昭和63年度整理作業

社会教育・文化財課 課長・中根孝司／文化財担当参事・森崎理一、日野和広／課長補佐・松下勝／主査・小川良太／主任・岡田章一／補助員・中納久美代、小川真理子、八木和子

平成3年度整理作業

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 所長・内田隆義／副所長・駒井功／整理普及課長・松下勝／課長補佐・小川良太／嘱託職員・広戸紀子、八木和子、片岡喜久子、本窪田英子、茨城恵美子、杉本淳子、石野照代、吉田優子、遠藤奈都子

河川の改修工事に先行した調査のため発掘調査も数年にわたり、その後の整理作業も大変不規則な形態となったが、ここに無事刊行することとなりました。10年以上にも及ぶ間、多岐にわたりご協力くださいました兵庫県姫路土木事務所および地元関係者の方々、さらに奈良国立文化財研究所・姫路市教育委員会をはじめ多くのご助言を頂きました各関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

第2章 遺跡の調査

第1節 遺跡の歴史的環境

堂田及び八反長遺跡は姫路市街地の南西部に位置し、標高8m前後の沖積平野に立地する。古夢前川と船場川に挟まれた東西2km幅の平野部は播磨地方でも比較的遺跡の密度の高い地域である。

学史的にも著名な辻井遺跡は、従来から白鳳時代の寺院址もしくは官衙推定地(草上駅家)として知られていたが、近年の調査で縄文晩期前半の墓棺や弥生時代中期～後期の集落址が発見された。

名古山遺跡では弥生時代中期後半の住居址内から袈裟髹文銅鐙の跡型が、今宿丁田遺跡では包含層から弥生時代中期後半の土器と共に扁平紐式四区画袈裟髹文銅鐙の跡型が出土している。同一層からは吹子口・鉾澤も発見されている。また、縄文時代晩期～弥生時代中期にわたる資料も得られている。

八代深田遺跡は明確な遺構が検出されていないが、弥生時代中期後半から開始される遺跡である。中期後半の遺物は、播磨の中でも特異な様相を示している。この傾向は、先の名古山遺跡や今宿丁田遺跡でも指摘されているところである。すなわち、播磨的な特徴をもつ土器の様相を示すよりも摂津に近い様相を示している。この事実、後述するように同じ船場川流域に位置する古墳時代の遺跡である長越遺跡や橋詰遺跡では、庄内型甕を多く採用していることでも軌を一にしており、今後この地域の動向を知る上で多くの示唆を与えてくれるであろう。

辻井遺跡は、縄文時代中期後半にその初現をみることができ、千代田遺跡を北限とする船場川流域遺跡群(仮称)の多くは、縄文時代後半もしくは晩期と弥生時代前期の土器を共存している。しかし、弥生時代前期前半の土器を伴わないのは、他の播磨地域出土のそれと同じである。

千代田遺跡は後期前葉と前期後半が、橋詰遺跡は後期後葉・晩期後半および弥生前期後半が、権現遺跡・堂田遺跡は晩期前半と前期後半とが伴出している。

近年、土地区画整理事業によってこの地域が発掘調査の対象になり、調査がすすめられている。未だ全域の調査が終了していないためその全容を知ることにはできないが、少しずつではあるが実態が把握されつつある。船場川東第3地点では縄文時代晩期前半の土壇・溝を中心に磨石・石棒・石錘・石鏃等が出土しており、姫路平野の縄文遺跡の中では最南端に位置し、海岸まで1kmの標高2.5mに位置している。また、第6地点では弥生時代前期中葉の土器が、縄文時代晩期の土器と共に出土している。

この地域は概観したように、縄文時代晩期以降弥生時代前期の遺跡が立地していたことは事実であるが、その存在は極めて希薄で弥生時代中期の遺跡は殆ど皆無に等しく、再開発が認められるのは弥生時代後期になって比較的安定した長越遺跡をはじめとして、船場川東・中地天神などの諸遺跡が出現し、奈良時代に一時衰微するが加茂構居に代表されるような遺跡が、中世以降再び注目されるようになる。

註) 地名表作成等については姫路市教育委員会 山本博利氏のご教示を受けた。



大日本帝國陸地測量部明治26年測量
2万分1地形圖 姫路及赤穂近傍十號十一號使用

第1圖 周辺遺跡分布圖

表2 周辺の遺跡地名表

| ＼ | 遺跡名 | 所在地 | 遺構 | 遺物 | 文献 |
|----|-------|-----------|---------------------------|---------------------------|-------------|
| 1 | 辻井 | 姫路市辻井 | 竪穴・土壇・住居址・ 掘立柱建物址・井戸・溝 | 土器・陶磁器・瓦・木簡・鉄器・木 器・石器 | ① |
| 2 | 名古屋山 | 姫路市山畑新田 | 住居址 | 土器・銅鐸鉤型・磨製石剣・石鏃 小玉 | ② |
| 3 | 八代深田 | 姫路市八代 | 枕列 | 土器・瓦・石器 | ③ |
| 4 | 今宿鱒ノ井 | 姫路市今宿 | 溝・土壇・枕列 | 土器 | ④ |
| 5 | 今宿丁田 | 姫路市今宿 | 住居址・土壇・柱穴 | 土器・銅鐸鉤型・石器 | ⑤ |
| 6 | 千代田 | 姫路市千代田町 | | 土器 | ⑥ |
| 7 | 八反長 | 姫路市岡田 | 溝 | 土器等 | 本 報 告 |
| 8 | 堂田 | 姫路市岡田 | 貝塚 | 土器等 | |
| 9 | 橋詰 | 姫路市延末 | | 土器 | |
| 10 | 小山 | 姫路市延末 | | 土器・石器 | ⑩ |
| 11 | 長越 | 姫路市飯田 | 住居址・土壇・溝 掘立柱建物址 | 土器・石器・木器・祭祀遺物 | ⑪ |
| 12 | 船場川東 | 姫路市龜山・飯田 | 住居址・土壇・溝・掘立柱 建物址 | 土器・石器・木器・瓦・陶磁器 | ⑫ |
| 13 | 中地天神 | 姫路市 | | | |
| 14 | 横権現 | 姫路市飾磨区横 | 溝 | 土器・木器 | ⑬ |
| 15 | 桜ノ坪 | 姫路市飾磨区今在家 | 土壇 | 土器・石器 | ⑭ |
| 16 | 加茂 | 姫路市飾磨区加茂 | 堀・掘立柱建物址・土壇 土塁・槽状遺構・井戸 | 土器・陶磁器・瓦・鉄器・銅器・ 石製品・木器 | ⑮ |

文 献

- ① 今里幾次「姫路市辻井遺跡—その調査記録—」昭和46年
松本正信・加藤史郎「辻井遺跡発掘調査報告書」姫路市教育委員会 昭和46年
姫路市教育委員会「姫路市辻井遺跡現地説明会資料」昭和57年
秋枝 芳・山本博利「辻井遺跡」『兵庫県埋蔵文化財年報』昭和60年
- ② 梅原末治「新出土の銅鐸の銘范片其他」『古代学研究』25 昭和45年
上田哲也・河原隆彦「姫路名古屋山遺跡と銅鐸の鉤型」『播磨の弥生文化』昭和41年
- ③ 秋枝 芳・森下大輔・山本博利「八代深田遺跡」姫路市教育委員会 昭和52年
- ④ ⑤に同じ
- ⑥ 松本正信「今宿丁田遺跡出土の銅鐸鉤型について」『考古学研究』105 昭和55年
秋枝 芳・山本博利「今宿丁田遺跡」『兵庫県埋蔵文化財年報』昭和60年
- ⑦ 杉原莊介・小林三郎「兵庫県千代田遺跡」『日本農耕文化の生成』昭和36年
- ⑧ 浅田芳朗・今里幾次「播磨橋詰遺跡発掘調査略報」昭和35年
- ⑨ 今里幾次「播磨小山遺跡埋蔵地点の弥生土器」『古代学研究』32 昭和37年
- ⑩ 兵庫県教育委員会「播磨・長越遺跡—昭和49年・50年度調査報告書—」昭和53年
- ⑪ 姫路市教育委員会「船場川東土地区画整理事業に伴う発掘調査現地説明会資料」平成元年
姫路市教育委員会 山本博利氏のご教示による。
- ⑫ 兵庫県教育委員会「播磨・権現遺跡—兵庫県姫路市権現遺跡調査概報—」昭和57年
- ⑬ ⑭に同じ
- ⑮ 秋枝 芳・山本博利「加茂遺跡」姫路市文化財調査報告Ⅴ 昭和50年

第2節 調査および遺跡の概要

水尾川河川改修工事の施工事に先行する状況で調査を実施したため、6次（6年度）にわたる継続的な調査の形態を取ることとなった。最初の埋蔵文化財に関連する発掘調査は昭和53年度の確認調査であり、以後昭和55年度・56年度・57年度・60年度と全面調査および確認調査が継続され、昭和61年度の「土山散布地」の確認調査を以て、同河川改修工事に伴う「堂田」・「八反長」（および「土山散布地」）両遺跡の発掘調査をすべて完了した。

「堂田」・「八反長」両遺跡の調査の発端となったのは、昭和53年度に実施したJR山陽本線の北側（遺物散布地の南端にあたる）から市道荒川97号線までの確認調査であった。この調査の結果、岡田字堂田で縄文土器を中心とする良好な包含層を確認し、さらに字八反長においても多数の枕列および木品が出土したため、兵庫県道路土木事務所と協議の結果、この2地点に関して以後継続的な全面調査を行うこととなった。

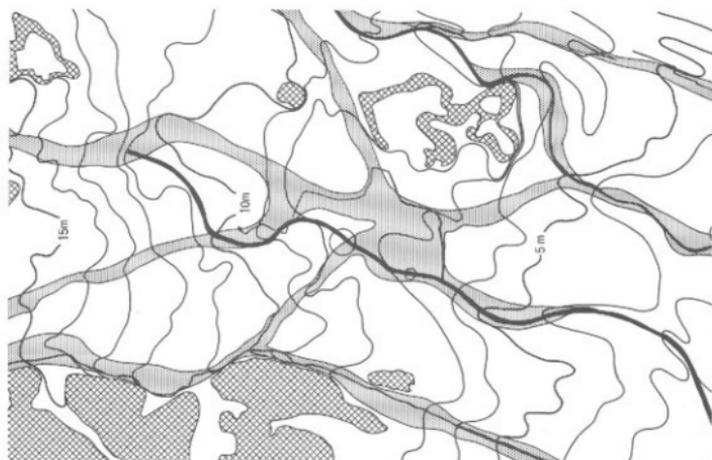
昭和55年度の調査は確認調査の結果を受け、上記2地点の全面調査を行った。字堂田＝「堂田遺跡」の調査地点は、旧河道内のため幅4m、長さ40mのトレンチ調査に止めたが、縄文時代から奈良時代にまたがる良好な遺物包含層を確認するとともに、各時代にまたがる多くの土器・石器等が出土した。一方の字八反長＝「八反長遺跡」では、岡田集落に入る市道荒川17号線の橋梁西部分（約270㎡）の全面調査を行った。その結果、旧河道内より大足を中心とする弥生時代後期の木器が多数出土した。

続く昭和57年度は「八反長遺跡」の前回の調査区の北側を対象とし、第2次確認調査によって調査区を絞り込み、「南調査区」（約810㎡）と「北調査区」（約2000㎡）の全面調査を実施した。【北調査区】では上層で平安時代後半から中世の独立柱建物址と古墳時代初頭の方形周溝墓状の遺構を確認し、その下層では弥生時代前期の人工掘削による溝を検出した。弥生時代前期の遺構の一部（溝）はさらに北側に伸びており、少なくとも市道荒川97号線までの全面調査の必要が生じてきた。【南調査区】では前回検出した弥生時代前期から平安時代にまたがる旧河道の延長部分を調査した。その平安時代と考えられる埋土内には、祭祀具・農具をはじめとする多数の木器が包含されていた。

昭和60年度の全面調査地区は昭和57年度に調査した「八反長遺跡」の北隣接地区であり、市道荒川97号線までの約1500㎡を全面



第2図 全面調査区位置図



第3图 高田川周边等高线·旧河道复原图



第4图 高田川周边地形图

調査した。調査により弥生時代前期の溝を2本確認したが、その内の1本は昭和57年度調査の北調査区北端部で確認していた溝状遺構につながるものである。これとは別に、弥生時代前期から古墳時代にまたがる護岸用の杭列を伴った旧河道も検出しているが、第1次・第2次の調査で検出した一連の旧河道とは流れの異なるものである。

昭和61年度・62年度の調査は、「土山散布地」の確認調査である。「八反長遺跡」昭和60年度調査区の北側から山陽新幹線までを確認調査したが、かなり大規模な旧河道内にあたっていため少量の土器は出土したが、遺構はまったく存在しなかった。よって、この散布地に関しては、全面調査の必要はないものと判断した。以上が、調査の概要である。

「堂田」・「八反長」両遺跡の概要について述べると、この両遺跡の立地する手柄山南西域の平野部は、現海岸線から約2km内陸部にあるにもかかわらず海拔約8m前後であり、かなり低い海拔となっている。水尾川周辺域では、河川改修以前は毎年のように家屋への浸水が続いていたほどである。地形図・等高線図等から遺跡周辺の旧地形を復元した第3図をみると、現・旧河道が手柄山の西裾部に集結し、そこから海岸部に向かって分流している様子がかがえる。各旧河道間には顕著な微高地が形成されており、明治期から継続する古い集落はいずれもこれらの微高地上に立地していることが知れる。当然、集落遺跡も立地条件の良い前記の微高地上に存在しているものと思われる。

「堂田遺跡」の場合、調査地が集落遺跡に隣接する旧河道内に形成された貝塚部分の調査のため、遺構がまったく確認できなかった。そのため、遺跡の性格はほとんど不明である。遺跡の中心部分は、西側の微高地にある井ノ口集落の下層にあると思われ、縄文時代晩期の集落遺跡を最古とし、中世まで断続的に占有されていたものと思われる。縄文時代晩期の貝塚はハマグリ等海水産の貝殻で形成されており、土器類と共に石棒をはじめとする良好な石器類も含まれている。また、奈良時代の播磨国分寺式軒丸瓦も少量出土しており、ますます複雑な遺跡の状況を示している。本遺跡の解明は、むしろ今後の調査にかかっている。

一方、「八反長遺跡」は第3図に示すとおり、「堂田遺跡」とはまったく異なる微高地上に存在する遺跡である。昭和55年度・57年度の調査区は、基本的には北西から南に流れる旧河道内の範囲にあたり、この旧河道は縄文時代晩期から平安時代まで稼働していたことが、調査の結果判明した。弥生時代後半頃には河道中央部に灌漑施設を想起させる護岸杭を伴った堤状の遺構が構築され、それ以降平安時代には湿地化（水田化）してしまい、そこに多くの木器類が流れ込んだものと思われる。木器類に未使用の大足とともに、斎串を中心とする祭祀具が多数見られる点も、近くに集落址が存在することを傍証している。また、この多数の斎串類の存在は、本遺跡の性格を顕著に特徴付けるものでもある。昭和57年度北調査区・昭和60年度調査区は、前記の旧河道で隔てられた北東側の小さな微高地、もしくは河道内の中洲状の高まりに相当するものであり、ここには弥生時代前期の溝、同後期の墓址、さらに古墳時代初頭の方形周溝墓状遺構が営営されているが、いずれも遺跡の周辺部に存在する遺構であり、遺跡の中心はやはり西側の岡田集落微高地の下層に存在しているものと思われる。

以上、2遺跡の調査から手柄山南西域の平野下流部に発達した多くの微高地の一部には、少なくとも縄文時代晩期から弥生時代前期の時期に集落が形成され始めることが分かる。水尾川の東を流れる船橋川下流域でも、縄文時代晩期と弥生時代前期の住居址が重複する遺跡が発見されている。こうした事例はしだいに増加する傾向にあり、姫路平野南西部の河川下流域（沖積地）における遺跡の様相は、大きく変化しようとしている。

第3章 確認調査

第1節 確認調査

水尾川は古夢前川の旧流路のひとつであり、その湧水点は現在でも姫路市岡田地区に2箇所存在する。一方は集落の北西端であり、他方は南端に位置し、往時を偲ばせるように湧き出している。そして、水尾川から段丘崖へ取水している井堰や湧水地がほかにも数箇所ある。平常時数mにも満たない川幅の流路を播磨高瀬対策事業のひとつとして、幅20mの川に付け替えようと昭和40年に計画された。

事業は下流から実施されたため、河口からJR山陽本線までが第1期工事となった際調査が実施されたのは、「桜の坪遺跡」と「構権現遺跡」であった。当時県内における研究者と行政内研究者は、お互いの立場を尊重しつつ埋蔵文化財のあるべき姿を模索していた時期であった。その最も先駆の例が、『兵庫県遺跡地名表』として結実している。当地域は早くから今里幾次氏の努力によって注目されていたことも幸いし、播磨在住の4氏による分布調査が実施され、その成果として上記2遺跡の発掘調査となった。

しかし成果はそれのみに終わらず、その後の調査に発展的に長越遺跡を初めとする船場川東・大井川への調査へと続いていることは、周知の事実である。開発事業に先立って分布調査を実施し、その成果に担って確認調査を、そして全面調査という図式は、山陽新幹線・中国縦貫自動車道の建設以来既に確立されていた。

その後10年を経て、第2期工事としてJR山陽本線から山陽新幹線に至る延長約900m間が工事対象区間となった。



第5図 昭和53年度確認グリッド配置図

1. 昭和53年度確認調査

宅地開発に伴って堂田遺跡が、山陽新幹線の建設に伴って西庄遺跡が、それぞれ南北端で確認されていたので、全面調査の実施箇所とその範囲の確認等を主な目的として実施した。川幅（約20m）の両端近くに2m×2mのグリッドを、また必要に応じて中心付近にもグリッドを設定した。未買収地区や調査不可能地区に関しては、グリッドの設定を適宜変更した。

J R山陽本線に近い1G～5G、51G～59Gでは耕土直下から砂礫層が厚く堆積しており、縄文晩期前半の土器をはじめとてかなり摩滅した状態の各時代の土器と石器が出土した。

7G～28G、62G～64Gには暗褐色シルトが堆積し、それは15G～18G付近が最も厚かった。12Gからは枕桁が、62Gではナスビ形跡の未完成品が出土した。遺物は少ないが摩滅を殆ど受けていない。

29G～39G、65G・66Gは耕土直下から黄白色シルトであり、今回の調査予定地域内では唯一水の流れの痕跡が認められない地区である。

40G～44G、67Gは15G～18Gと同様の腐食土の堆積が見られたが、遺物の出土は極わずかである。

45G～50Gは黒褐色シルトを含む礫層であるが、遺物の出土は皆無である。

2. 昭和61年度確認調査

調査対象地区は、J R山陽本線とJ R姫新線に囲まれた地区である。昭和56年2月19日の分布調査結果に基づき、2m×2mの調査グリッドを設定し確認調査を実施した。調査区は次の3つに分かれる。

調査1区（G1～G8）

最も南に位置する地区である。基本層序は耕作土、灰褐色粘質土、暗褐色混礫粘質土（地山）となる。灰褐色粘質土からは若干の磨滅した土器片が出土したが、遺構は検出されなかった。

調査2区（G9～G15）

調査対象地区の中央に位置する地区である。遺物が比較的多く出土した地区である。基本層序は耕作土、灰褐色粘質土（遺物包含層）、黒褐色混礫粘質土（地山）・暗青灰色粘土（地山）となる。調査グリッドG12から古墳時代の須恵器や木器などの遺物を包含した幅約2m深さ約30cmの浅い溝を検出したが、このほかには集落に関係した遺構は発見されなかった。

調査3区（G14～G20）

最も北に位置する地区である。耕作土の直下は無遺物の黒褐色混礫粘質土層であり、遺構は検出されなかった。



第6図
昭和61年度確認グリッド配置図

3. 昭和62年度確認調査

調査対象地区は、姫路市土山5丁目に位置する。分布調査を実施した結果、土器の分布が認められたため、確認調査を実施した。当初2×2m規模のグリッドを17カ所設定したが、No. 1～5は掘削深度が深いため、2×4mの規模に拡張した。

調査の結果、調査区全域で古墳時代後期の土器が出土したが遺構は検出されなかった。そこで、比較的土器の出土量が多い調査区の中央部に2×15m (No. 8) のトレンチを新たに設定し調査したが、遺構は検出されなかった。



第7図 昭和62年度確認グリッド配置図

第2節 遺物

ここに示す確認調査の遺物は、昭和53年度に実施した堂田・八反長地区の遺物（土器1～18、石器1～8、木器1・2）と昭和56年度に実施した土山地区の遺物（土器19～22）である。

昭和53年度の確認調査では、堂田地区の1・53・54Gの砂礫層から縄文土器、弥生土器、須恵器、石器を中心に2,588片の遺物が出土し、八反長地区の確認調査グリッド総数67カ所で3,711片の遺物が出土した。これらの多くは遺構に伴う遺物ではないと考えられるが、付近に遺構の存在を考えさせるものであった。八反長地区の13Gや62Gからは弥生土器を中心に木器等も出土した。

土器

1. 縄文土器 [(1)は62G、(2～4)は1G]

(1～4)は縄文晩期の土器である。(1・2)は粗製の深鉢で、(1)は表面を糸篋で調整し、口縁部は面取りする。(2)は胴部がやや膨らみ、紡錘形をなす。(3)は晩期中葉の浅鉢で沈線が施される。(4)は滋賀県N式か船橋式の突帯文の深鉢である。突帯刻みは平面D字形で、口縁部は丸みを帯びる。

2. 弥生土器 [(5～8・10)は1G、(11)は62G、(20)は土山21G]

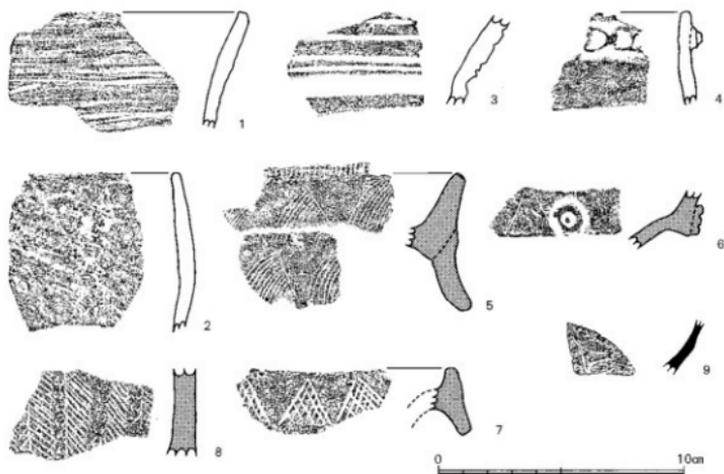
第9図の(10)は八反長地区全面調査時の出土遺物と接合した資料である。これらは前期の中型壺で、口縁端部に一条、頸部に7+α条のヘラガキ沈線を有する。(20)の胎土は粗く、前期の土器底部である。(5～7)は壺の複合口縁部であり、外面に鋸歯文や円形浮文を施す。(5)は端部を上下に大きく拡張し、二段の鋸歯文を施し、口縁端部に刻み目がある。(8)は斜線文と小型の竹管文を並列する磨削部であろう。(10)は壺口縁部で頸胴部の境に小型の刻み目を施す。(11)は底部外面に木葉痕を残す杯である。(20)以外の土器は後期～古墳時代初頭の資料である。

3. 土師器 [(12)は53G]

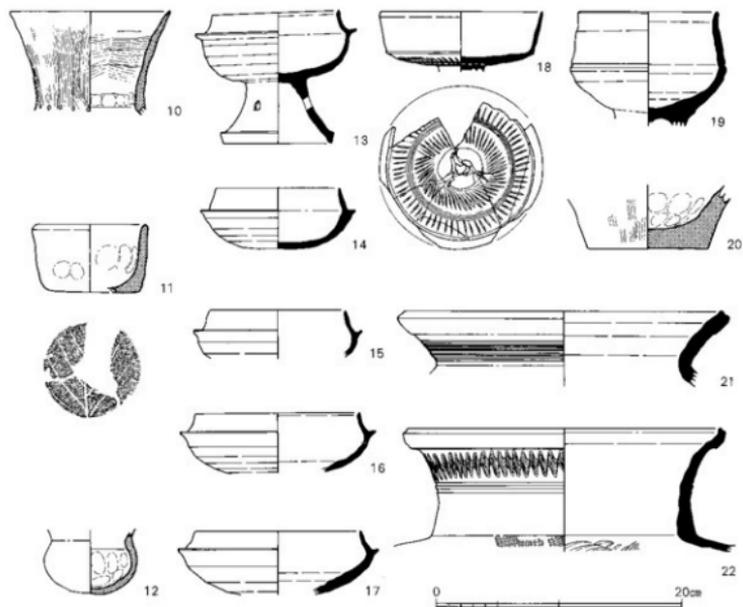
(12)は口縁部を欠き、頸胴部の屈曲は鈍く明確な稜線はない。内面にユビナデによる凹部を有する小型丸底壺である。

4. 須恵器 [(9)は13G、(13～18)は1G、以後土山。(19)は12G、(21)は3G、(22)は12G]

(13)は小型の短脚で三方一段透かしを有する。TK47型式並行の有蓋高杯である。(18)は長脚二段透かしの無蓋高杯で杯底部外面に篋状工具による二段の放射状文様を施す。TK209型式に並行する。



第8図 昭和53年度確認調査時出土縄文土器・弥生土器拓影



第9図 各年度確認調査時出土の土器

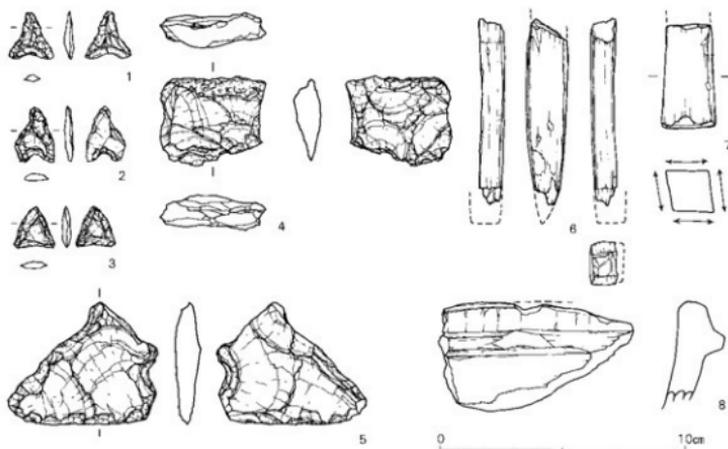
(14)は口縁の立ち上がりのきつい杯身で、(16)は口縁端部内面に緩やかな稜をもち、大型である。(17)は口縁部の立ち上がりは緩やかで大型である。(19)は杯部が高く、無蓋の高杯である。(21)は口頸部下半に条線、(22)は波状文を施す。

石器 [(1)は56G、(2~4)は1G、(5)は12G、(6)は26G、(7)は53G、(8)は39G]

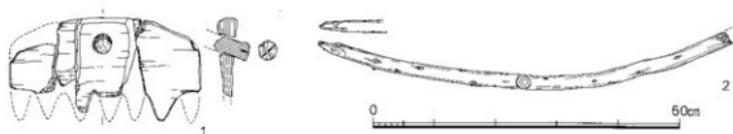
(1)は両面とも細部調整された凹基無基式石鏃である。(2)は片面調整で凹部に重点をおいた二等辺三角形を呈する凹基無基式石鏃である。(3)は小型の平基式石鏃で両面とも周縁部に三方からの剥離が目立つ。(4)はササカイト製の楔形石器である。A面は片辺のみ階段状に剥離が認められ、B面では両辺に及ぶ。また側縁は一方からの裁断面が見られる。(5)は両面とも大剥離面を残し、二方向の側縁から細部調整を行い刃部を作る。(6)は全面を磨製した片岩製の柱状片刃石斧の破片で、刃部を欠損する。(7)は砂岩製の砥石である。小口両面を欠損するが、その他四辺は研磨されている。(8)は滑石製の石鍋で鈔付きの羽釜タイプで、鎌倉から室町時代のものである。

木器 [(1)は62G、(2)は1G]

(1)はアカガシ亜属のえぶりである。長方形の上部両肩と左右両端は斜めにカットされ、刃先は鋸歯状に7箇所の突起を持つ。中央上部に着柄し、抜けを防止するための木製楔が十字方向に2本打ち込まれている。(2)は弓の破片である。全体に緩やかな弧状を呈し、端部は削り込まれ尖っている。



第10図 昭和53年度確認調査時出土の石器



第11図 昭和53年度確認調査時出土の木器

第4章 全面調査

堂田遺跡

第1節 遺跡の概要

堂田遺跡は水尾川河川改修事業に伴って、昭和53年度に確認調査を実施した結果、旧国鉄（JR）山陽本線の北側の堂田地区において縄文時代から中世の遺物包含層が確認されたので、改めて昭和55年度に発掘調査を実施したものである。

遺跡はJR山陽本線の北側に位置し、岡田・町ノ坪・中地の3箇所の集落を結ぶ三角形のほぼ中心に所在する。このあたりは旧夢前川の水系に属し、東側の手柄山、西側の四ツ池の間約500mの平野部を旧水尾川の水系が付近の水を集めて南へ流れる。しかし周辺の土層堆積は、夢前川と市川の両水系のものが水路を変更しながら行われたものと理解されている。

堂田遺跡は、昭和42年に宅地造成に伴う排水溝の工事によって縄文土器が出土したことで知られる。縄文時代の集落は、遺跡の周辺をみても比較的多数検出されている。遺跡の北東1kmには晩期後半の妻が1点出土した千代田遺跡、東へ約1kmには手柄山の東に橋詰遺跡・小山遺跡が南北に並ぶ。橋詰遺跡では後期後半と晩期後半、小山遺跡では晩期後半の土器が数点採集されている。一方遺跡の南側では、溝で船場川底から晩期後半の土器が採取されている。これらの遺跡は遺構を伴わないし、また縄文時代の遺物が主体となる遺跡ではなく、むしろ堂田遺跡の縄文土器の出土状況とよく似た傾向を示している。

堂田遺跡の発掘調査は確認調査の結果、遺物が砂礫層から出土したこと、遺物には遺構を伴わないことが明らかであったので、4×40mのトレンチを設定し遺物の出土状況の把握を行うこととした。また、遺跡の周辺の水田との比高を観察すると、今回の河川改修域は約1mほど低くなっており、旧河道内の調査であることも明確であった。

第2節 調査結果

A. 遺構

今回の調査では床土直下から砂礫層があらわれ、そのため遺構はまったく残っていないと考えていたが、現地表下約1mで縄文時代晩期の遺物を含む黒色ビート層を検出できた。

堂田遺跡の基本層序は、表土と床土が安定した堆積状況を示すほかは、ほとんどすべての層位に砂及び礫が混入しており、複雑な土層堆積を示している。

砂及び礫を含んだ土層は黒色シルト系の土と互層であったり、あるいは混じり合っているがそれぞれの層は水平に近い堆積状況を示さず、垂直方向の堆積を認めることのできるものが多い。このことから、当遺跡には旧河道の大規模な氾濫、あるいはある時期の大きな断層が伴っている可能性がある。

遺物の大半を占める古墳時代～中世の遺物は、床土直下の黒色シルトを主体とした細砂と礫が混入す

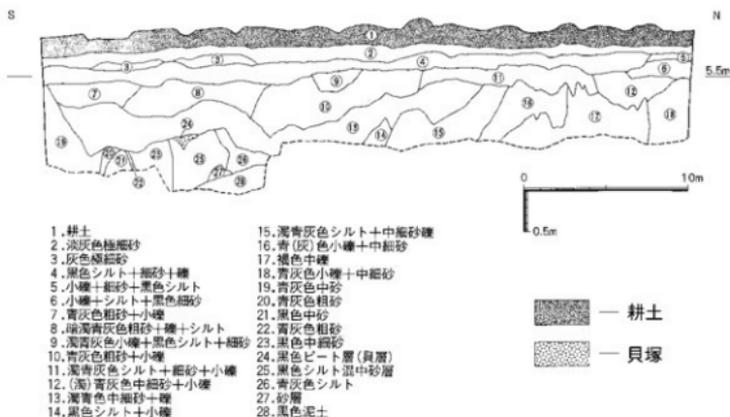
る層④から出土をはじめ、遺物もこの層からの出土が圧倒的に多い。すなわち、この層は砂や礫をもたらした土層の最終段階となっており、この一帯が安定した水田となる直前に堆積した層とみなすことができよう。この層④で出土した遺物は礫層に含まれていながら、器表には磨耗の少ないことが特徴である。また、遺物の中に須恵器の杯類に混じて硯や緑釉土器が含まれていることから、遺跡の周辺に奈良時代以降の官衙的な性格をもった遺跡が存在する可能性がある。

この層④の下は、粗砂を主体とした土層⑦～⑪が20～40cm続く。この土層にも古墳時代～中世の遺物を包含するが量は多くない。

トレンチの南端から北へ27mには、かなり大きな礫が含まれる青色系の砂層⑬があり、この層の中には縄文時代晩期の土器が含まれる。層の厚さは20～40cmあり、縄文土器と共に石棒が1点出土している。

縄文土器を包含する層とその下の無遺物層の間に貝層を含む黒色ビート層の堆積がみられた。黒色ビート層は、断面の観察によれば幅2.1m、深さ10～15cmの規模である。トレンチ内でのビート層の広がりや、西側への掘削状況を勘案すればさほど広い範囲の遺構とは考えられず、その規模は2×1m程度の浅い遺構と想定されよう。ビート層の中には晩期の土器に伴って獣骨（シカ・イノシシ・カワウソ）・貝（ハマグリを主体とする）・魚骨が出土している。

黒色ビート層の堆積が、この遺跡の堆積状況からすれば異質なものであることはいうまでもないが、晩期の単純層がなんらかの原因によって埋没したものであることは資料からみて明らかである。



第12図 南北トレンチ土層断面図

B. 遺物

土 器

1. 縄文土器

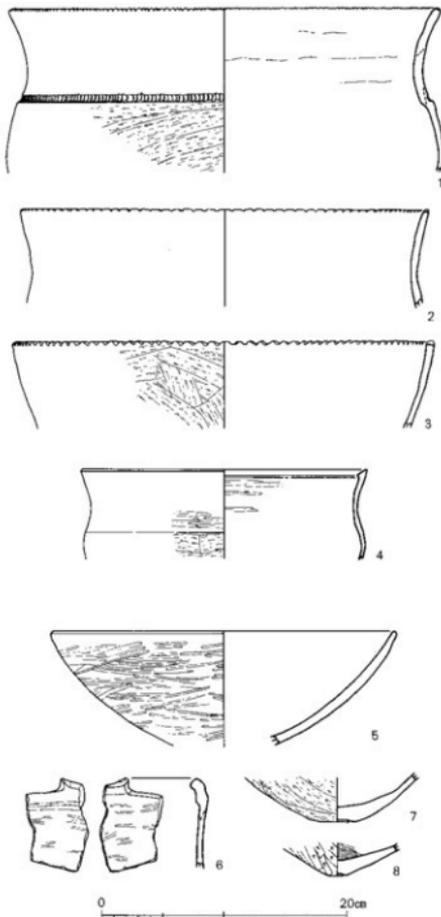
先述したように遺物は旧河道内からの出土であり、層位的には同一層として取り上げざるを得ない。

ただ、トレンチの断面に確認できた黒色泥炭層は明らかに第一次堆積層であり、小規模であるが貝塚として把握できた遺構である。黒色の粗砂に挟まれたピート層（幅2.1m×深さ0.2m）からは、貝類ではハマグリが最も多く、セタシジミ・ツメタガイ・シオフキ等13種類の海水産の貝の他に、シカ・イノシシ・カワウソなどの獣骨、タイ類の魚骨及びウロコが土器と共に発見された。土器は（1～4、16～22）がピート層から出土している。

（3）の浅鉢形土器と思われる以外は深鉢形土器である。（1）は口縁端部に刻み目を施し、頸部と胴部の境界には爪形文を巡らしている。胴部外面はヘラケズリであるが、その他はナデによって調整している。（2・3）の口縁端部にはいずれも刻み目を施している。（3）の外面はヘラケズリ以外はナデである。（4）は口縁端部に刻み目を有しないが、断面三角形で直下に短い沈線を施している。胴部外面以外は丁寧なナデで調整している。（20～22）の頸部と胴部の境界には爪形文を、（18）には凹形の刺突文を有し、胴部外面にはいずれも条痕が認められる。（17・21）には口縁端部から垂下すると思われる爪形文が認められる。

上述した土器以外は旧河道内における砂礫層出土の土器である。

いずれも口縁あるいは胴部に突帯を有しないものである。（9）は口径約



第13図 トレンチ出土の縄文土器（1）

（1～4：ピート層、5～8：砂礫層）

33cmの深鉢で胴部の外面はケズリ、他はナデで仕上げている。また、胴部下半部に焼成後と思われる穿孔がある。

(10~14) も深鉢であるが、

(11) は口縁部直下から二列の筧状工具による刺突文を配し、内面には沈線が部分的に見られる。(10・13) および (14) は口縁部に刻み目を持つが、(13) は緩やかな山形状をなす。

(15) は浅鉢で、内外面とも研磨された精製土器である。

(16~49) はいずれも小片であり、(22~49) が砂礫層出土である。

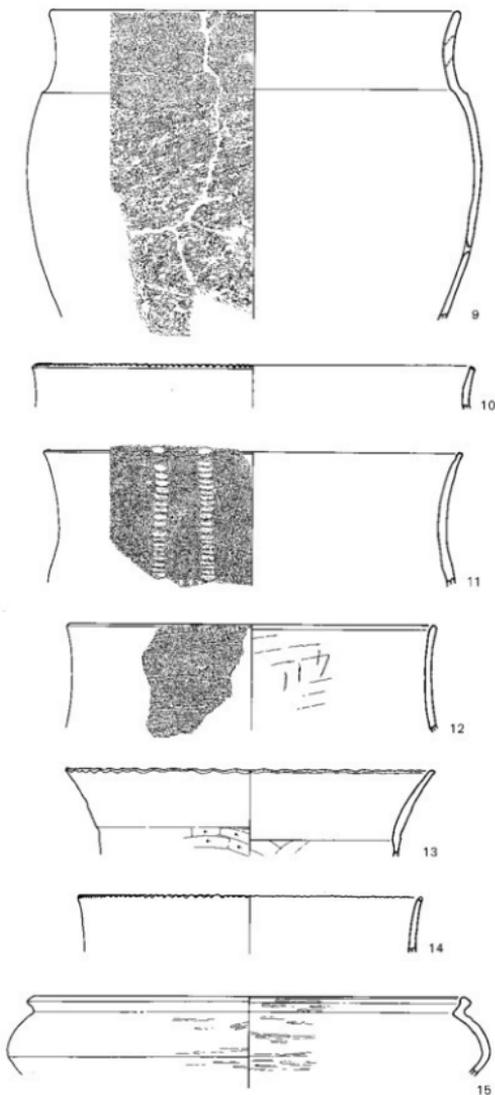
(23) は山形口縁の波頂部に沈線を施し、(45) とともに縄文時代後期の所産と思われる。

(30) の口縁部外面には浅い沈線を施し、胴部境には太い沈線を巡らしている浅鉢である。

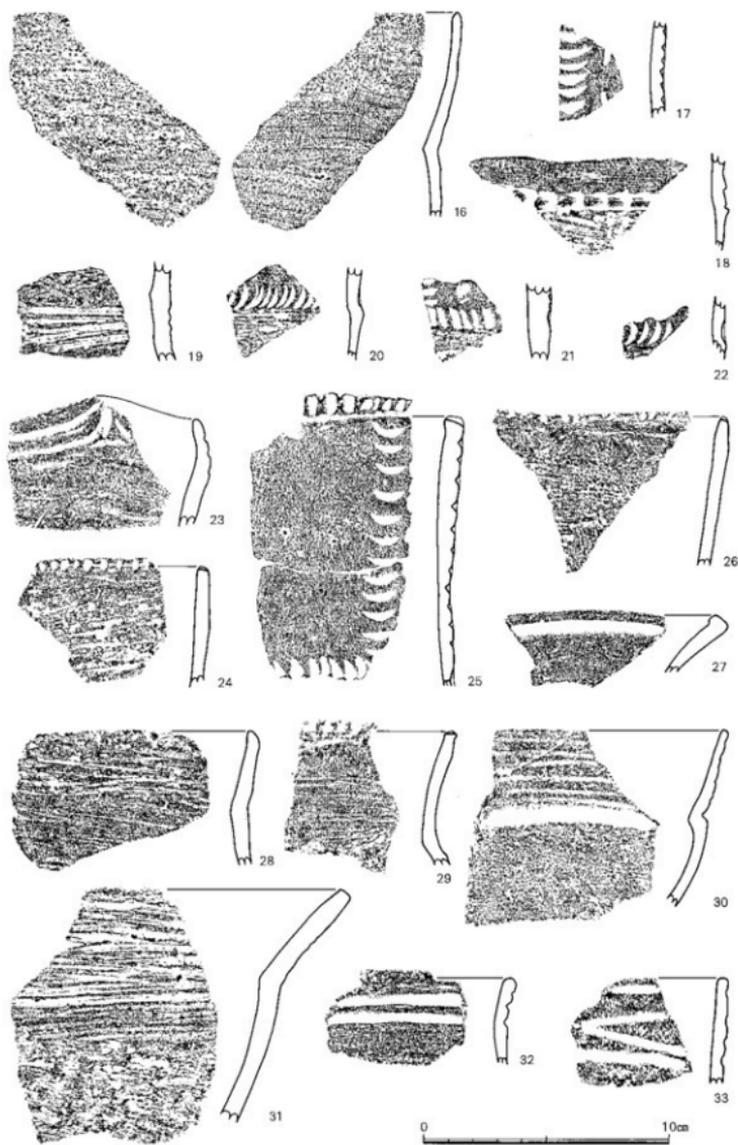
(31) は口縁部外面に条痕を施し、(27) は口縁端部直下に沈線を施した浅鉢である。

深鉢の口縁部には刻み目を持つものとそうでないものがあるが、刻み目を持つものが多い(24~26・29)。口縁直下から胴部境に縦に爪形文(竹管文状工具による)が施されている(25・36・43)。

口縁部と胴部境には施文されている例が圧倒的に多く、半截竹管状工具による刺突文が施されているものが目立つ。



第14図 トレンチ出土の縄文土器(2)



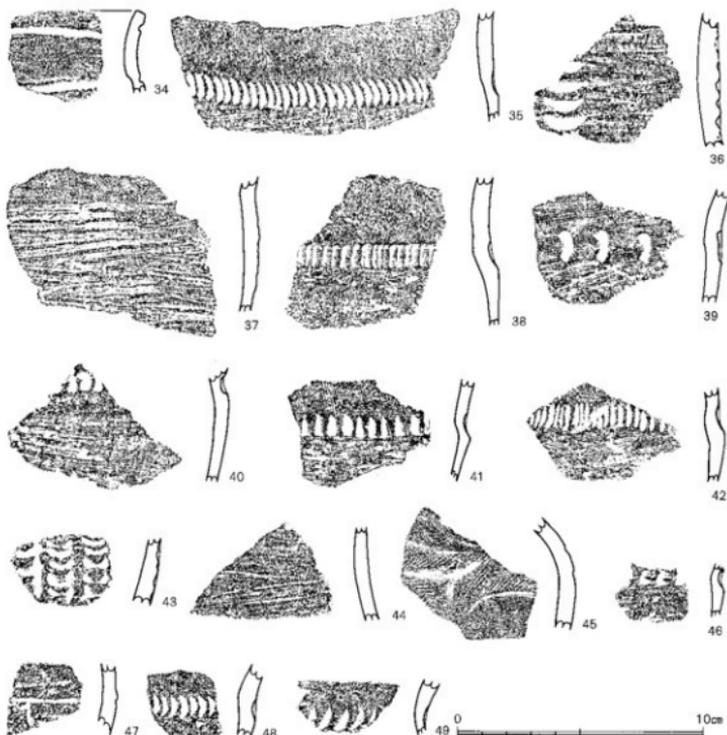
第15図 トレンチ出土の縄文土器拓影(1)

以上、堂田遺跡出土の縄文土器を概観してきた。縄文土器は黒色ビート層出土のそれと、旧河道内出土のものがあるが、ほぼ同一時期の所産と考えられる。

中・西播磨地域では数少ない縄文時代晩期の土器であり、突帯文を有しないことからより古相を示している。深鉢を見ると口縁端部に刻み目を有するものが比較的多く、波状口縁が少ないこと、胴部外面はヘラケズリ、内面は丁寧なナデあるいは磨きを主体としていることから、淡賀里Ⅲb式よりも、平井氏が提唱する谷尻式に近いものとして理解したい。また、中・西播磨地域における縄文時代晩期の遺跡の中では、龍野市門前遺跡（2）とともに晩期後半の土器を伴出しない遺跡として特異な例である。

（註）（1）平井 勝「岡山県における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』10 1988年

（2）松本正信ほか「龍野市とその周辺の考古資料」『龍野市史』第4巻 1984年



第16図 トレンチ出土の縄文土器拓影（2）

2. 弥生土器

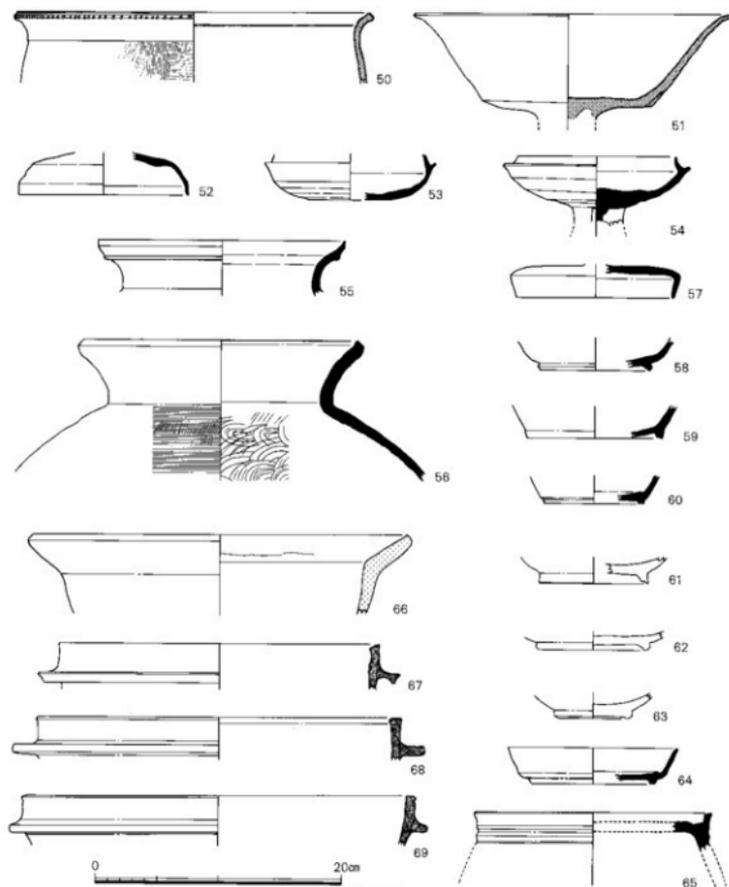
(50) は甕である。外反する口縁端部に沈線と刺突文がある。頸部まではナデ、その下方は刷毛で仕上げ上げる。小破片で、口径は約29.2cmである。

3. 土師器

(51) は高杯で、杯部のみが残存する。外面は縦方向の刷毛の後縦方向のヘラミガキが残る。口縁端部は横位のナデ、以下は横位にヘラミガキするが中程で止まる。口径は、25.3cmである。

4. 須恵器 (52~60)

(52) は蓋で、口径13.7cm。やや外開きの体部に丸味を持った端部が続く。外面には自然釉が付着す



第17図 包含層出土の土器

る。胎土・焼成とも良好。(53)は杯身で、口縁端部を欠損している。

(54)は高杯で、脚部を欠損している。杯部は約半分が残存しており、口径は約12.7cmである。

(55・56)は甕である。(55)は外反する頸部に大ぶりの受け口状口縁が付く。(56)は「く」の字に屈曲した頸部から口縁部までは、内外面ともナデる。胴部内面には同心円印きが明瞭に残る。口径は23.1cmである。(57)は蓋であるが、中央部のつまみ部分が欠損している。口径は12.8cmである。

(58~60)は杯身で、いずれも小破片で器形の全容を知れるものはない。(58~60)とも調整は同一と見られるが、(59)は高台が外側に強く踏張った形をなしている。

5. 緑釉土器 (61・62)

(61)はやや外開きの高台を持つ杯身で、釉は高台外側から体部外面へと続き、内面にもかかる。釉の色調は、深いオリーブ色をなす。胎土・焼成とも良好。(62)は磨耗が激しく、わずかに緑釉の痕跡を見ることができる。高台端部の状況も明瞭でない。釉は、内外面ともに残っており、淡い緑色を呈する。

6. 白磁 (63)

(63)は椀で、底部のみが残る。釉は、内面と高台のいくぶん上方からかかっている。

7. 硯 (64・65)

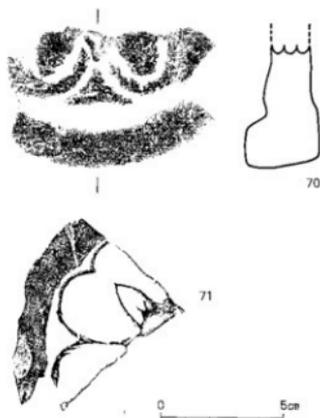
(64)は須恵器杯を転用した硯で、内面底部はなめらかに磨かれている。(65)は円面硯で、わずかに破片が残るのみである。陸部はよく磨かれており、いくぶん凹んだ海部へと続く。脚部の透かしが一部残っているが、全体を推定する資料とはならない。

8. 中世土師器・瓦器 (66~69)

(66)は甕で、磨耗が甚だしい。外開きの分厚い口縁部が付くが、内外面とも調整は不明である。口径は31.0cmである。(67~69)は羽釜である。(67)はシャープな作りとなっているほかは、磨耗している。

瓦 (70・71)

(70)は復弁八葉蓮華文軒丸瓦であるが、磨耗が甚だしく、また小破片のため全容はよくわからない。残存している瓦当面は、盛り上がった単葉の蓮弁とその弁間に、くさび形の間弁をみてとることができる。珠文帯もなく、蓮弁の外側は幅1.5cmの素文の周縁が巡るのみである。文様が不明瞭であるが、今里幾次氏の種類による区分寺式と同タイプであろうと推定される。(71)は復弁六葉蓮華文軒丸瓦で、直径が約17cmと推定される。中房は欠損しているが、大ぶりの花卉の中央に形骸化した弁子を取り付く復弁六葉の文様と推定される。焼成は固く、青灰色を呈している。東播磨産の瓦と考えられる。



第18図 包含層出土の瓦拓影

石器・石製品

堂田遺跡より出土した石器・石製品は、表3に示したとおりである。石材として用いられているのは、石棒を除けばいずれも肉眼では讃岐産と判断されるサスカイトである。

石器は、いずれも旧河道内の砂礫層より出土したものであり、二次的な堆積と考えられる。しかし、石器そのものには特に著しい転磨の痕跡は認められず、比較的至近距離からの流入と考えてよさそう。

こうしたことから、遺物には当然異なる時期のものの混在が予想される。個々の遺物について所属時期を確定することは困難であるが、石器の形態の特徴から、概ね縄文時代を主体とするものと思われる。

以下では、器種ごとに記載を進める。なお、記載した石器の計測値は、文末の表4に一括している。

1. 石器

a. 石錐(1)

石錐と考えられる資料は、1点のみである。厚手の剥片の一端に、腹側面からノッチ状に急斜度の二次加工を施している。錐部は基部近くで折損している。図左面のおよび右下側縁は、折断面である。

本資料に見られる剥離痕のうち、図中のスクリーントーンで示した面は、他の面に比べて風化が進行している。これらの剥離痕は、素材となった剥片ないしは石核上の面であると考えられ、古い剥片を偶然に再利用した可能性もあろう。

b. スクレイパー類(2~7)

スクレイパー類は、合計5点が出土している。1. 剥片の縁辺に細かな二次加工を施すもの、2. 厚手の剥片の縁辺に急斜度の厚い刃部を設けるもの、3. 幅広剥片の縁辺に浅い角度の二次加工を施すものという大別3形態が認められる。

形態1

(2・3)は形態1に分類される。

(2)は、やや詰まりの縦長剥片の縁辺部に二次加工を施したものである。二次加工は、背・腹両面から施されており、一部の縁辺は潰れた状況を呈している。打面部から腹側面に施された二次加工は、厚みを減ずる目的と考えられる。

(3)は剥片の一側縁に、背・腹両面から浅い角度の二次加工を施したものである。刃部をほぼ直線状に整形する。素材剥片の背両面には、石核上の面と見られる大剥離面(ポジティブ?)が認められる。

形態2

形態2は1点のみ認められる。

(5)は、大型厚手の剥片の縁辺に、背腹両面から急斜度の二次加工を施したものである。刃部は弧状を呈しており、撚器的機能をもつ石器と思われる。剥片の上縁は欠損しており、折断面の縁辺部にも細かな二次加工が認められる。

形態3

形態3は2点が認められる。

(6・7)は相似した石器である。ともに幅広剥片の縁辺に、背・腹両面から浅い角度の二次加工を施している。素材剥片の打面部近くには、ともに自然面をとどめている。形態は(6)が木葉形、(7)が菱形を呈するが、二次加工は極めてよく類似しており、刃部のもつ機能は同様のものであつたろう。

(5)の背面側は、1枚のポジティブな剥離面で構成されている。(6)の背面は、同一打面から剥離された剥離痕が数枚認められ、幅広剥片の連続的剥離が行われた可能性が考慮される。

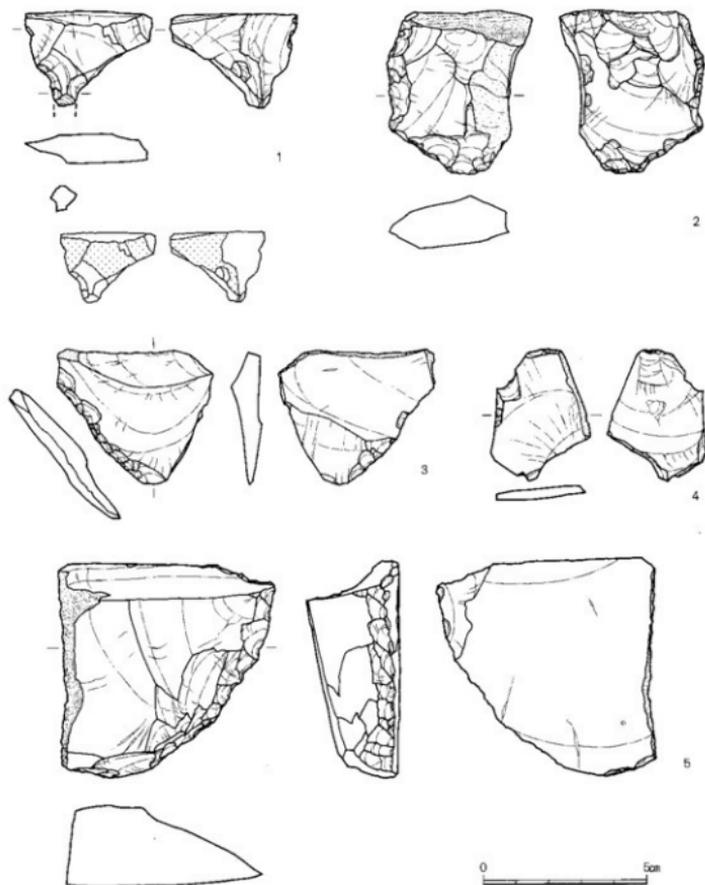
2. 二次加工のある剥片 (4・8・9)

剥片に部分的な二次加工を施したものを、本器種に分類した。他の器種に分類がたいものというネガティブな判断によって分類されたものであり、いわゆる「機能的石器」として把握できよう。

(4) は剥片の側縁に、腹面側から浅い角度の二次加工を施したものである。

(8) は剥片の一端に、背面側から浅い角度の二次加工を施したものである。素材剥片の打面部は、一枚の剥離面で構成されているが、この剥離面は、熱剥離の際に見られるような形状を呈している。

(9) は剥片の一部に、腹面側から二次加工を施したものである。二次加工の角度は急斜度で、掻器のそれに近い。



第19図 トレンチ出土の石器 (1)

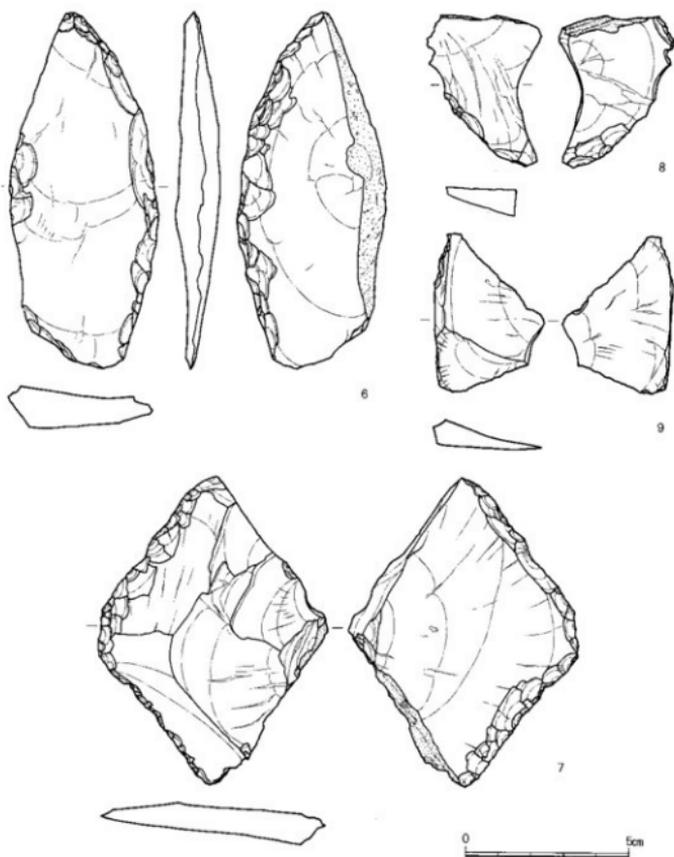
3. 楔形石器とそのスポール (10~23)

楔形石器は、合計16点が出土しており、組成中最も多数を占めている。

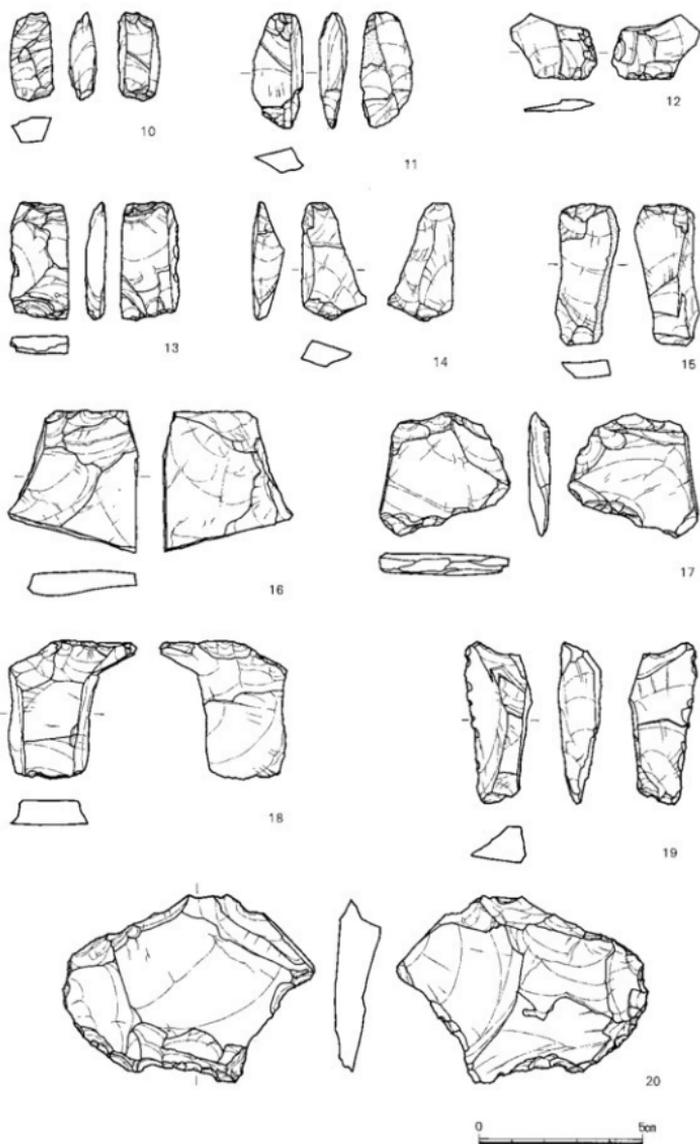
薄手で長方形ないしは紡錘形を呈するもの、やや幅広のものと、大型厚手のものが見られる。剥離は相対する2辺からおこなわれるものが大部分を占めており、4辺から剥離がおこなわれるものは1点が見られるにすぎない。また、截断面をもつものとともに、折断面をもつものが多数認められる。

スポールは4点が識別される。幅広の打面を有するものが目立つが、打面はいずれも潰れており線状となっている。

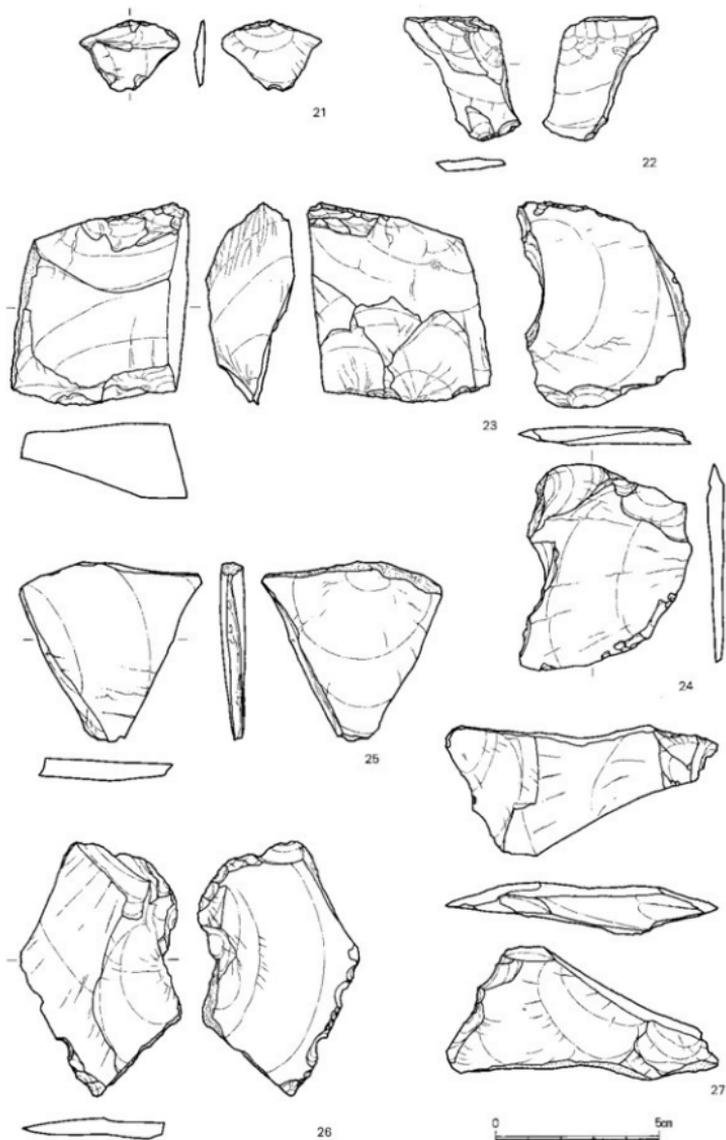
(10~15) は、上下両端から剥離がすすめられており、両側縁がほぼ平行する短冊型に近い形態を呈する楔形石器である。



第20図 トレンチ出土の石器 (2)



第21図 トレンチ出土の石器(3)



第22図 トレンチ出土の石器 (4)

(12) は図上半を折損しているが、上述の楔形石器と同様の形態をもっていたものと思われる。

(13) は両側縁が折断面であるほかは、いずれも両側縁ないし一側縁に載断面を見せている。素材はいずれも剥片であろうが、(15) が図右上半に素材剥離の腹面を止めるほかは、素材の面を止めない。

(16) は、台形状を呈する剥片の上縁から剥離が行われている。上縁は著しくつぶされており、頻繁な剥離作業が行われたものと思われる。両側縁および下縁は、欠損している。

(17) はやや幅広の剥片を素材とし、打面側、末端側から剥離が行われたものである。図左の左側縁は、折断面である。本例は他の楔形石器に比べ、縁辺の潰れが軽微である。

(18) はいびつな形態を見せているが、両側縁ともに折断面である。上縁は潰れが著しいが、下縁は細かな剥離の連続で、潰れは見られない。

(20) は4辺から剥離が進められる、唯一の例である。形態はいびつであるが、ほぼ全周から細かな剥離が行われており、上縁には潰れが認められる。

(23) は、出土資料中で最大の楔形石器である。極めて厚手の剥片を素材としているようであるが、剥離が進行しているため、素材の面は残存していない。上下両縁ともに潰れが認められ、1側縁に載断面が形成されている。

(21・22) は楔形石器のスポールと考えられる資料である。ともに潰れた打面をもち、(22) では1側縁に載断面を取り込んでいる。なお、(22) の末端部には剥離後に施されたと思われる、二次加工による小剥離痕が見られる。

4. 剥片・微細剥離痕のある剥片 (24~26)

(24~26) は本遺跡で出土した中でも、大型で薄手の剥片である。

(24) は両側縁が折断面となっている。自然面を打面とした剥片で、その形状から本来の剥片幅の半ばを失っているものと推察される。背面側には、ポジティブな剥離面を止めており、剥片素材の石核から剥離されたものと思われる。

(25) は幅広の剥片である。打面はややいびつな形態を呈しているが、自然面であったと思われる。剥片末端に、歯こぼれ状の不規則な小剥離痕が連続している。背面側には、ポジティブな剥離面を止める。

(26) は打面を欠損するが、薄手・幅広の剥片である。末端は一部が蝶番状剥離となっている。縁辺の一部には、歯こぼれ状の小剥離痕が認められる。背面側は、ポジティブな剥離面で構成されている。

5. 石核 (27)

石核として識別されたのは、1点のみである。

(27) は図下の上面は、折断面である。自然面の1側縁を除く、石核の各縁辺から剥離が進められ、不規則な剥片が剥離されている。図下の中央の面は、本石核の素材面と考えられるが、若干の転磨を受けたとみられ、全体に滑らかな面となっている。

6. 石錘 (28)

(28) は扁平な礫を用いた石錘である。扁平な礫の長軸側の両端に、挟るように二次加工を施している。図左面の挟りに接する部分は擦り減っており、紐状のものがかけられて使用された結果と思われる。

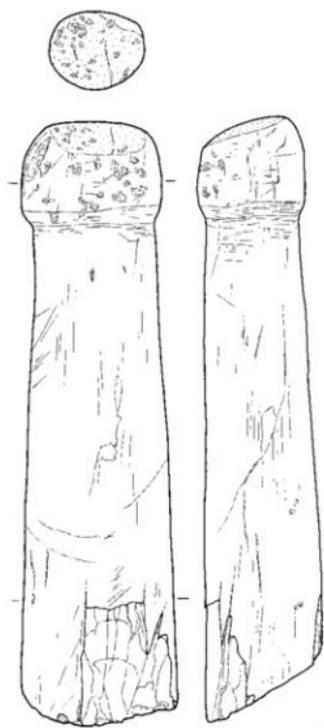
7. 石棒 (第29図)

(29) は基部を折損した石棒である。黒色粘板岩の礫を素材とし、敲打による整形後丁寧に研磨を施している。全体に線状の研磨痕を止めている。上端にはわずかに水磨された礫の自然面が残存し、周辺には敲打痕が認められる。

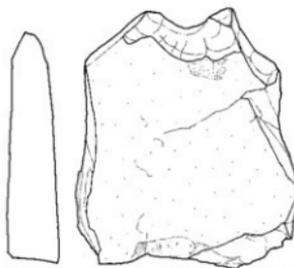
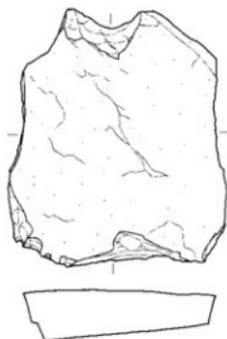
8. 小結

本遺跡出土の石器は、既述のように時期の特定が困難ではあるが、縄文時代のものを中心としているものと思われる。その中で、楔形石器の組成比率の高さは注目してよからう。二次的な資料で制約は多いというものの、一方で狩猟具の欠如も注意しておきたい。石材については、大部分讃岐産サヌカイトであるが、1点のみ見られた二上山産の可能性のある資料については、石材供給の点から注目される。

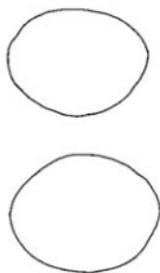
石棒に用いられた粘板岩は、中国山地の中でも入手可能な石材であろうが、用いられた礫が極めて大型であることから、遺跡周辺で入手が可能か検討を要するだろう。



29



28



第23図 トレンチ出土の石器 (5)

表3 出土石器組成表

| 器種 | DR | SC | PI | PS | RF | FL | CO | SP | 石鏃 | 合計 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|------|
| 数量 | 1 | 5 | 16 | 4 | 6 | 19 | 1 | 2 | 1 | 55 |
| % | 7 | 8 | 27 | 7 | 10 | 32 | 2 | 3 | 2 | 100% |

表4 出土石器観察表

| No. | 器種 | 長さ | 幅 | 厚さ | 重量 | 石材 |
|-----|----|--------|--------|-------|-------|----------|
| 1 | DR | 29.0mm | 38.0mm | 9.4mm | 10.6g | Sn |
| 2 | SC | 49.0 | 39.5 | 12.9 | 35.2 | Sn (二上山) |
| 3 | SC | 40.0 | 47.4 | 6.9 | 12.9 | Sn |
| 4 | RF | 40.1 | 30.1 | 3.0 | 4.6 | Sn |
| 5 | SC | 83.7 | 65.8 | 26.9 | 125.0 | Sn |
| 6 | SC | 109.2 | 45.4 | 13.2 | 59.9 | Sn |
| 7 | SC | 94.4 | 70.2 | 9.5 | 64.1 | Sn |
| 8 | RF | 48.5 | 34.0 | 7.7 | 13.3 | Sn |
| 9 | RF | 53.4 | 35.0 | 11.8 | 8.7 | Sn |
| 10 | PI | 26.4 | 12.3 | 7.2 | 3.3 | Sn |
| 11 | PI | 35.0 | 15.6 | 6.5 | 3.7 | Sn |
| 12 | PI | 27.0 | 17.2 | 3.6 | 1.9 | Sn |
| 13 | PI | 34.8 | 17.3 | 5.5 | 5.8 | Sn |
| 14 | PI | 36.2 | 19.1 | 8.3 | 4.8 | Sn |
| 15 | PI | 42.9 | 17.1 | 5.8 | 6.1 | Sn |
| 16 | PI | 41.5 | 44.0 | 9.4 | 17.6 | Sn |
| 17 | PI | 41.1 | 33.7 | 6.4 | 12.0 | Sn |
| 18 | PI | 42.3 | 39.3 | 10.5 | 15.4 | Sn |
| 19 | PI | 49.5 | 19.0 | 11.3 | 11.4 | Sn |
| 20 | PI | 76.6 | 15.3 | 12.0 | 49.3 | Sn |
| 21 | PS | 30.1 | 20.7 | 3.7 | 2.4 | Sn |
| 22 | PS | 37.7 | 28.9 | 5.3 | 6.8 | Sn |
| 23 | PI | 57.5 | 49.3 | 25.7 | 75.6 | Sn |
| 24 | UF | 70.6 | 54.5 | 3.9 | 19.2 | Sn |
| 25 | FL | 55.1 | 55.4 | 6.9 | 22.0 | Sn |
| 26 | UF | 77.2 | 50.5 | 6.1 | 26.8 | Sn |
| 27 | CO | 83.0 | 37.5 | 15.0 | 36.4 | Sn |
| 28 | 石鏃 | 76.9 | 66.8 | 19.5 | 127.3 | 石岩 |

凡例

本文中の表で用いたアルファベットの略号は次の通りである。

DR : 石鏃 SC : スクレイバー PI : 楔形石器 PS : 楔形石器のスポール
 RF : 二次加工のある剥片 FL : 剥片 UF : 使用痕のある剥片
 SP : 砥石 CO : 石核 Sn : サスカイト

八反長遺跡

第1節 遺跡の概要

八反長遺跡は姫路平野の南西にあり、特別史跡姫路城の南西約2kmの沖積地内に所在する。市川と夢前川とに挟まれた平野部であるが、遺跡のすぐ東に手柄山丘陵帯が南北に走っているため、古夢前川の本系に属するものと思われる。遺跡は現海岸線から約2km上流の沖積地上に存在するにもかかわらず、海拔は約8mとかなり低い。第2章で見たように、この沖積地内には数多くの微高地が埋没しており、そのいずれにも遺跡が存在しているものと思われる。八反長遺跡もそうした埋没微高地上に存在する遺跡であるが、遺跡の東側でこの埋没微高地間を流れてきた旧河道が合流しており、周囲の平野部の中では最も低くなる地点に近接するような地理的位置にある。

遺跡の周辺では、土山遺跡・千代田遺跡・手柄山遺跡および手柄山北丘の古墳群・堂田遺跡・丁田遺跡・村前遺跡等非常に多くの遺跡が周知されているが、本遺跡は今回の調査によってその存在が知られるところとなった。

調査区は、河川改修の工事幅によって限られたため約20m前後となったが、総延長は約200mをはかり、この間に3カ所の微高地を確認した。昭和55年度の調査では1条の溝のみが見られる微高地を確認したが、これは微高地の東端がわずかにのぞいただけであり、遺跡の本体はその西に広がる微高地上に存在しているものと思われる。この微高地以南は旧河川敷きとなっている。

昭和57年度・60年度の調査では、それぞれ1カ所ずつの微高地を確認したが、昭和57年度の調査で弥生時代後期の土壇墓と同末から古墳時代初等にまたがる方形周溝墓状遺構を各1基ずつ、さらに奈良時代末から平安時代前半のわずかな遺構を検出した以外は、いずれも弥生時代前期の溝状遺構のみであり、住居址等居住空間を示す遺構はまったく確認できなかった。このため、この地域も集落の外れに近い地点に相当するのではないかとと思われる。ただ、この数条の溝内からは、非常に遺存状況の良好な同時代前期後半の土器が数多く出土しており、集落遺跡がすぐ隣接した所にあることを想像させる。

このように、各微高地は占有のされ方がそれぞれに異なっており、弥生時代前期頃から安定する微高地上で集落が形成され始めているものと想像できるが、今回の調査結果ではその集落の性格まで判断することはできなかった。ただ、各微高地間を流れる旧河道内の状況から積極的な生活・生産活動の痕跡を見て取ることができる。特に、昭和55年度と昭和57年度南調査区で確認した旧河道には、護岸用杭・堤状土盛などの遺構が見られ、当時の著しい河川有効利用の痕跡を感知することができる。また、この旧河道から出土した奈良時代末から平安時代に属すると思われる木器類は、弥生時代前期の土器と並んで本遺跡を特徴付ける遺物である。

第2節 昭和55年度の調査

A. 遺構

昭和55年度の調査区は、昭和53年度に実施した確認調査の結果、全面調査が必要とされた範囲のうち東西に走る市道（荒川17号線）が河川改修によって橋梁となるため、その橋脚部分にあたる場所に設定している。調査区の規模は、東西27m、南北10mであり、若干東西の端が残ったものの、概ね河川の予定地幅を調査したことになる。調査区は、調査前に厚く盛土がされていたが、それ以前はちょうど調査区のほぼ中央に水田の畦が南北にあり、二筆になっていたものである。この畦は後に記すように、水路1の方向と一致していたことになる。

調査区の基本層序は東側に旧河道が流れているため、東側と西側では様相が異なっている。西側では、①耕土・②床土・③暗灰褐色極細砂・④青灰色礫もしくは黄色礫となり、耕土以下約20cm程度で遺構面となる。一方、東側では第3層以下が③黄灰色極細砂・④暗灰色極細砂・⑤黒色粘土1・⑥黒色粘土2・⑦黒灰色極細砂（礫混）・⑧青灰色細砂ないしシルトとなる。

東側では旧河道の一部が弥生時代にも、水路として機能しており、水路は⑧青灰色細砂を切り込んで掘削されている。青灰色細砂の下層は礫と砂が厚く堆積しており、旧河道の本流であったことが知れる。旧河道の埋没によって形成された青灰色礫もしくは黄色礫を切り込んで調査区の中央を南北に流れているのが水路1である。水路1の幅は約1～2mで、埋土は下層に黒色粘土、上層に黒色シルトと灰色細砂の互層が堆積している。水路1の時期は、出土した土器から弥生時代後期とみられる。

水路1の流路は調査区の中央でわずかに弯曲し、S字状をなしている。その屈曲部には多くの枕が打ち込まれており、護岸の用途に用いられたものである。枕の形状は丸枕が多いが、矢板状のものもある。枕の打ち込まれた方向は様々であり、また打ち込まれた深さも一定しないところから、一度に規則的に護岸されたものとは考えにくい。

水路1は南端では幅1m程度に狭くなるが、狭くなった箇所では、水路を遮断するかのように一辺が約50cmの川原石が出土している。この川原石に張り付くように、二又鋤が出土している。この川原石は、利水の調節を行う機能を持っていたと推定される。

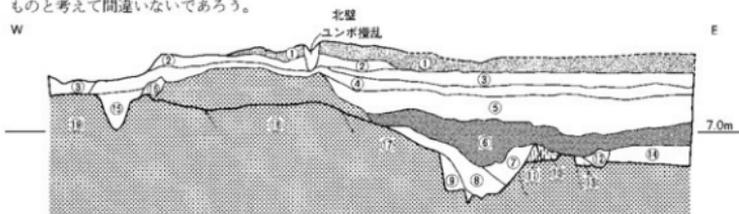
水路1の東側は、南側から北に傾斜するたかまりになって遮られている。このたかまりはこの時期には安定していたようで、枕列がこの付近には極端に少ないことから裏付けられる。南から張り出したたかまりは水路1の屈曲部に接するようになっており、このたかまりは北側の調査区で見られた堤状遺構とはやや性格が異なっているように見える。このたかまりの東側には、安定した平坦面が連なる。これは、堤状遺構に連続するものであろう。逆に、枕列の多い箇所を見てみると枕列2と枕列3は、北からの流れがS字の屈曲部で制御しきれなかったために打ち込まれたと見ることが可能である。

調査区の東北端から南東方向に流れる溝は、幅が約2m、深さ約30cmの規模を持つ。埋土は黒灰色細砂で、出土した土器から水路1と同時期に機能していたものである。

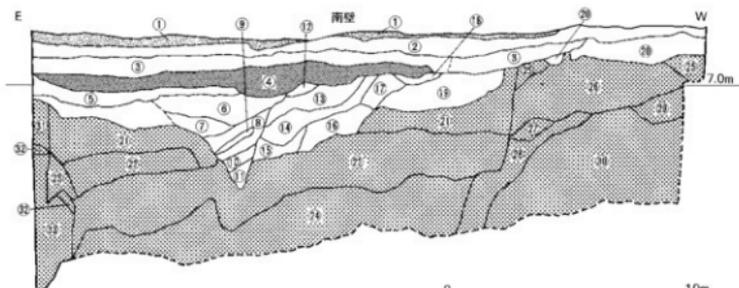
水路1が埋没した後、礫と黒色シルトが不規則に堆積しているが、その後黒色の粘土が安定して堆積している。黒色粘土は、厚い所では50cm以上にも及ぶ。この黒色粘土の下位で、多数の木器が出土した。

木器の出土地点は調査区の南東に片寄っており、堤状遺構の東側にあたる。木器類の出土地点が局地的なのは、上流方向から流されて堆積したものとみるのが妥当であり、調査区での出土位置が、堤状遺構の凹部であることは注意が必要である。すなわち、水路の埋没によってこの付近が安定し、水田化されたと見ることが可能であり、堤状遺構が、水田の大畦畔として機能し続けたと推測されるからである。

木器類は大足が主体であり、総数8点ある。今回の調査では、木器類の nearby 時期を決定するだけの資料は得られなかったが、隣接地で同様な大足が土器を伴って出土したことから、平安時代初頭以降のものと考えて間違いないであろう。



- | | | | |
|-----------------|------------------------|-------------------|----------|
| 1. 粘土 | 7. (黒色シルト+淡灰色細砂2)平行ラミナ | 13. 黒色泥土5(礫混じり) | 19. 青灰色礫 |
| 2. 床土 | 8. (黒色シルト+淡灰色細砂1)平行ラミナ | 14. 黒灰色極細砂(小礫混じり) | |
| 3. 黄灰色極細砂(礫混じり) | 9. 黒色泥土4 | 15. 黒灰色極細砂(礫混じり) | |
| 4. 暗灰(礫)色極細砂 | 10. 淡灰色細砂 | 16. 淡黒灰色極細砂 | |
| 5. 黒色泥土1 | 11. 黒色泥土3 | 17. 青灰色細砂~シルト | |
| 6. 黒色泥土2 | 12. 黒色泥土5 | 18. 黄色礫 | |



- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1. 粘土 床土 | 18. 淡黒灰色極細砂 |
| 2. 暗灰(礫)色極細砂 | 19. 黒色泥土(有機質シルト層) |
| 3. 有機質シルト | 20. 黄褐色シルト混じり極細砂 |
| 4. 黒灰色極細砂 | 21. 青灰色泥土 |
| 5. 灰色粗砂(小礫混じり) | 22. 青灰色粗砂 |
| 6. 黒泥 | 22. 青灰色粗砂~礫 |
| 7. 細砂+小礫 | 23. 黒泥+粗砂+小礫 |
| 8. 黒泥 | 24. 黄色粗砂~礫 |
| 9. 粗砂 | 25. 青灰色シルト |
| 10. 粗砂 | 26. 青灰色礫 |
| 11. 黒泥 | 27. 青灰色細砂 |
| 12. 小礫(黒泥混じり) | 28. 青灰色礫 |
| 13. 黒泥(小礫混じり) | 29. 黒色砂(礫混じり) |
| 14. 黒泥(細砂のラミナ)小礫混じり | 30. 黄色礫 |
| 15. 黒灰色細砂 | 31. 黒灰色小礫 |
| 16. 黒灰色粗砂(小礫混じり) | 32. 青灰色シルト |
| 17. 黒泥 | 33. 青灰色粗砂 |



- | | |
|--|---------|
| | — 粘土 |
| | — 木器包含層 |
| | — 堤状遺構 |

第24図 調査区土層断面図



第25図 遺構全図および木器出土状況図

B. 遺物

1. 弥生土器 (1~13)

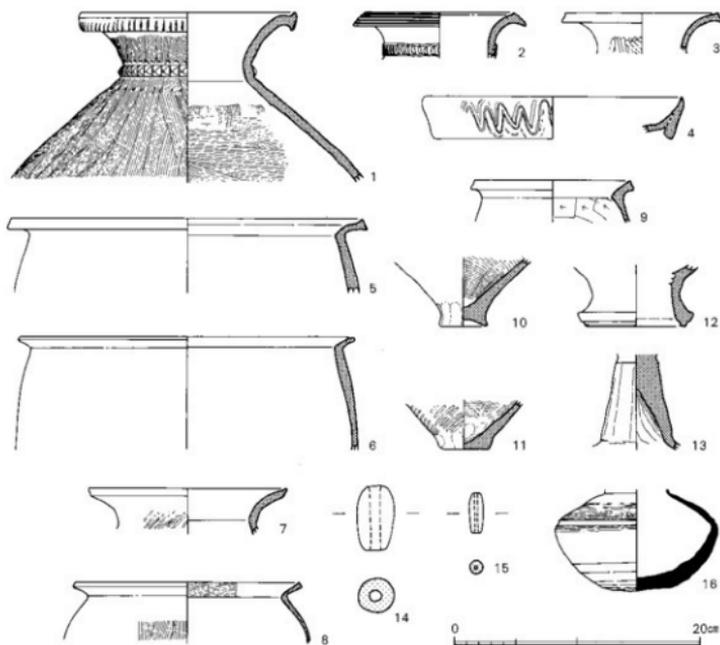
(1~3・5)は、調査区中央を流れる水路1から出土した。(1~3)は壺である。(1)は口縁端部が下方に拡張し、外面の下端には刻み目を巡らす。頸部には太い指頭瓦痕突帯文が巡る。(2)は口縁部の端部を斜め下方に垂下させ、端部には4条の凹線文を巡らす。頸部には(1)と同様に太い指頭瓦痕突帯文が巡る。(3)は口縁端部が外側に拡張して垂下する。(5)は「く」の字に外反する甕の口縁部である。

(4・6・9~12)は、水路1の上層から出土した。(4)は口縁端部を下方へ拡張した壺で、外面には波状文が施される。端部上方には、ベンガラ状の顔料が付着している。(6)は「く」の字状に外反する甕の口縁部である。(9)は口縁端部をわずかに下方へつまみ出す甕である。(10)は水路1の西側の出土で、やや上げ底になった甕の底部である。(12)はわずかに斜めに開く脚で、端部を上下に拡張する。

(7・8)は、調査区の西を南東方向に流れる溝からの出土である。(7・8)とも甕の口縁部である。

2. 土製品 (14・15)

(14・15)は土師質の土錘であり、床土から出土した。



第26図 旧河道内出土の土器

3. 須恵器 (16)

(16) の須恵器壺は水路1の東側黒色極細砂からの出土である。

4. 木器

大足

(1) は側部が欠損して幅は不明であるが、長さは36.3cmある。幅は現状で9.5cmあるが、一方は徐々に薄くなっており、原形の厚さを留めていない。形状からすれば横幅の約3分の2程度が残っており、約半分は表面の旧状を残していると考えて良いであろう。厚さは2.1cmであり、この調査区の大足の中では際立って厚い。側部は上端と下端に切り込みが入っている。切り込み部位には、縛ったかのようにみえる使用痕がみられる。下端の切り込みは「く」の字状の形態を示すのに対し、上端側は切り込みより上のはぼ真っ直ぐになっている。鼻緒孔は真ん中やや右寄りに1孔穿たれているが、欠損部分には他の例のように2孔あったものと推定できる。孔の直径は、1.4cm。

(2) は上下両方の端部が丸く整形されており、側部の切り込みは見られない。全長は41.0cm、幅は最大で11.0cm、厚さは1.2cmある。上下両端にはともに直径0.3cmの孔が上端部で4孔、下端部で3孔が穿たれている。これは側部の切り込みの代わりに木釘を利用したものであり、通例のように紐孔ではない点が注目される。木釘は、上下とも右端だけが残っている。木釘穴の方向は板に対して直交しておらず、いずれも斜め方向に穿たれている。鼻緒孔は上方やや右寄りに1孔、真ん中やや下寄りの部位の左右に2孔が穿たれる。孔の直径は1.0~1.1cmで、この3孔が鼻緒孔と考えられる。緒孔間の長さは、他の大足が長辺約12cmであるのに対し、約15cmとやや長めになっている。右の孔は焼き痕が明瞭に観察でき、孔の成形過程を示す。右下の孔の斜め上にはやや小振りの孔と、焼き痕のみがある未穿孔の孔が1つある。

(3) は、形態は1とはほぼ同じものと推定できる。全長は57.3cm、幅は最大で14.2cm、厚さは1.4cmある。孔は7孔が確認できるが、位置から推定すれば、右下にもう1孔あって8孔になるものと思われる。左側の上下の2孔は側面方向に紐を通したような擦れた痕跡が見られることから、左右ともに同様の機能を有し一対であったと推定すれば、鼻緒孔はその4孔に挟まれた4孔と考えて良いだろう。鼻緒孔の上2孔はほぼ中心に位置するところから考えると、鼻緒孔の紐の通し方によって左右の足で用いられたとすべきであろう。

(4) も形態からすれば1と同様なものであろうが、下端の切り込みが「く」の字状になっており、その下にさらに左右両側に把手状に切り込みをいれる点が異なっている。大型の大足で全長は64.8cm、幅は最大で13.9cm、厚さは1.5cmある。鼻緒孔は3孔穿たれており、直径は1.3~2.3cmである。

(9) はこの調査区出土のものでは最大の大足で、全長は73.6cm、幅は最大で13.0cm、厚さは1.5cmある。下端部に欠損部があり全容は不明であるが、切り込みの形状からすれば下端は上端と同じように圭頭状をなしているか、あるいは(1)や(4)のように把手状に真っ直ぐに削られているかどちらかであろう。鼻緒孔は3孔あり、他の例同様重心をやや上にとっている。孔の直径は0.7~0.9cmである。上の1孔の上方には、小振りの貫通した穴と未穿孔の穴が続いている。

(10) は右半分を欠損しているため全容は不明であるが、切れ込みを上下に持つところから大足と考えられるものである。しかし、鼻緒孔は明確ではなく、直径は0.4cmの孔が1孔認められるのみである。また、板材の割れ口に0.3~0.4cmの直径の孔が5孔あり、位置からみれば補修孔とも考えられるものである。全長は39.8、厚さは1.4cmある。

(11) は(10)と形態的によく似たタイプの大足で、厚さも1.5cmとほぼ同じである。鼻緒孔と考えら

れるものが2孔と、割れ口に補修孔と思われるものが1孔見られる。(10)とは別材であるので、必ずしも(10)の補修材として用いられたとは断定できないが、図示した天地を逆にすると形式的には同一の大足と見ることも可能である。

その他の木器

(5)は大型の木器で、残存長は41.5cmである。上端が主頭状をなし、幅は最大で12.0cm、厚さも1.3cmと大足に近い形態と数値を示すものである。しかし、下端部には板材の中心に少なくとも幅2.4cm以上で、長さが8.0cm以上の切り込みが縦方向にはいており、他の大足とは形状を異にする。孔は板材状に0.4~0.6cmの直径の孔が3孔見られるが、鼻緒孔とみなすには孔間の距離が長すぎるように見える。

(6)は腰掛けの側板であり、脚としての機能を持つものである。承腎板は出土していないが、側板には承腎板に穿たれる柄孔に差し込むような突起がある。下端の欠損が著しく高さは不明であるが、わずかに残った部分から推定すれば、全長は35.9cm、幅は最大で14.9cm、厚さは2.7cmある。承腎板との接合部を除いた脚高は、31.6cmと推定される。

(7)は上端に長さ1.9cm、幅1.1cmの柄穴用の突起を付けた板材であるが、用途は特定できない。残存長は17.4cm、板材の幅は3.7cm、厚さは0.4cm。

(8)は中心を彫り窪めた板材で、左右・上下ともその規模を推定できないが、槽の断片かと思われるものである。残存する長さは17.3cm、幅は8.1cm、厚さは1.7cm。

(12)は棒状の材の中央部に一辺2.2cmの方形の穴を穿ったもので、穴は貫通していない。下端はやや細くなっている。残存する長さ50.8cm、幅は5.9cm、厚さは2.7cm。

(13)は両端に切り込みのある棒状の材で、全長47.6cm、直径は2.0cm。端部の切り込みは、上端がやや大きく長さ5.0cm、幅は2.1cmある。

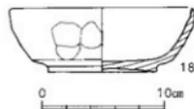
(14)と(15)は、いずれも機織具と考えられる部材である。両方とも棒状の部材の先端を削りだしてグリップのようにしている。布巻具の一部と推定されるもので、(14)は残存する長さ33.5cm、幅は2.9cm、厚さは3.1cmである。(15)は残存する長さ27.5cm、幅は3.1cm、厚さは1.3cmで、(14)にくらべるといくぶん扁平気味になっている。

(16)も(14・15)と同じように棒状の部材の先端を削り出しているが、(14・15)と異なりなかほどへ弯曲しながら徐々に太くなっている。残存する長さは22.3cm、厚さは2.7cm、残存する最も太い箇所では直径が4.3cmある。

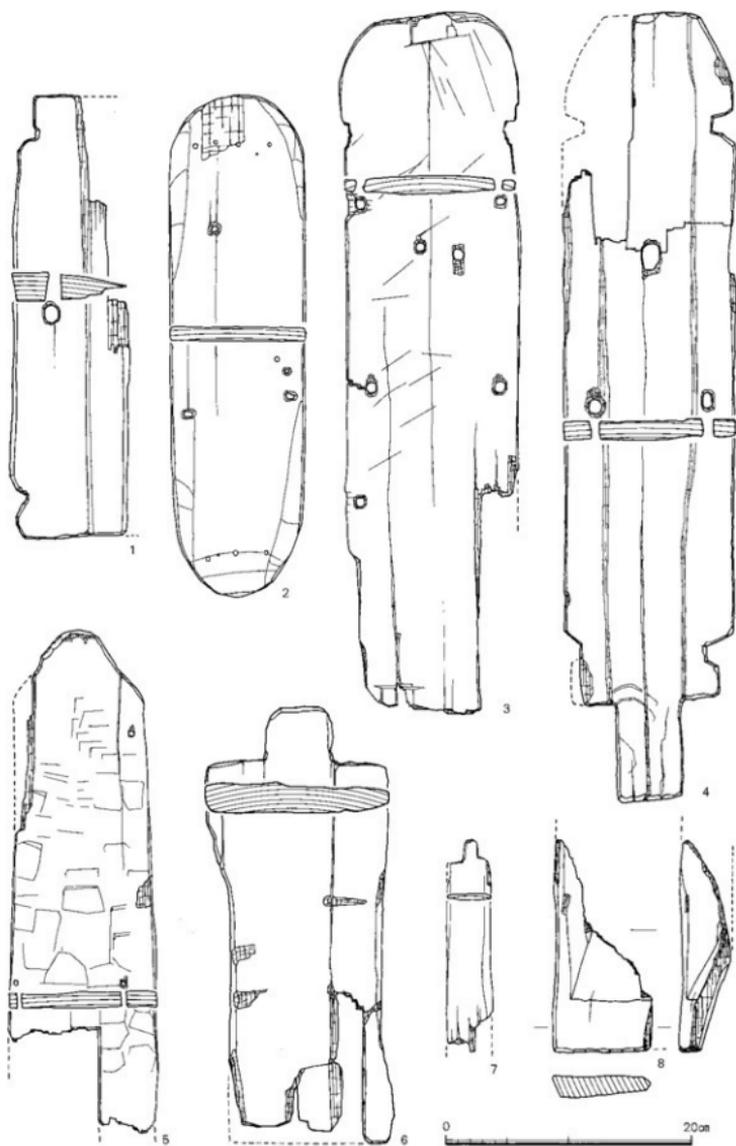
(17)は扁平な板材の上端部を削り出し、板材の厚さを約半分としている。また、板のなかほどから下端部へも裏側を削り出しており用途のよくわからない部材である。残存する長さ18.8cm、幅は4.4cm、厚さは1.9cmである。

(18)は漆塗りの木椀である。口径15.0cm、高さ5.3cm、高さ5.3cm。外面には削り痕が一部で観察できるが、全体の残存状況は良くない。一木のロクロによる成形となっており、高台の裏側にはわずかに漆の痕跡が認められる。

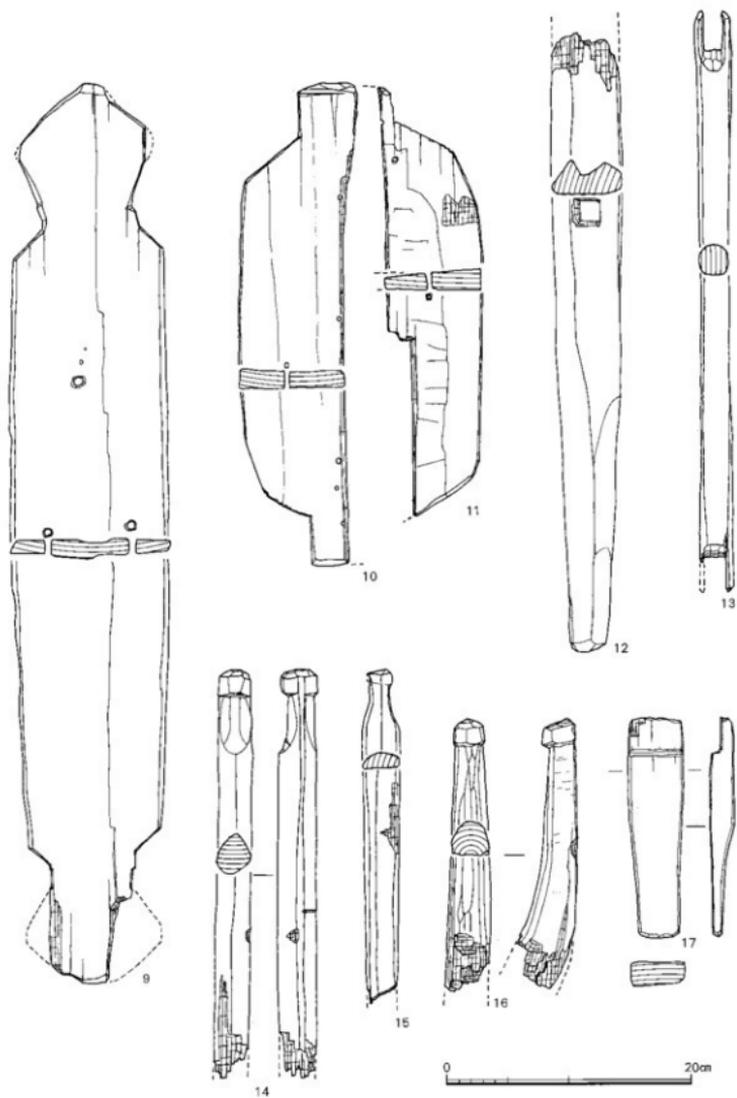
なお、水路1からは二股銀が2本出土している。いずれも残存状態が悪く図化しえなかったが、1本は調査区中央の西屑から、もう1本は調査区南端の角石の上から出土したものである。2本とも歯先等の欠損が多く、全容は知れない。



第27図 旧河道内出土の木器 (1)



第28図 旧河道内出土の木器（2）



第29図 旧河道内出土の木器(3)

第3節 昭和57年度の調査

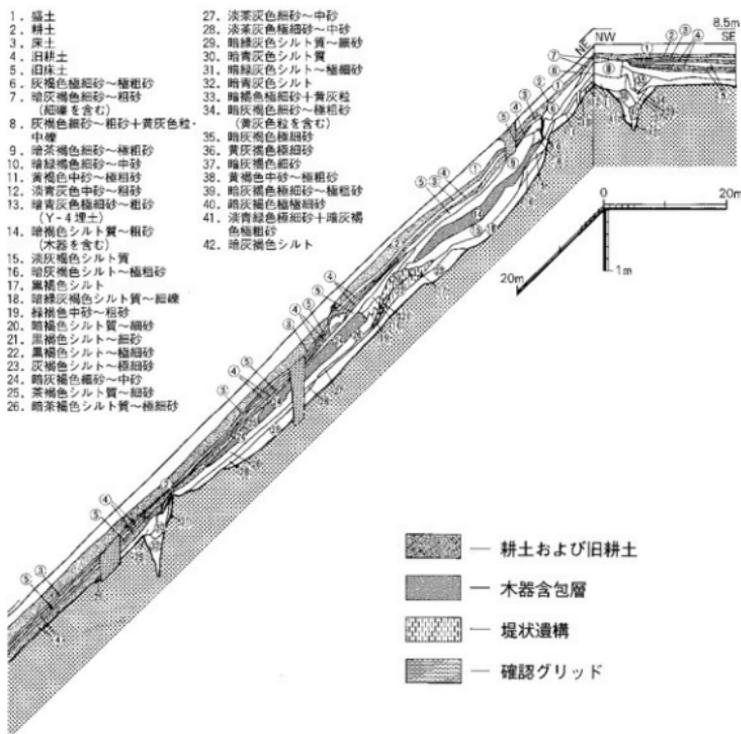
A. 遺構

北調査区

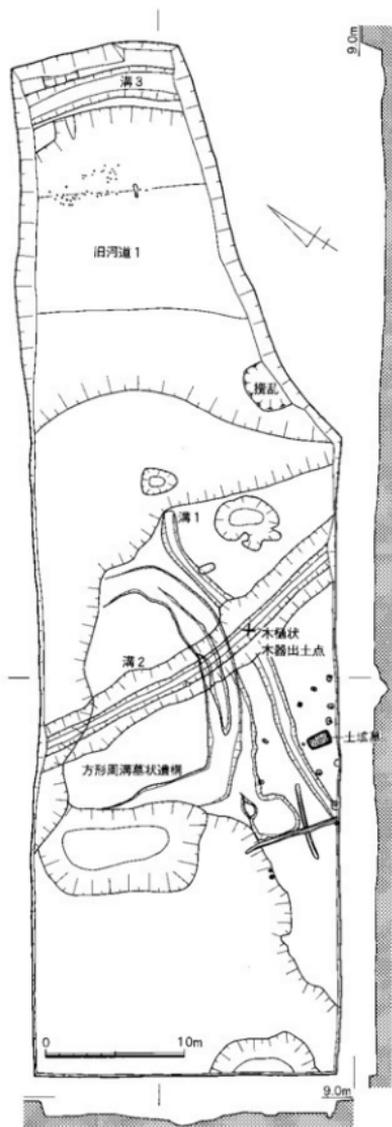
調査区の西側に生活用の道路を確保したため、調査区の幅は約20mとなった。さらに、調査区北東側の東辺には東側に広がる水田への農家用道路を設けたため、その幅は18m～8mとかなり狭くなった。

調査区の北側には、弥生時代前期の溝3と弥生時代前期から中世初頭まで続く旧河道1があり、北西から南東に流れている。この旧河道1以南は、南調査区の旧河道2までの小さな微高地となっている。この微高地上には部分的に2枚の遺構面があり、そこに4時期の遺構を検出できた。

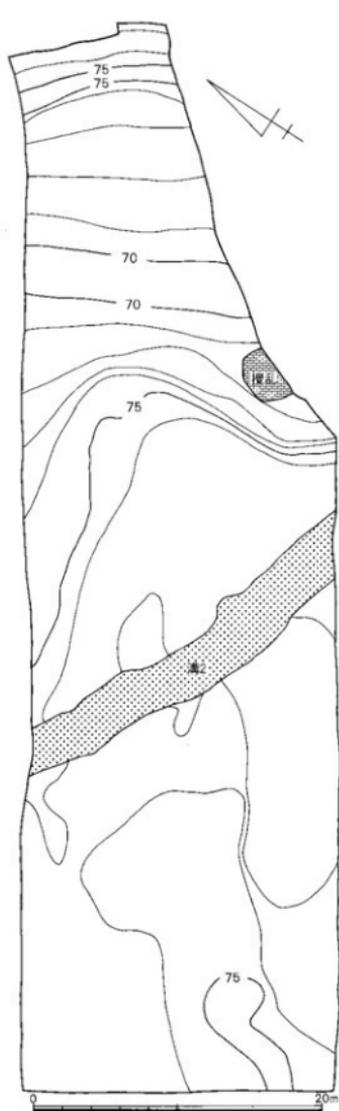
上層遺構面を確認できた遺構は、平安時代と思われる独立柱建物址、弥生時代末から古墳時代初頭の



第30図 北調査区土層断面図



第31図 北調査区遺構全図



第32図 北調査区等高線図

方形周溝墓状遺構さらに、弥生時代後期の土壌墓等である。この上層遺構面から10ないし20cm下層に、弥生時代前期の溝1・溝2が掘削された下層遺構面が存在する。平安時代の掘立柱建物址を除いては、微高地上にもかかわらず住居址等がないため、各時代を通して集落の縁辺部であったものと思われる。

基本土層は、遺構の存在する微高地部分で基盤層となる下層礫の層が高まっておりさらに、調査区の北端付近にも北東に向かってこの礫層の高まりが認められるため、調査区の北東側に別の微高地が広がっているものと思われる。この両微高地の間を、旧河道1が流れていることとなる。第31図を見ると、弥生時代後半から古墳時代前半の間に、旧河道1のほぼ中央部に堤状の高まりが作られる。これは少なくとも再度盛り直されており、これによって二分された両旧河道は木器等を包含する層によって最終的に埋設されている。その後、平安時代から中世にかけての時期に、この堤状遺構の直ぐ南側に大畦畔状の高まりが設けられる。この高まりは、現在周囲に見られる条里形地割りの畦畔とも重複しているため、古い時期の条里形割りの畦畔であったものと思われる。

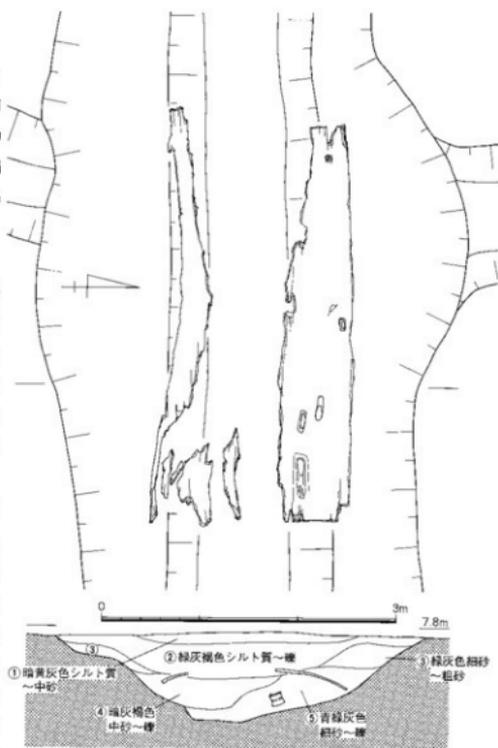
1. 弥生時代前期の遺構

a. 溝1

微高地上をほぼ南北に小さく蛇行しながら流れる。幅1m前後、深さ約30cmであり、全長約26mを計る。溝2と交差する関係にあり、中からは土器と石器が少量出土している。

b. 溝2

幅約4m、深さ約1m、現長約26mの規模であり、ほぼ東西に流れている。断面は緩やかな「V」字形に近く、さらに微高地上を流れているため、人工的に掘削された水路と考えられる。遺存状況の非常に良好な、まとまった量の弥生時代前期の土器と伴に、石包丁片も出土している。土器の形態は溝1内出土土器と同一のものであるため、両溝は同時に稼働していたものと思われる。特に、溝1と交差する箇所には、丸太船の一部と思われる木器が出土している。長さが約4mと溝2の幅に等しいため、溝2を跨いで掛け

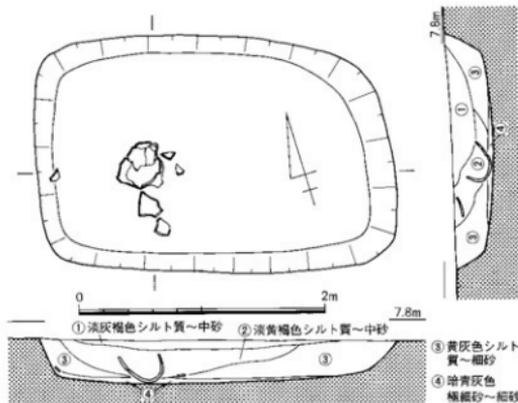


第33図 溝2内木桶状木器出土状況図

られていた溝1用の木樋の可能性もある。

c. 溝3

調査区の北壁際にあり、旧河道1に平行してほぼ北西から南東に流れる。幅約2m、深さ約50cm、現長約11mをみる。調査区の北東に続く微高地の裾部に走っているものと思われる溝内からは、かなり遺存状態の良い土器が少量出土している。



第34図 土壌墓

2. 弥生時代後期の遺構

a. 土壌墓

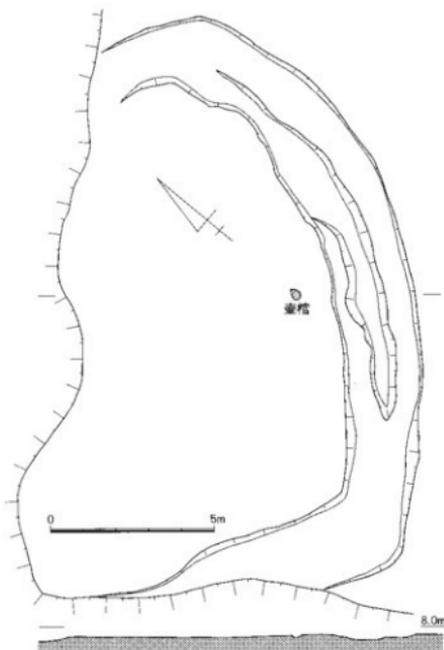
平面形は隅丸長方形を呈するが、北東隅が若干歪となる。長辺約3m、短辺約2mを計り、長辺をほぼ東西方向に取っている。墳底部は広いわりにほぼ平らであり、深さは約35cmある。四壁は斜めに立ち上がるが、特に東壁は一段と緩やかになる。

墓址かと考えられるが、平面的にもまた土層断面を見ても木棺等の確認はできないため、土壌墓の可能性が高い。墳底部の西側中央には同時代後期の甕が一個体分置かれているが、この出土状況から見て副葬されたものと思われる。

3. 古墳時代初頭の遺構

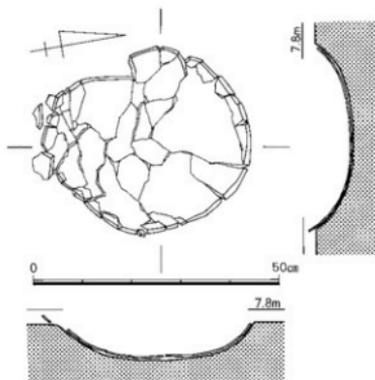
a. 方形周溝墓状遺構

微高地の端にあるためか、遺構の西側半分近くを旧河道1によって消失している。幅約2～2.5m、深さ約30cmで巡る溝の平面形は、方形をしていたものと推定できるが、その方向は北が東に大きく振れている。



第35図 方形周溝墓状遺構

南辺と北辺の溝はほぼ一直線に伸びていると考えられるが、東辺の溝は大きく弧を描いて外側に膨らんでいるため、厳密には「方形」というよりは「三味線の胴形」をなしている。この東辺の溝のみ、浅いながらも二段状の形態となっている。遺構の南北長は溝の外縁で約18m、内縁で約14mの規模である。東辺溝のほぼ中央部、内縁肩部付近には、主体部のひとつと考えられる壺が横たえられている。この壺は上半を削平されているが胴部に焼成後の穿孔があり、この穿孔を下にして横たえられている。埋設のための掘方は土器の形状に合わせて掘られており、土器との間にほとんど隙間を持っていない。



第36図 壺棺出土状況図

頸部以上を欠損するため口縁部の形状は不明であるが、南に向けられている。この壺棺の状況から見ても、遺構の上半は後世にそのほとんどが削平されたものと思われる。したがって、この壺棺以外に主体部となるような遺構はまったく確認できなかったため、方形周溝墓とは断定しなかった。

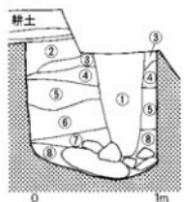
4. 平安時代から中世の遺構

a. 柱穴群

微高地の中央部南東側に少数見られるが、さらに東側の調査区外に広がる状況を示している。明確に建物址を復元できるものはないが、第38図を見てもわかるように、柱の沈下防止のための根石上に柱が据えられており、かつて掘立柱の建物址が存在していたことが伺える。柱穴の平面形は不整形であるが方形を意識しており、概ね一辺50cmまでの大きさとなっている。掘立辺の方向から推測して、建物址は現地割りとほぼ同一の方向を指して建てられていたものと思われる。

b. 畦畔状遺構

調査区西断面において確認した。旧河道1内にある、堤状高まりの南辺の直ぐ南に位置する。ほぼ、現耕土直下で遺構の上面を検出できるような土層関係にある。断面は台形を呈し、底辺で約50cm、高さ約20cmの規模である。平面的には確認していないが、その位置関係からして現水田の農道の下層に位置しているため、現在見られる水田（現条里型）地割りに先行する段階の大畦畔ではないかと考えられる。現水田畦畔との位置関係から推し量って、その方向は現在のものとはほぼ同じ方向を取っているものと思われる。



- ① 柱洞
- ② 淡緑灰褐色極細砂～中砂
- ③ 淡緑灰褐色シルト質～中砂
- ④ 暗茶褐色シルト質～中砂＋黄灰色粒
- ⑤ 暗灰褐色シルト質～粗砂＋淡青灰色シルト質～中砂
- ⑥ 淡青灰色シルト質土＋稀灰褐色粒
- ⑦ 淡青灰色シルト質土＋稀灰褐色粒
- ⑧ 淡青灰色極細砂～中砂

第37図 柱穴平面図・断面図

南調査区

北調査区同様、調査区の西側に生活用道路を確保したため、幅は20m強に限定された。本調査区は昭和55年度調査区の北東に接するため、調査区の南辺は前回調査区の北壁部分に限定されることとなる。長さも、第2次確認調査の結果にもとづき東側で約22m、西側で約29mとした。旧耕土を取り除いた海拔8m前後の高さで、遺構面が確認できる。第40図・調査区内等高線図が示すように、遺構面の高さは基本的に北東に高く、旧河道を挟んで南西に低くなる。

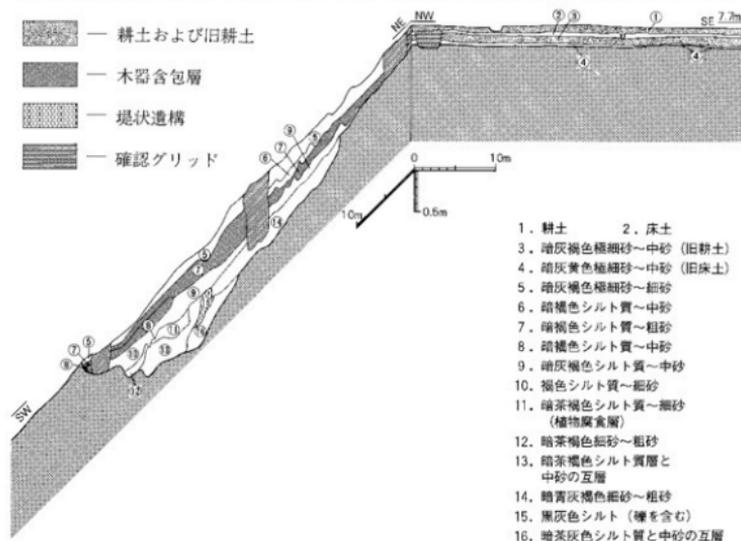
この調査区で検出できた遺構は、北西から南西に向かって流れる一条の旧河道であるが、この旧河道は調査区内の基本的地形を形成している下層礫層の窪みの部分を流れているものである。この礫層の一部は調査区の北東側で露頭して、旧河道の肩部をなす遺構面となる。この下層礫層は旧河道最下層出土の土器から判断して、少なくとも縄文時代終末から弥生時代の極早い時期には既に堆積していたものと思われる。北東側で露頭している礫層（遺構面）は、以後平安時代前半まで大きな堆積がないため長期間生活面として利用されている。一方西側においてもこの礫層は旧河道の肩部を成しながら高まっていくが、その上に灰黄色粘質土の堆積がみられ旧河道の西側ではこの層が遺構面となっている。

1. 縄文時代晩期から平安時代の遺構

a. 旧河道（2）

この旧河道は、昭和55年度の全面調査で検出した旧河道につながる一連の流れである。幅約20mの規模であるが、平安時代中頃に埋没して水田化するまでに、時代ごとの変遷をたどることができる。

上記したように、縄文時代終末から弥生時代初頭の時期までに下層礫が堆積し、その礫層の低くなる箇所に旧河道が形成されている。この単なる“流れ”としての旧河道の時期は弥生時代後期まで続くが、



第38図 南調査区土層断面図

その次の段階になって人の手が加わったことが分かる。

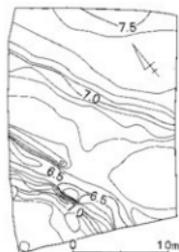
弥生時代後半になると旧河道もある程度埋設しており、その埋土の上に幅約4m、現高約30cmの堤状の土盛が、河道を二分割に縦貫するように築かれている。この堤状遺構の両縁部には、護岸用と思われる杭列が部分的に打ち込まれているが、丸太杭列・転用矢板の杭列など用材の異なる杭列が見られることから、時期を異にする杭列が共存しているものと思われる。この遺構は、北側では幅も広く高さも明確であるが、南に向かうにしたがって不明瞭となり、調査区の南壁際ではほとんどその痕跡だけになってしまう。この堤状遺構の杭にひっかかるようにして多数の木器が出土したが、そのほとんどは自然木をはじめとする流木であり、加工を施して製品としたものはまったく見受けられない。出土箇所が堤状遺構付近に集中するため、その上面に敷かれていた木材の一部の可能性もある。

次の奈良時代後半から平安時代初頭には、旧河道の流れはほとんどなくなってしまふ。旧河道内埋土⑦には、葦類と思われる非常に多くの植物の葉部・茎部とともに多数の木器が包含されていることから、旧河道は広い澁みとなっていたようである。木器類には実生活を想起させる雑器類は比較的少なく、大足と畜串が多数を占めていることが注目される。大足は数形式の分類が可能であり、また使用頻度が少なく未使用品と思われるものが多くを占めていることが特徴的である。祭祀類の中心となる畜串は、御敷と思われる曲物の底板（天井板）を短冊状に縦割りにして再利用（転用）したものであり、比較的丁寧な製作を行うこの種の遺物の中では、著しく特異な製作状況となっている。この時期、地域化された都風の祭祀が、この遺跡の隣接地域で執り行われたものと思われる。ただ、これらの木器類はほとんど

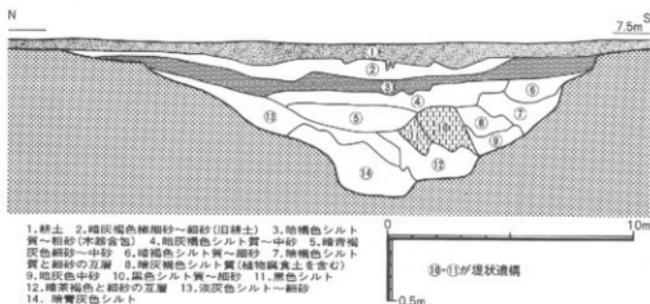
が前段階の堤状遺構より東側で出土していることから、この堤状遺構の高まりがなんらかの形でこの段階まで存続し、その高まりに影響を受けた南北方向の流れの中に、木器が投棄もしくは流れ込んだために、このような出土状況になったものと思われる。



第39図 南調査区遺構全図



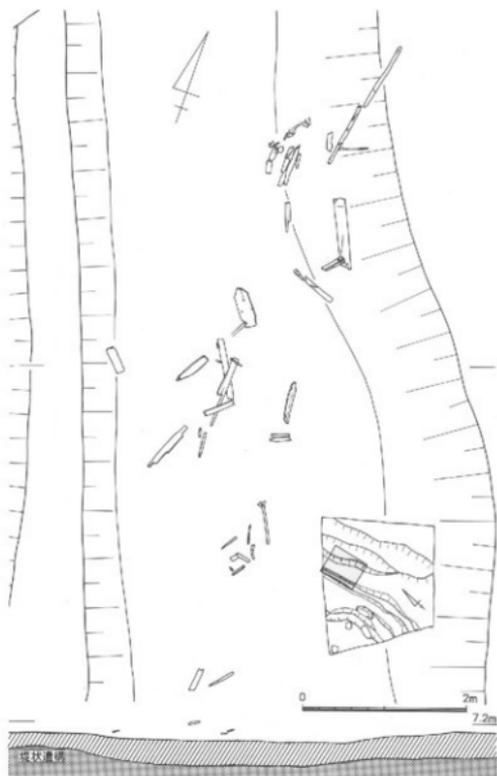
第40図 南調査区等高線図



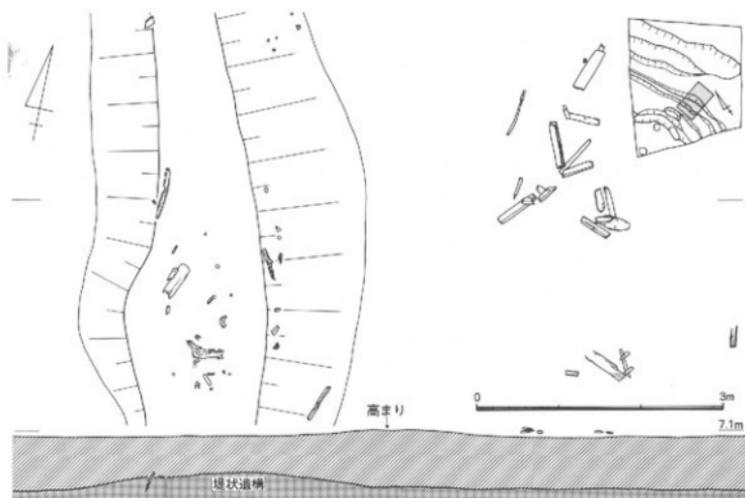
第41図 旧河道2土層断面図

木器類は埋土⑦以外から出土するものは少なく、その出土状況も農具と審申が互いに折り重なるように出土しているため、大きな時間の隔たりのない間に堆積していったことが推察される。

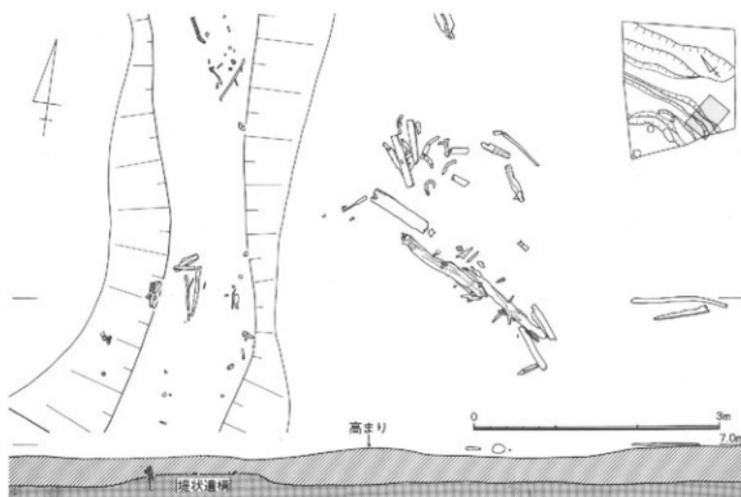
この旧河道が完全に埋没してしまうのは、平安時代初頭以降の時期になってからである。北調査区でも、やはりこの時期に旧河道が埋没して水田化することから、今宿の琴丘高等学校の東側から本遺跡方向に向かって流れていた流れが、山沿いに南下する現在の大井川方向に向かって流れだしたために、水の供給源を失い、旧河道はほぼ全城にわたって周囲と同じ条里制地割りに区画された水田として姿を変えていったものと思われる。ただ、どうしても周辺域よりは海拔が若干低いため、今日に至るまで居住域として利用された痕跡はまったく見受けられない。



第42図 旧河道2内上層木器出土状況図(1)



第43図 旧河道 2 内上層木器出土状況図 (2)



第44図 旧河道 2 内上層木器出土状況図 (3)

B. 遺物

土 器

北調査区出土の土器は、弥生時代前期から中世前半（13世紀）に属するものであるが、その中心となるのは弥生時代前期の土器である。特に溝2内からは、弥生時代前期の非常に良好な遺存状態の土器が多く出土している。弥生時代中期の土器は包含層内から極少数出土しているが、いずれも凹線を巡らしたものである。後期には、土壇墓内と旧河道1内さらに包含層から少数の土器が出土している。弥生時代末から古墳時代初頭になると、方形周溝墓状遺構に関連して少数の土器の出土があるが、遺存状況はかなり悪い。6世紀後半の須恵器が旧河道1内と包含層から出土しているが、杯蓋・杯身のみである。奈良時代から平安時代の須恵器が若干見られるが、以後中世に至るまで顕著な土器は出土していない。

南調査区では土器の出土が非常に少なく、旧河道2内から図化したわずかの土器が出土している。旧河道2下層からは、弥生時代前期の土器とともに縄文時代晩期の土器片が出土している。弥生時代中期末から後期の土器も極くわずかであり、奈良時代以降の土器にいたっては、須恵器が点出土しているだけである。古墳時代に属すると思われる土器は、まったく出土していない。

1. 北調査区出土の土器

a. 溝2内出土の土器

溝2内から出土する土器は壺と甕の類のみであり、他の器種の土器はほとんど見受けられない。壺類の外面向の裝飾はいずれも貼り付け突帯によるものであるが、図化した土器の内、こうした状態を確認できる資料は数少ない。甕類は壺類と比較すると出土点数は多く、口唇部に刻み目を有するものもあり、頸部直下には窟描きによる沈線を巡らしたのも少数みられる。形態的には、口縁部を外方に張り付けて所謂「逆L字」形としたものは少なく、「大きく外反する」形態のものが多く出土している。また、若干個様に底部に穿孔をもつ甕も見られる。総じて、弥生時代前期後半の土器で構成されている。

壺 (17~27)

(17)は径約10.8cm、器高約15.6cmとかなりな小型である。外面は緻密に横方向にヘラミガキする。(18)は上半部のみであるが、口径約28.4cm、現高約32.4cmと著しい大型品である。口唇部には大きな刺り込みが入り、口縁内面には「蕨手文」状の突帯文が描かれている。口縁外面上半は、ヨコナデの後沈線を巡らす。以下は横方向にヘラミガキし、頸部に突帯と棒状浮文を、肩部にかけては刻み目の入った突帯を巡らす。(19・20)は口縁部のみであるが、(19)は口唇部に刺突文を、(20)は頸部に突帯を持つ。

(21~27)は底部である。(21・22)は胴部に沈線が走る。(22・23)の外面には板状工具によるナデ(以下「板ナデ」)が残存し、他は縦方向を基本としたヘラミガキを行う。(26)は甕かと思われる。

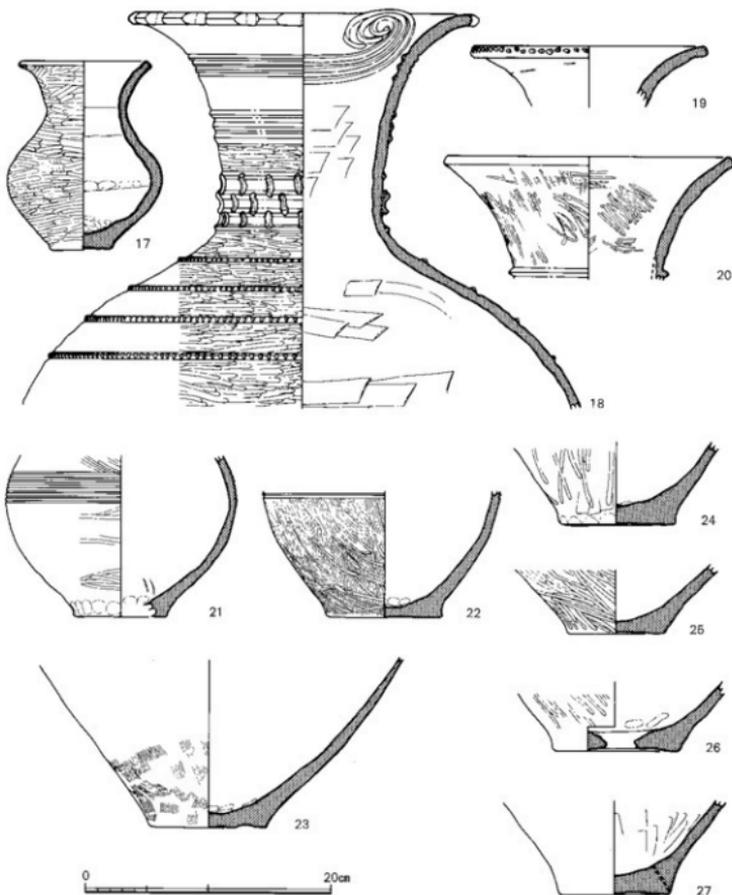
甕 (28~47)

(28~36)は、口縁部が「大きく外反する」形態である。そのうち、(28・29・31・33~35)は頸部があまりしまらず、全体的に逆三角形となる。(28・29)は口唇部に刻み目を持ち、頸部には沈線を巡らす。(34)は刻み目のみを有する。外面の調整は、(28・31)に縦方向の板ナデがわずかに残存するが、多くはナデ消している。(30・32・36)は頸部がしまる形態であり、(32・36)は口唇部に刻み目を施す。(32・36)の外面には、板ナデを行う。口径的には28cm前後を境として、二形態に分かれる。

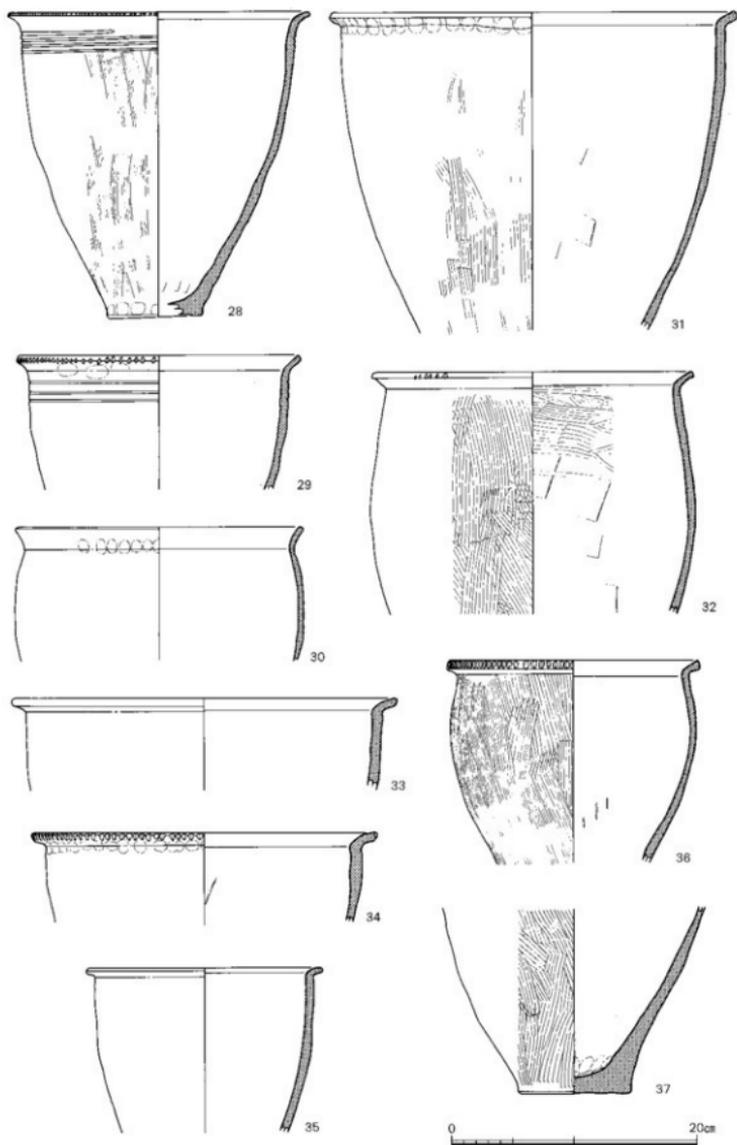
(42~45)は、「逆L字」形の口縁を成すものである。(41~44)は口唇部に刻み目を有し、さらに(43・44)は頸部に沈線を多条にわたって巡らしている。外面の調整は、板ナデが基本的である。(45)は口縁端

部が内側にも若干肥厚しており、外面は底部付近にヘラミガキを残す。(42)の体部は逆三角形となり、他は頸部が引き締まる。口径的には40cm前後の大型(43)と、20cm前後の小型に分かれる。

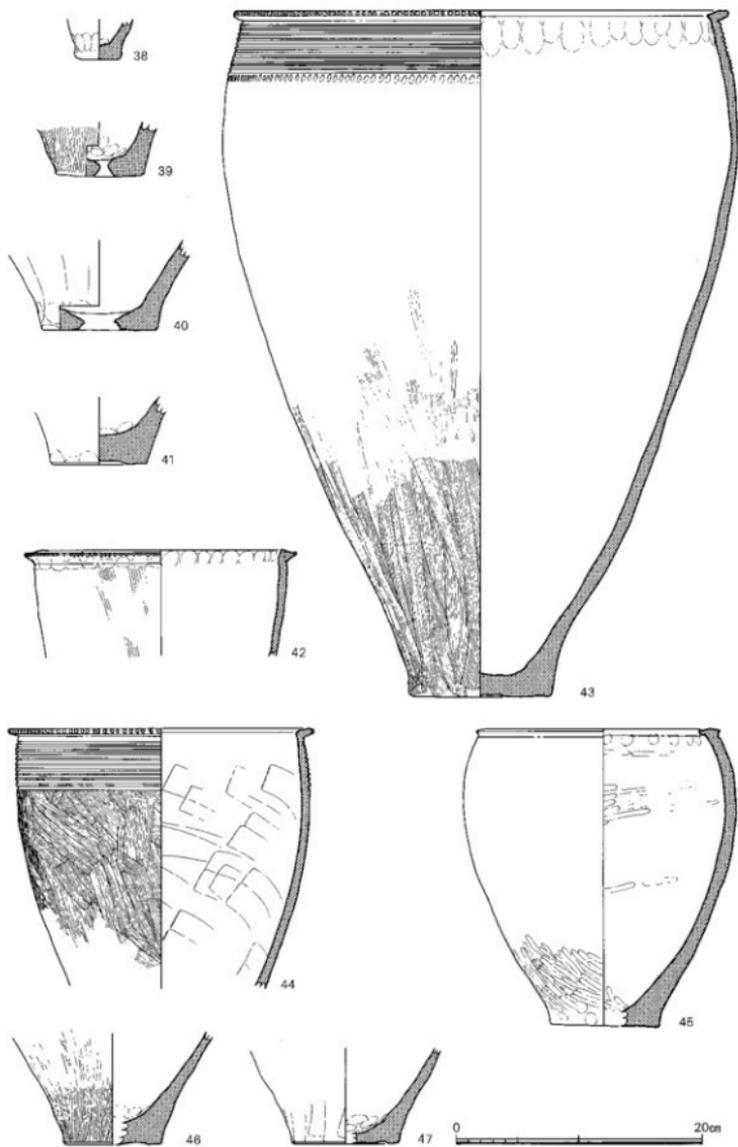
(37~41・46・47)は、底部である。小型品と思われる(38)を除いて底径は比較的大きく、(39・40)は中央部が穿孔されており、甕かと思われる。



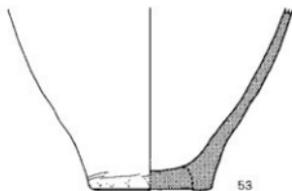
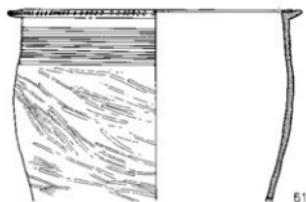
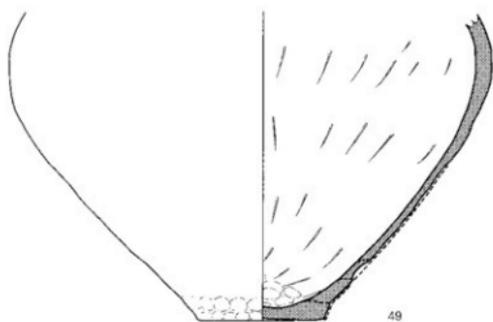
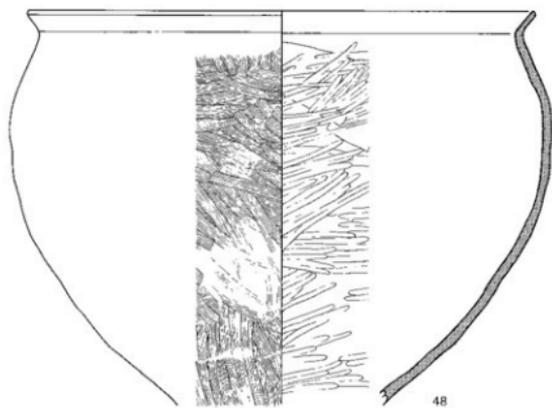
第45図 溝2内出土の土器(1)



第46図 清2内出土の土器(2)



第47図 溝2内出土の土器(3)



0 20cm

第48図 溝3内出土の土器(1)

b. 溝3内出土の弥生時代前期の土器

図化できた土器は少ないが、溝2内出土の土器と同様の特徴を示しており、基本的には同一集落に属していたものといえる。ただ、ここでは溝2には見られなかった鉢類が在ることが特徴的である。出土した土器はあまり摩滅していないため、北へ伸びる溝4から流れ込んだ可能性もある。

鉢 (48・49)

(48)は口径約41.6cm、現高約32.4cmとかなり大型である。口縁部は短く「く」の字に外反し、胴部は口径以上に張る。体部外面には横・斜め・縦と三段階の板ナデ調整が、内面は基本的に横方向のヘラミガキを行う。(49)は、肩部以上を欠損する。(48)を若干押しつぶしたような形態になるものと思われる。外面の底部付近は、二次焼成により大きく剥離する。

甕 (50~53)

(50・51)とも口唇部に刻み目を持ち、頸部はわずかに引き締まり、そこに数条の沈線が巡る。口縁部は、いずれも「逆L字」形を呈する。(51)は、外面に斜め方向の荒いヘラミガキが施される。口径は約24cm前後であり、溝2内出土甕の小型の部類に属する。(52・53)は、別団体の底部である。

c. 溝3内出土の弥生時代後期の土器

壺・甕・高杯があるがいずれも細片であり、その数も少ない。

壺 (54~56)

(54)の口縁部は水平に近く大きく開き、端部はほぼ垂直に短く立ち上がる。端部外面には刺突紋が認められる。(55・56)は大きく開く底部であり、小さな平底が付く。

甕 (57・58)

いずれも、口縁部は「く」の字に外反する。(57)はやや下膨れの体部であり、頸部以下の外面は叩きを、内面は板ナデ調整を施す。(58)は、口縁部内面に板ナデが見られる。

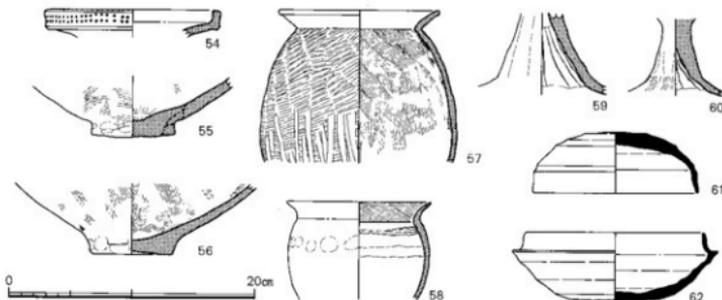
高杯 (59・60)

いずれも脚柱部のみであるが、(60)は充填式の形態となる。

d. 溝3内出土の古墳時代後期の土器

須恵器杯蓋・杯身の各1点ずつが出土している。

杯蓋の(61)は、口縁部と天井部との境となる稜も退化する。杯身の(62)は、口径が約14.6cmと大型化する。両者は口径が大きく異なるため、セット関係にはならない。



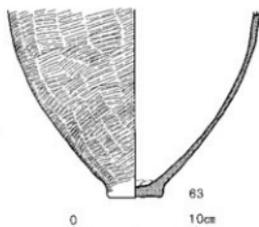
第49図 溝3内出土の土器(2)

e. 土墳墓内出土の土器

土墳墓内からは弥生時代後期の土器が少量出土しているが、その多くは細片であり、図化できたのは右の壺1点のみである。

壺 (63)

上半部を欠損する。体部はわずかに膨らみを持ちながら閉く弾頭形であり、そこに小さな底部が付く。体部外面の上半にはほぼ横方向の、下半には斜め方向（右上がり）の細かな叩きが二段階に施されている。



第50図 土墳墓内出土の土器

f. 方形周溝墓状遺構出土の土器

いずれも、弥生時代終末から古墳時代初頭の土器である。周溝状遺構内からは壺、甕、鉢が出土しているが、土器の遺存状態は非常に悪い。主体部のひとつと考えられる胴部穿孔の壺棺が、1点出土している。

壺棺 (64) 頸部以上を欠損する。胴部径は約38.0cmと大きく張り出し、球形に近く、それに小さな底部が付く。胴部最大径下方に、焼成後の穿孔が1箇所なされている。外面は横方向の叩きの後、縦方向のヘラミガキを施す。

壺 (65・66)

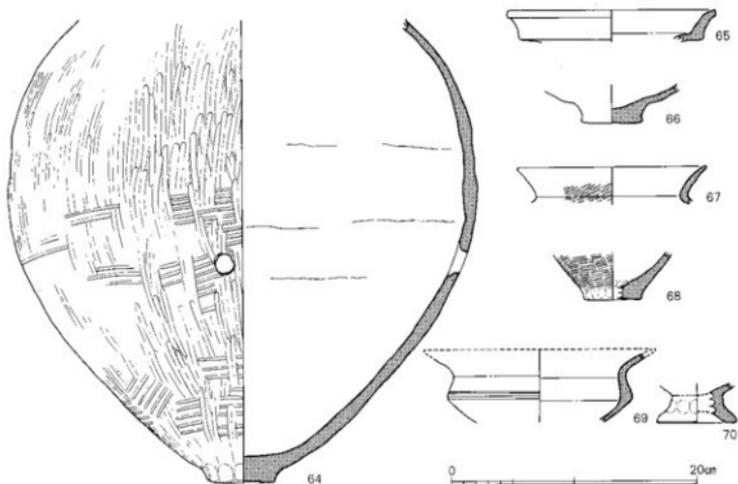
(65) は二重口縁状の口縁部であり、端部は外反しながら閉く。

甕 (67・68)

(67) は、口縁部が「く」の字に外反する。外面には斜めの叩きを施す。

鉢 (69・70)

(69) の体部は浅い算盤玉形をし、口縁部は大きく「く」の字に外反する。胴部外面に沈線を廻らす。



第51図 方形周溝墓状遺構関連の土器

g. 北調査地区包含層内出土の土器

包含層内からは、弥生時代前期から中世にかけての少数の土器が出土している。

弥生時代前期の土器（71）は張り付け突帯を、同中期の土器（75）は凹線紋を施したものである。

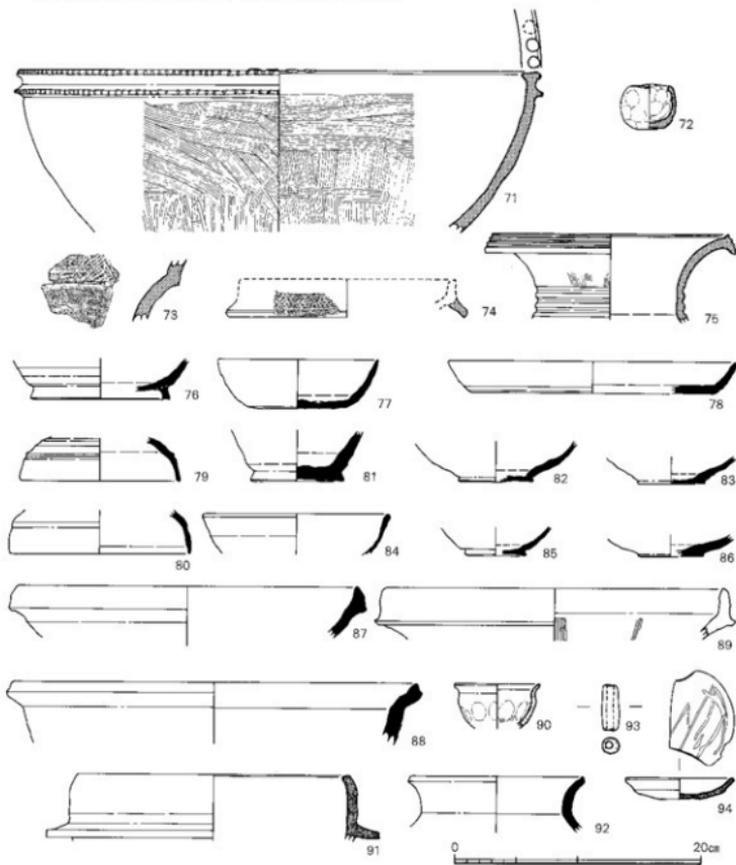
須恵器杯蓋の（79・80）は稜がかなり退化しており、古墳時代後半に属するものである。

奈良時代の土器は、須恵器の杯A（77）・杯B（76）・盤A（78）が出土している。

平安時代後半から鎌倉時代にかけての須恵器では柄（82～86）・鉢（87）・鉢（88）・壺（92）が、さらに、瓦器小皿（94）、瓦質羽釜（91）など比較的まとまった資料が見られる。

（89）は15世紀後半以降と考えられる備前焼の摺鉢であり、内面におし目を持つ。

（93）は土師質の土鍾である。年代の限定はできない。



第52図 北調査区包含層内出土の土器

2. 南調査区旧河道 2 内出土の土器

旧河道 2 はその上層で非常に多くの木器を出土するが、土器は数量が著しく少ない。時期的にも縄文時代晩期から弥生時代前期、弥生時代中期後半、奈良時代とあまり連続性がない。少ない中でも、弥生時代中期・奈良時代の土器はさらに少ない。弥生時代前期の土器は、北調査区の溝 2 内出土の同時期の土器より、縄文土器的な様相を残している。

a. 縄文時代晩期の土器

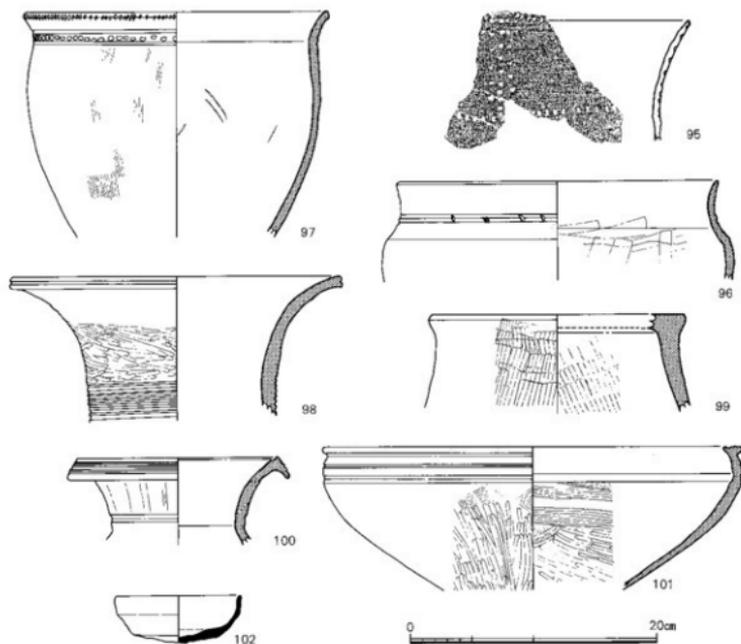
鉢 (95・96)

(95) は、旧河道最下層より出土したものである。緩やかに外反しながら開く、鉢状の口縁部と思われる。外面には刺突文による施文がみられ、口縁端部には小さな刻み目を有する。(96) は、短い口縁部が直立気味にわずかに外反する鉢である。肩部は口縁部よりかなり大きく張り、頸部には二条の沈線後に刺突文を行う。内面は、大きく横方向にヘラケズリする。口径25.6cm、現高8.1cmである。

b. 弥生時代前期の土器

甕 (97)

口縁部が緩やかに短く外反し、胴部は口径以上に張らない。口唇部には小さな刻み目を、頸部には二条の沈線を巡らし、その間に刺突紋を施す。体部外面に縦方向の刷毛目が若干残る。



第53図 旧河道 2 内出土の土器

壺 (98)

頸部が直立した後、口縁部は外湾しながら大きく開く。口縁端部と頸部に沈線を巡らし、外面下半を横方向にヘラミガキする。口径約26.2cm。

器台形土器 (99)

脚部は下方に向かって開き、内外面とも斜め方向に板ナデする。台部径約20.4cm。

c. 弥生時代中期の土器

壺 (100)

外湾しながら外反する口縁部であり、端部は斜め下方に垂下して凹線の巡る平坦面となる。外面を縦方向にヘラミガキする。口径約16.0cmを計る。

鉢 (101)

外面に凹線の廻った口縁部は内傾し、その端部は外方に肥厚する。外面は板ナデの後縦方向にヘラミガキし、内面は上半を横方向の板ナデ、下半を斜めにヘラミガキする。口径約32.6cmとかなり大きい。

d. 奈良時代の土器

杯A (102)

口径約10.1cm、器高約3.8cm。底部は、ヘラキリ未調整。木器包含層の第⑦層から出土したものである。

金属製品

1. 銅銭 (1・2)

(1) は旧河道 2 内の木器包含層第⑦層から出土したものであり、「祥符元寶」と読める。(2) は新土内からの出土であり、「寛永通寶」と卒うじて読み取れる。他に 1 点在るが、まったく判読できない。

堂田遺跡第 2 次認調査出土の土器

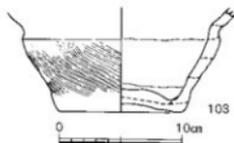
南調査地区の調査中、県姫路土木事務所より急速国鉄(現、JR)山陽本線南隣接地の確認調査の要請があり、6箇所のグリッドを掘削した。結果的には、調査対象範囲は旧河道内のため遺構はまったく存在せず、遺物も No. 1 グリッドから下記に示す縄文土器が 1 点出土したのみである。

1. 縄文土器

鉢形土器の底部である。体部は、大きく内湾を繰り返しながら開いていくと思われる。胎土は非常に荒く、外面に斜め方向の貝殻条痕文を残す。現高約8.5cmを計る粗製の土器である。



第54図 旧河道 2 内出土の銅銭拓影



第55図 堂田遺跡第 2 次認調査出土の縄文土器

木 器

昭和57年度の調査で出土した木器は、南調査区の旧河道2と北調査区の旧河道1の2本の旧河道内より出土したものである。南調査区の旧河道2は、55年度調査時に木器の出土した旧河道と一連の遺構である。この旧河道2は、弥生時代前期から中世までの長期間にわたって稼働していた旧河道である。出土木器には若干弥生時代後期のもも含まれているが、その多くは奈良時代末から平安時代初頭にまたがるものである。また、北調査区の旧河道2も、旧河道1とはほぼ同じ時期に稼働している。その出土木器には旧河道2より若干の時期幅があり、弥生時代後半・古墳時代そして奈良時代から平安時代のもまで含まれるが、製品は少なく比較的部材関連のものが多く見られる。

1. 祭祀具 (19~26)

a. 斎串

両端の両側面に二カ所ずつの「V」字形の入り込みをいれる形態 (19・20・22) と、三カ所の切り込みを入れるもの (23~25) の2形態がある。(21・26) も上記のいずれかに属するものと思われるが、細片のため形態は不明である。斎串には、いずれも片面もしくは両面に細い切痕が多数あり、(20・23) には小さな穿孔がある。(26) にいたっては穿孔に樺皮が残存していることから考えると、これらはいずれも曲物 (御敷) の底板もしくは天井板を転用したものと思われる。よって、(20・21) のように一端を斜めに切り落とす形態は故意のものではなく、転用材の曲面をそのまま利用したためである。長さは最長の (19) で約40.6cmであるが、他は一端を欠損するため長さは不明である。幅がほぼ3cm前後で一定しているため、長さもほぼ同一規模であったものと思われる。

b. 剣形

2形態に細分できる。(27) は全長約17.3cm、幅約3.3cmである。断面が杏種形を呈し、両側面に二カ所の切り込みを施す。先端は両側面から削り込んで尖らす。(28~32) は断面楕円形の棒状を呈し、その一端に寄った両側面に把手部と刃部とを区別するように切り込みがなされている。いずれとも、不定位置に小さな穿孔がなされているため、転用材を利用したものと思われる。長さは最も長い (28) で現長約40.9cm、幅は2.2~3.2cmである。(27) は長さも短く先端が著しく尖っていることから、槍形となる可能性もある。いずれも、表面は丁寧に調整する。

c. 鬮物

(33) は長さ約12.9cm、幅約2.4cm。荒く面取りした隅丸角材の上端を斜めに切り落とし、その下方に浅い切り込みを入れることで頭部を表現する。体部は短く半載し、別木作りの基部に固定するための結束用の切り込みを設けている。

2. 食事具 (36~41)

a. 箸状

(36~41) は、径0.7cm前後の棒状を呈する。頭部は (36~38) のように面取りするものと、(39・41) のように球状に作り出すものがある。一箇所でも20本あまりがまとまって出土しているため、祭祀用の串状木器の可能性もある。長さは、最長の (36) で約19.3cmを計る。

b. 杓

(42) は現長約20.7cmの一木作りの縦杓であるが、遺存状態は非常に悪い。材を縦木に用い、体部は径約6.0cmの球形状を呈する。把手部は体部の口縁部から垂直に作り出され、体部寄りに一孔を穿つ。

3. 工具 (43・44)

a. 筥

(43) は基部を幅約3.8cmと扁平に作り、把手部は径約1.7cmの棒状とする。全長約43.3cmを計る。(44) は、先端部の肥厚する筥状工具等の把手部の先端と思われる。径約2.3cm、現長約10.5cmを残す。

4. 織器 (45~47)

a. 刃杆

(45) は全長約32.8cm、現幅約2.7cmあり、両端部は断面円形に短く作り出す。中央部は扁平に作られていたと思われるが、大きく欠損する。背部には、極小さく「V」形に切り込みがされている。

b. 布巻具

断面が棒状の(46)と板状の(47)の2形態がある。(46)は全長約45.8cm、幅約2.7cmであり、両端を若干細めるが、その先端をわずかに肥厚させる。(47)は現長で約48.5cmであるが、ほぼ全長に近いものと思われる。幅は約3.2cmであり、両端近くの両側面に「V」形の切り込みを持つ。

5. 農具 (48~66)

a. 大足

引き綱の装着法によって、6形態に細分できる。(48・49)は、鼻緒孔前方に一孔、後方に二孔を穿つ形態のものである。(48)は全長約31.5cm、現幅約7.5cmを、(49)は現長約35.8cm、幅約10.5cmを計る。基本平面形は長方形であるが、(49)は前方の両隅を小さく斜めに落とす。(50~52)は、結束孔が四隅に穿たれる形態のものである。(50・51)は鼻緒孔ともども方形の穿孔であり、(50)は後方両端を、(51)は前方一端を斜めとする。いずれも調整痕が鮮明に残り、未使用の可能性が高い。(50)は全長約49.1cm、幅約15.0cm。(51)は全長約49.0cm、幅約14.3cmを計る。(52)は下半を欠損するが現長約35.0cm、幅約13.9cmである。(53)は先端側に溝を側面に割り込みを設け、ここに紐を掛けたものと思われる。後方には、その痕跡がない。全長約52.6cm、現幅約7.6cmを計る。(54・55)は前方鼻緒孔一孔を穿ち、後方には両側面に割り込みを設ける。(54)は全長約50.6cm、幅約17.6cmで前方両端を、(55)は全長約32.1cm、復元幅約9.9cmを計り四隅を斜めに落とす。(56~58)は、両端両側面に割り込みを持つ形態である。(56)はこの割り込みが2箇所ずつであり、全長約56.2cm、幅約14.2cm。曲物底板の転用材のため、両小口がわずかに弯曲している。(57)は前方両端を小さく斜めに落とすものであり、全長約52.2cm、幅約12.7cm。(58)は、平面形が小判形をしていたものと思われる。現長約50.0cm、現幅約7.2cmをみる。(59~61)は結束用の痕跡を持たない形態であり、基本平面形は長方形である。(59)は全長約49.3cm、現幅約8.4cm。(60)は全長約37.0cm、現幅約5.7cm。(61)は全長約39.8cm、現幅約7.7cmを計る。

b. 鋏

(62)は先端部を欠損する、現長約15.0cm、現幅約8.9cmの平鋏である。船形突起は高いが、かなり短くなる。納納孔は隅丸の方形であり、鋭角に穿たれる。頭部の背面には、泥避け装着用の突起を有する。

c. ナスビ形鋤もしくは鋏

(63)は現長約23.3cm、現幅約9.8cmで、作りは比較的分厚い。遺存状態が著しく悪いため、辛うじてナスビ形と分かる状態である。基部先端と歯部の大半を欠損し、ヘタ部分付近しか残存していないため、鋤になるか鋸かの判断はできない。

d. 穂換具

(64) は半存状態であるが、平面形は平行四辺形をしていたものと思われる。片面の背面付近から擦り切りを入れ、その両端に紐通し用の小さな穿孔を二孔施すが、使用の痕跡はみられない。現長約7.8cm、最大幅約6.6cmを計る。(65) も約半分を残すが、刃部は欠損する。紐通しの小さな孔は直接紐によって穿孔されており、頻繁な使用によって大きな歪れを生じている。現長約6.5cm、現幅約5.2cmを計る。いずれとも木目に平行した木取りを行っている。

6. 柄 (66)

a. 鎌柄

(66) は、芯を持たない材を断面円形に作り出した鎌の柄である。柄の中央部は若干細くなり、先端は縦に割れを入れ、固定金具を巻くために一段細くなっている。頭部には、中子固定用の木釘穴が2カ所見られる。全長約33cm、最大径約3.2cmを計る。

7. 履物 (67)

a. 下駄

(67) は、一木作り二枚歯形の下駄の前歯付近である。現長約12.8cm、現幅約10.0cmと著しく遺存状況が悪く、平面形態も知り得ない。前歯部は、後方に向かって斜めに作り出されている。

8. 発火具 (68)

a. 火錐臼

(68) は現長約21.4cm、幅約2.5cmの棒状であり、断面は方形を呈する。その一側辺側にみられる5カ所の火錐部はいずれも使用されており、内面が黒く炭化している。

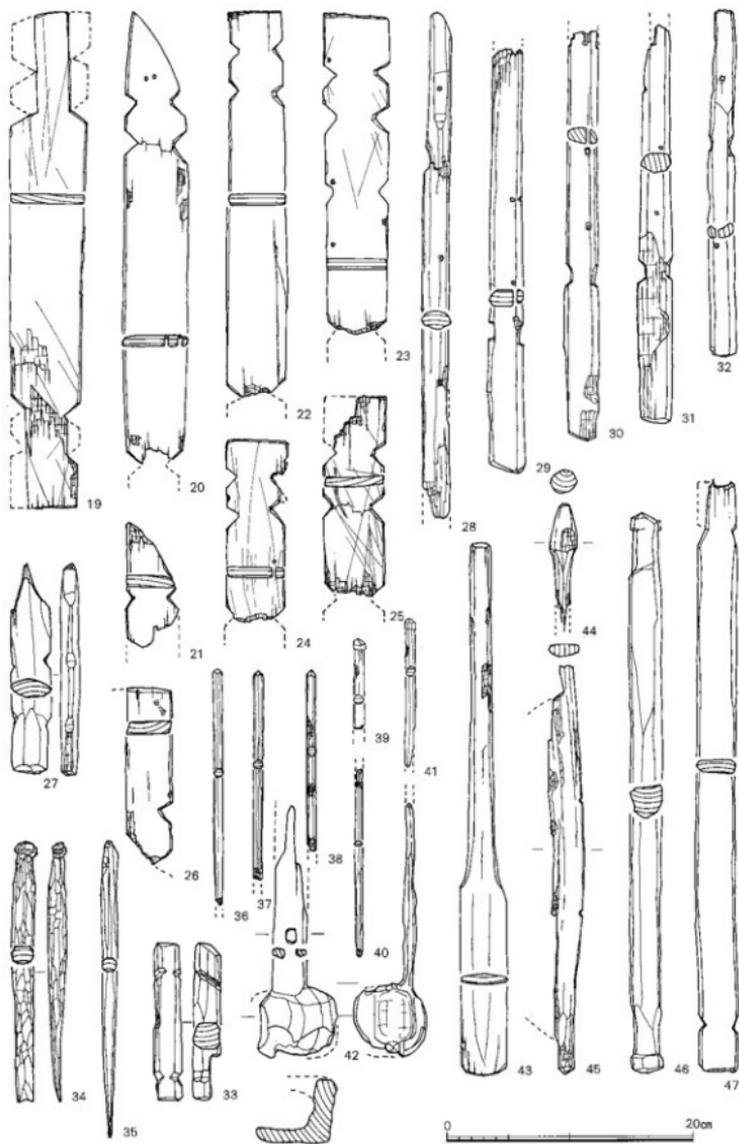
9. 建築部材 (69~72)

a. 格子枠

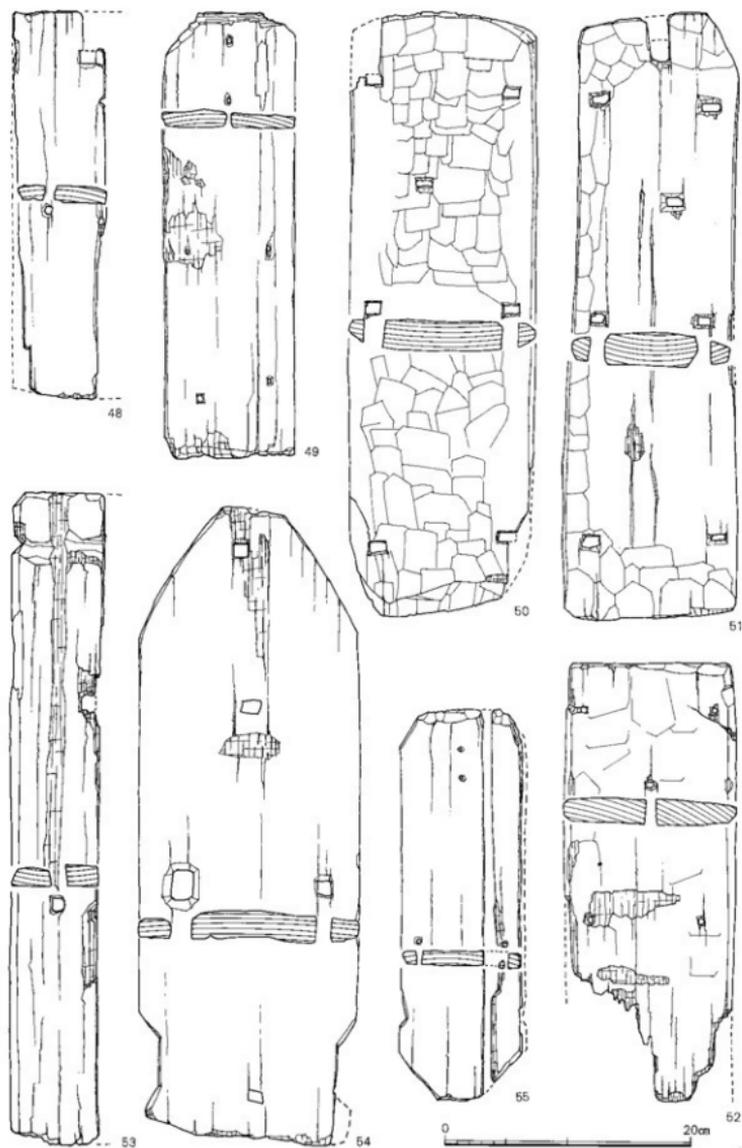
(69) は現長約31.8cm、幅約5.4cmの角材であり、6cm前後の間隔で方形の孔が貫通して穿たれている。(70・71) は、蹴放し材である。(70) は全長約78.2cm、幅約19.0cmの長方形平面の両小口中央部に大きな削り込みを設ける形態であるが、(71) は両小口の片隅に削り込みを入れ、一方の隅を斜めに落とす平面形態を呈する。全長約51.0cm、幅約11.4cm。いずれも、一小口寄りに方形の一孔を有する。(53) は、一木削り出し梯子の最下段部である。全長約36.2cm、幅約12.8cmを計り、下端を丸く仕上げる。

10. その他の部材 (73~76)

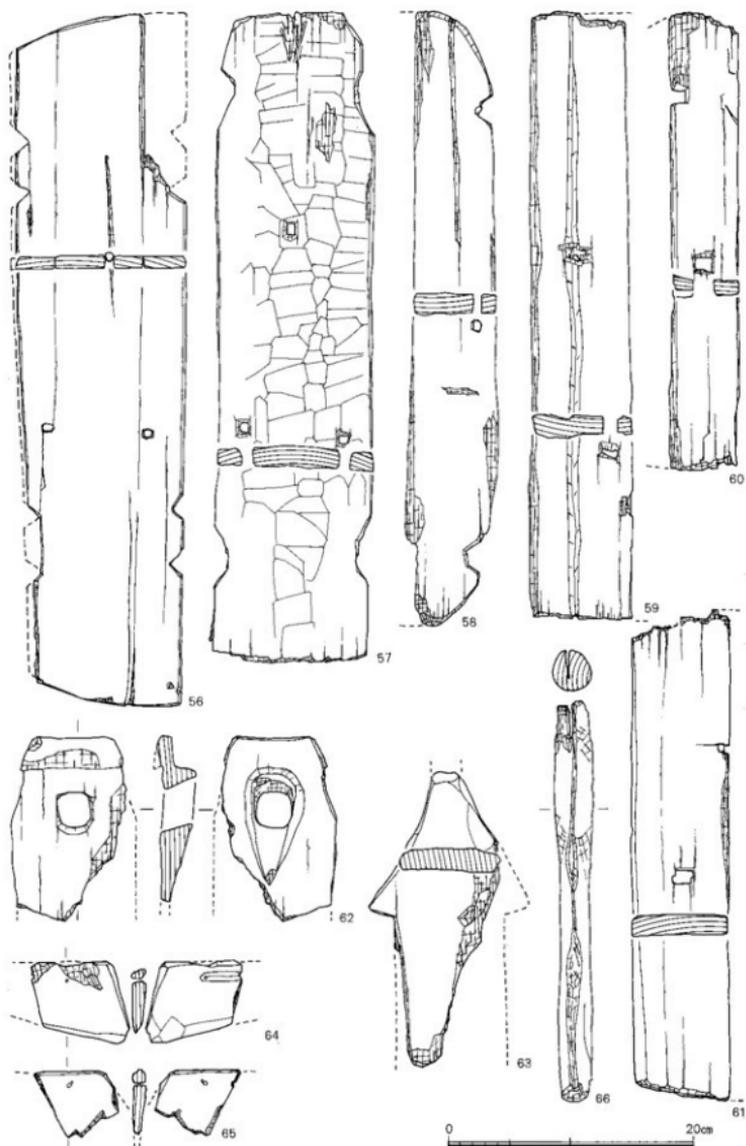
(73) は側辺が二段に弧を描き、先端は細くなる。上端には、装着用の脛が切られていたものと思われる。全長約10.0cm、現幅約2.9cmである。(74) は全長約6.2cm、径約2.2cmの短い棒状であり、下半はわずかに削り込まれて細くなる。上端から半分近くは、中空となっている。(76) は全長約41.1cm、幅約4.1cmの棒状材である。その両端は同一面側から組合せ用の脛が切られており、そこに6本前後の木釘が打たれている。上記3点は、用途・器種とも不明である。



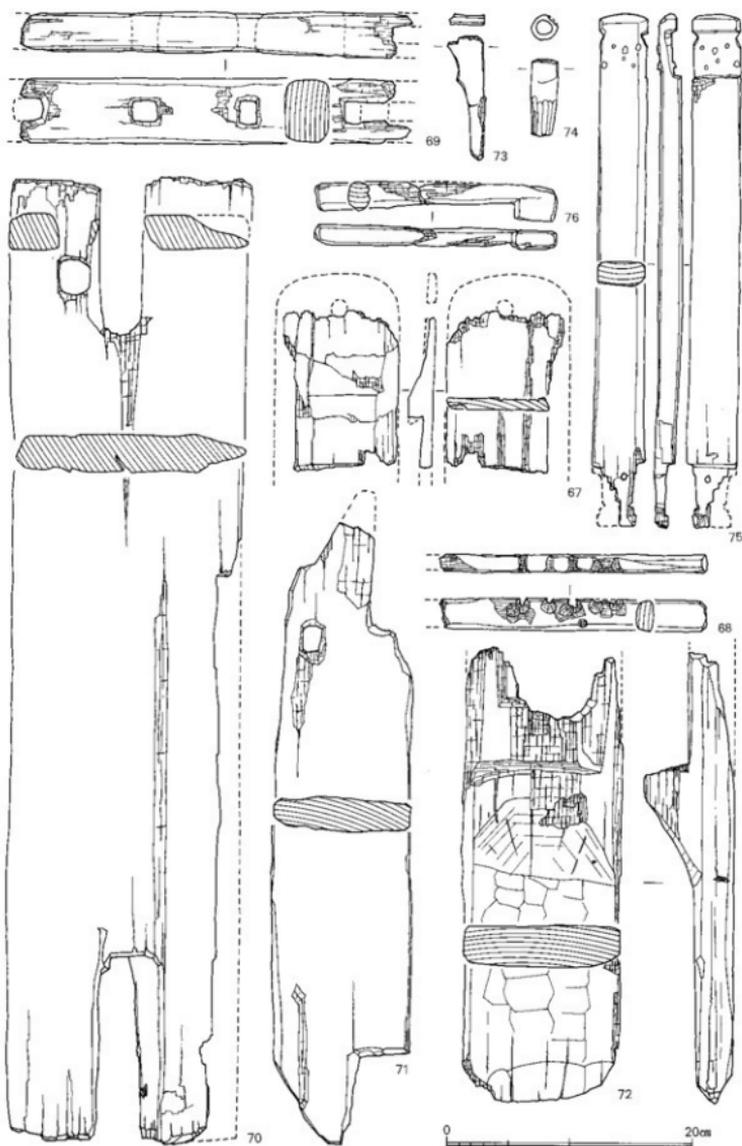
第56図 旧河道2内出土の木器(1)



第57図 旧河道2内出土の木器(2)



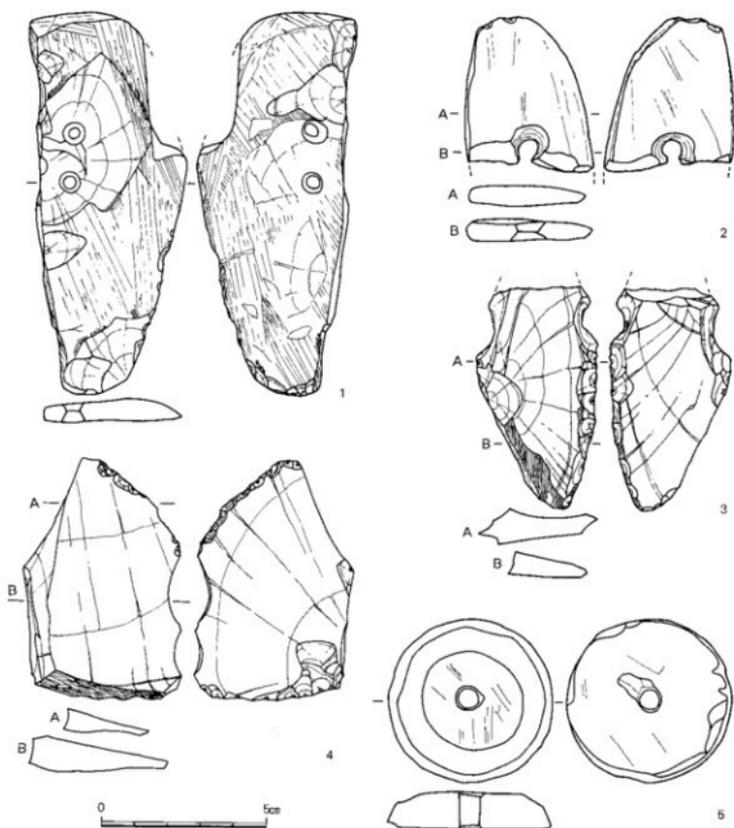
第58図 旧河道2内出土の木器(3)



第59図 旧河道2内出土の木器(4)

石 器

図化した石器は6点であり、すべて北調査区から出土している。(1・2)は粘板岩製石包丁であり、いずれも溝2から出土している。(1)は欠損部にも使用痕があることから、使用前の欠損と考えられる。(2)は、下半部を大きく欠損している。(3)は安山岩(サスカイト)製の打製石包丁と考えられるが、削器の可能性もある。刃部は、連続的に細かな調整を両面から施すことによって作り出している。(4)も安山岩(サスカイト)製の削器であり、素材剥片の側縁に刃部を作り出している。(3・4)とも、溝1からの出土である。(5)は、緑泥片岩製の紡垂車形石器である。直径5.0cm、重さは49.1gを計り、包含層内からの出土である。



第60図 北調査区出土の石器

第4節 昭和60年度の調査

A. 遺構

遺構の概要

昭和60年度は幅20m、長さ60mのほぼ長方形を呈する調査区を設定し、調査を実施した。調査年度別の調査区との関係からは、昭和57年度調査区の北側に位置しており、更に北側の葦辺橋までの間が当該調査区となっている。今回の調査では、昭和57年度調査区と隣接している関係上、既に検出されている遺構としての旧河道2があり、これとの関係が調査の主目的と考えられている。

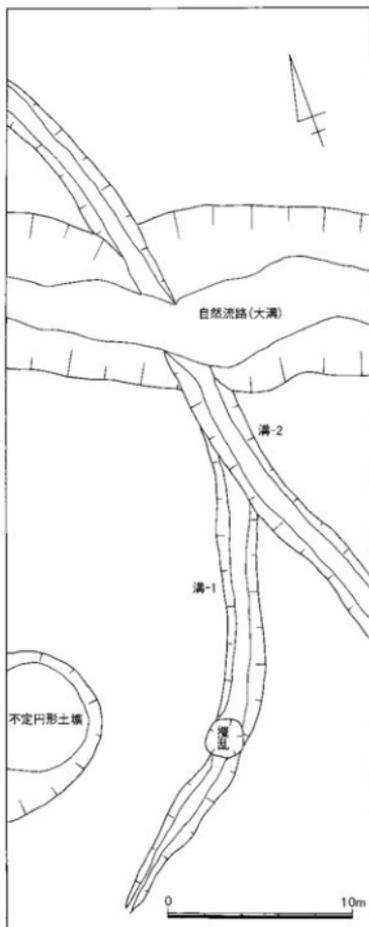
調査に伴う掘削の結果では、昭和57年度調査結果と同様の土層堆積、遺構のあり方が見られ、今回の調査区にて検出された遺構としては、古墳時代後半の不定円形状の落ち込みと、前述の旧河道2へとつながる弥生時代前期溝と、更に切り合い関係にある前期溝、また、前期溝と交差する自然の流路（大溝）である。

1. 溝-1

溝-1によって切られ、自然流路（大溝）から始まって、南へ延びる幅2m弱の溝である。溝は北側で40cmのU字溝となり、南側では深さ50cmのV字溝となっている。

溝内には砂、細礫の堆積が見られ、完形品の土器（壺・甕）も数点出土している。

なお、南端は昭和57年度調査地区の旧河道2に合流するものと考えられ、今回調査にて検出された自然流路（大溝）から旧河道へのパイプ的な連絡流路としての役割を持つものであろう。



第61図 遺構全圖

2. 溝-2

調査地区の中央部を、北から南へ斜方向に横断する溝であり、自然流路（大溝）と交差し、溝の肩は削平されてしまっているが、溝底に痕跡を刻んで、北方へと更に延びる。

溝の幅は溝-1と同様2mであり、南側で深さ77cm、北端で87cmとなり、北へ向かう程深くなっている。

溝内には粒の粗い砂礫を中心に堆積しており、短期間での埋没状態が伺い知れる。

また、遺物も土器の破片が散見される程度で、溝-1とは少し様相を異にする。

溝-1と2の前後関係は、自然流路南の交差付近の断面観察から、切り合い関係が把握でき、溝-1の方が古いことが判明している。

3. 自然流路（大溝）

幅8~9m、深さ0.6~0.7mの流路であり、昭和57年度調査区の旧河道に類似しており、幾つか見られる旧夢前川の支流の一つであろうと思われる。

溝は西から東へ向かって流れており、溝内には黒色の粘土層が幾重にも堆積し、途中に砂・礫の間層を挟んで、弥生時代前期と古墳時代の遺物包含が見られる。

流路自身は元々自然のものであるが、肩口付近に見られる枕・板材など部材の存在から、人工的な護岸の痕跡も伺える。

4. 不定円形土壌

調査区南方の西端にて検出された土壌状の落ち込みで、不定円形状を呈する。西側は更に調査区外へと広がっている。検出規模は、長径で8~10m、深さ25~30cmであり、砂質の土層堆積が見られた。

また、土壌内からは、須恵器を中心とした土器が検出されており、時期決定の目安となっている。

今回の調査では、住居址等の遺構は検出されていないが、集落に密接につながる溝・流路の検出があり、近接地に集落の存在を想定させる。

また、自然流路（大溝）内から多くの木製品の出土もあり、遺構よりも遺物の面からの生活の復元に重要な意味を持つであろう。

B. 遺物

昭和60年度の調査で出土した遺物は土器・木製品であり、総数にして約180点である。

土器には弥生式土器・土師器・須恵器・陶器などがあり、中でも弥生時代前期を中心に、弥生時代後期から古墳時代前半期にかけてのものが大部分となっている。

須恵器は古墳時代後期から歴史時代にかけて、幅広い時代の中で少量見られる。

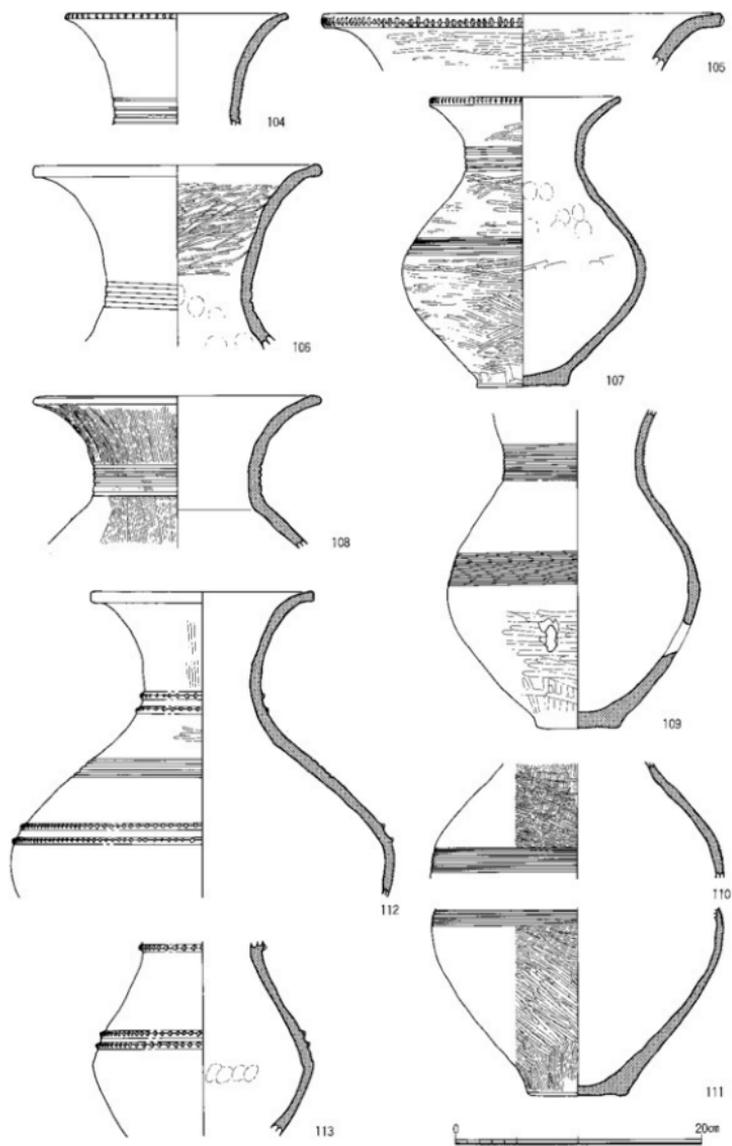
また、陶器は底部破片を中心に、旧用水路などの直接遺跡に伴わない地点から出土しているが、二石入りの備前焼大甕はほぼ完形品に近く注目される。

土 器

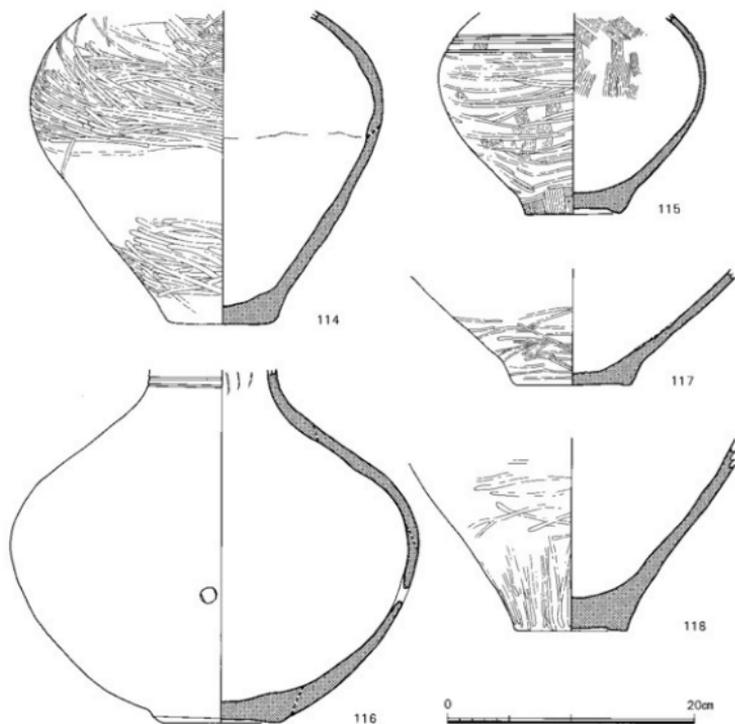
土器は基本的には包含層と遺構内堆積層からの出土である。

調査区の基本土層は、①耕土、②床土、③茶灰色土、④黄灰色粘質土（一部砂礫）であり、④層上面が遺構面となり、遺構が刻まれている。

基本土層中からの土器出土は、③層からの須恵器・陶器が少量見られ、遺構別の出土は、溝-1と2から前期弥生式土器、自然流路（大溝）からの古墳時代前半期の土師器と、溝-2が交差している関係からの前期弥生式土器が、不定円形土壌からの須恵器が見られる。



第62図 溝内出土の土器(1)



第63図 溝内出土の土器(2)

1. 弥生式土器(前期)

弥生式土器としては、溝-1・2を中心に検出されており、特に溝-1からは完形品の土器も見られる。器種的には、蓋・甕・壺・鉢が見られるのみで、数量的には壺・甕が多く、同量程度の割合を占める。

壺(104~118, 143~149, 151~152)

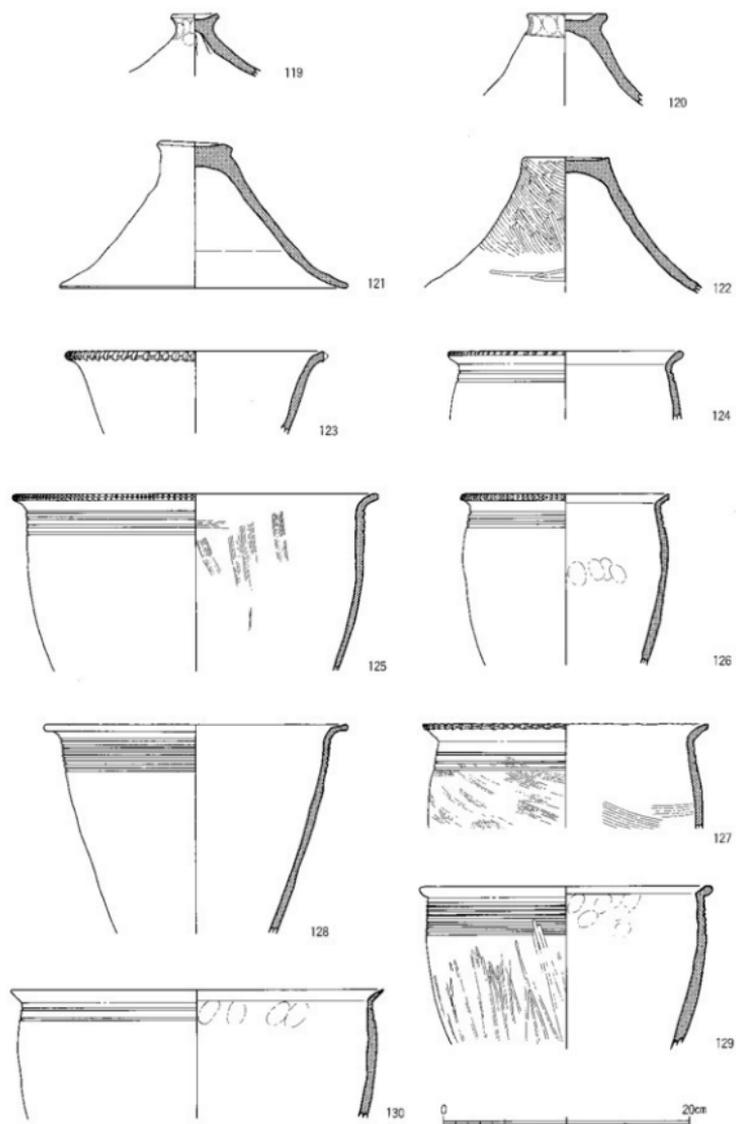
ほとんどが、溝-1・2からの出土であり、口径20cm前後を中心に、30cmを超えるもの(105)もある。形態的には大きくラップ状に開く口縁部を持つ。胴部中央に最大径を持ち、大きく胴の張るもの(107・112)や胴部が球形に近いもの(115・116)などが見られ、唯一全容の知れる(107)では、口径14.9cm、器高22.9cmを測る。

文様的にはヘラ描き沈線・刻み目・貼り付け突帯の組み合わせで理解される。

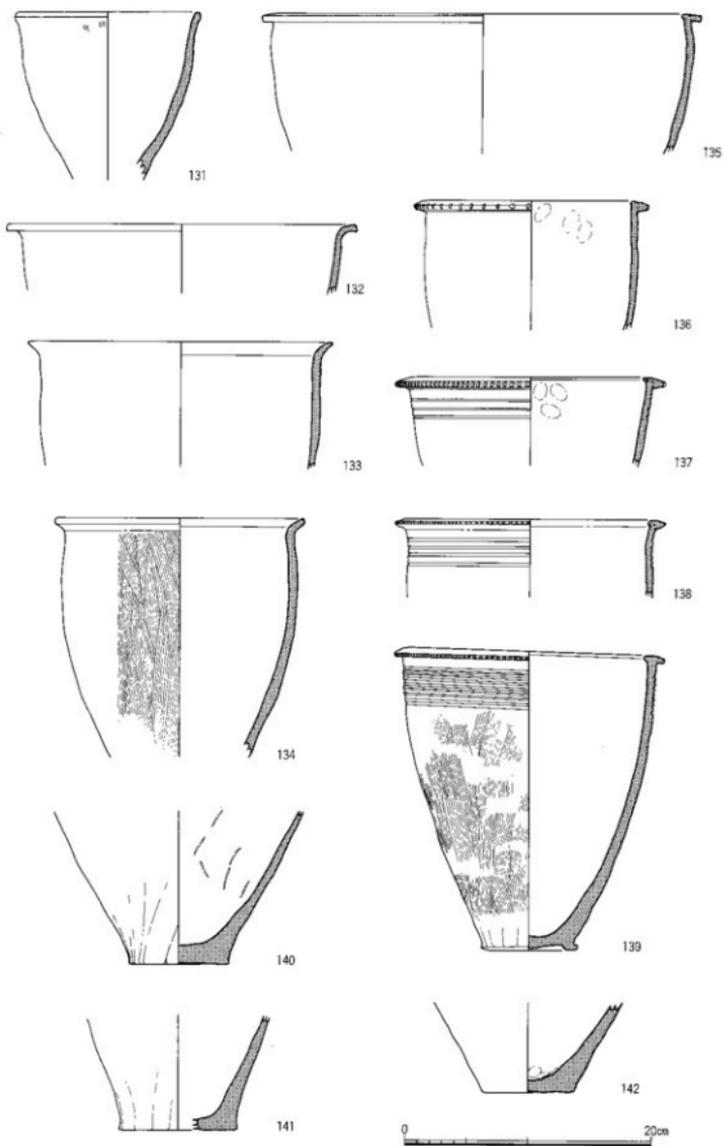
口縁端部を観察すると、無文のもの3点、刻み目を施すもの3点、不明8点である。

頸部ではヘラ描き沈線のみ6点、突帯のみ2点、不明6点で、突帯と沈線の組み合わせは見られない。

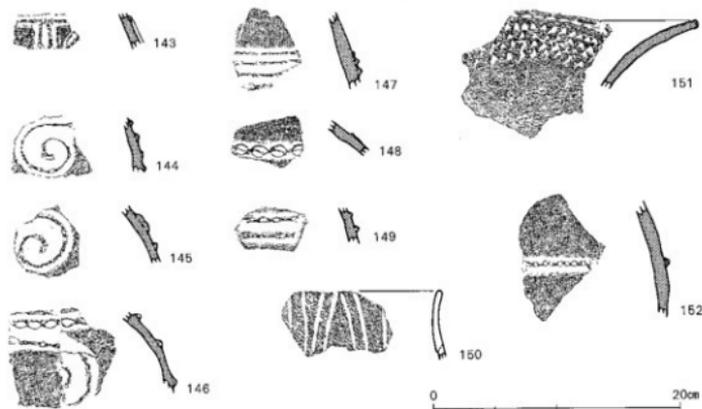
胴部はヘラ描き沈線のみ4点、突帯が2点、不明6点で、体部全体で見ると、突帯のみ1点、沈線のみ4点、(112)のように両者の組み合わせの見られるもの1点である。



第64図 溝内出土の土器（3）



第65図 溝内出土の土器（4）



第66図 出土土器の拓影

胴部破片から窺える文様には、うず巻文（144～146）や三角刺突文（151）を持つものも見られる。体部の調整には、ヘラによる磨きと刷毛によるものが見られる。

蓋（119～122）

溝-1・2からは（120～122）の3点が出土している。

つまみ部上端がやや凹み、笠形に開く体部を持つものが中心である。（121）は口径23.1cm、器高12cmを測る。全般につまみ上端は指押さえ調整、外面はタテ刷毛、内面ナデによる調整である。

甕（124～142）

口径15cm前後と20～25cmのもの、30cm前後の大・中・小3種類が見られるが、中形のものが多い。器形の全容を知れる（139）は口径22cm、底径7.7cm、器高23.9cmである。

口縁部の形態は、如意形のもの11点、逆L形5点であり、如意形の内、口縁端部に刻み目を持つものは4点、持たないものは7点である。また、逆L形の内、刻み目を持つもの4点、持たないもの1点である。

頸部に施されるヘラ描き沈線について見ると、沈線を持たないものは、如意形で4点、逆L形で2点、沈線を2本持つものは、如意形2点、逆L形では無く、3本は如意形で2点、逆L形で1点、4本が如意形・逆L形共に1点、7本は如意形2点、8本が逆L形1点のみとなっている。

体部外面には刷毛目による調整が顕著に見られる。

鉢（123）

小形の鉢が1点見られる。口径20.6cmで緩やかに外反する体部を持ち、頸部で斜上方に立ち上がる。口縁端部には刻み目を施す。

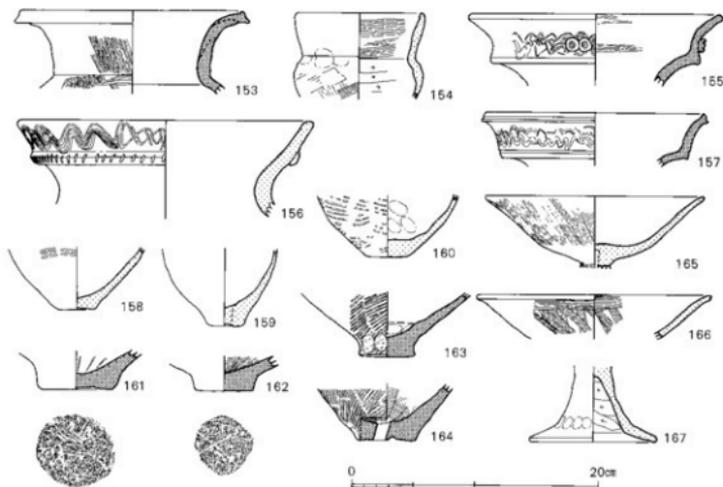
2. 弥生時代末～古墳時代の土器

ここでは弥生時代末から古墳時代前半にかけての土器を見る。

弥生時代末の土器としては、壺・甕・高杯、鉢などが見られる。

壺（153・155・157）

壺は3点知られており、直立気味の頸部から緩やかに外反する口縁を持つもの（153）と、所以二重



第67図 弥生時代末から古墳時代の土器

口縁を成すもの(155・157)の二種類がある。後者は、頸部と口縁部の境界が明確に区分され、口縁部を文様帯とし波状文を施している。また、(155)には円形浮文も施されている。

甕(161~164)

底部付近のみの破片であり、突出した底部の外面にはタタキ目が施される。(164)は底部に穿孔されている。

3. 土師器(154・156・158~160・165~167)

壺(156)は口径24cmの二重口縁を成す。頸部から大きく外反する口縁を持ち、口頸部の境界には刺目を施した突帯を貼る。口縁部は文様帯となり、複数の波状文を施す。

鉢(154)は口径9.4cmで丸味を持つ胴部から口縁部は「く」の字状に屈曲し、斜め上方に立ち上がる。内外面共にナデによる調整が見られる。

高杯は杯部1、脚部2点の合計3点見られる。(165)は底部から緩やかに外反して延びる杯部破片であり、屈曲に伴う段は見られない。脚部には2種類あり、(166)は緩やかに延びて終る脚部で、(167)は細身の脚部で、大きく屈曲して端部に向かう。

甕(158・159)は底部のみの小破片で、丸底に近い平底となる。一部外面にタタキ目が見られる。

4. 須恵器

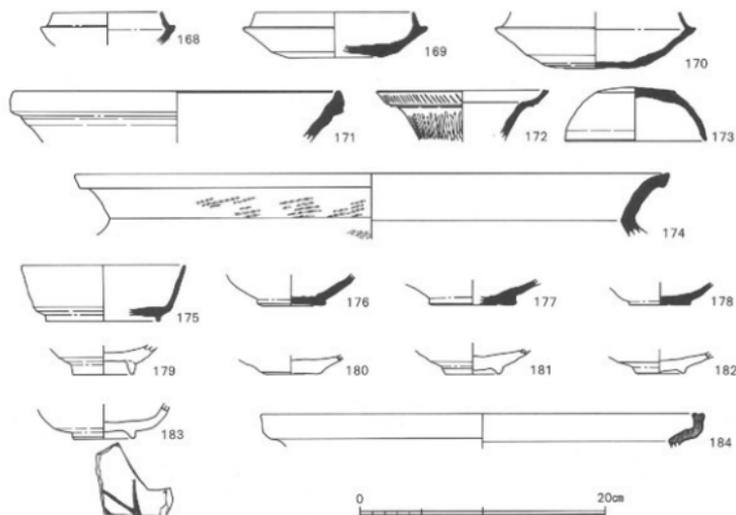
古墳時代から歴史時代にかけての須恵器が少量出土している。

杯(168~170・173)

古墳時代からの伝統を引く形態の杯であり、身が3点と蓋が1点出土している。

身は口径9cm弱のもの(168)と、15cm前後の大型のもの(169・170)の両者が見られるが、共に口縁部立ち上がりはやや内傾気味に立つ。底部4分の1程度にヘラ削りが見られる。

蓋(173)は口径11.4cmのもので、丸味を持って広がる天井部は、ヘラ切り未調整のままである。



第68図 出土の須恵器・陶器

匙 (172) は口径22cmを測る。口縁部付近の破片で、外面に刺突文を連続して施す。

甕 (174) は口径48cmの口縁付近の破片で、端部はやや尖り気味に外上方に立つ。頸部付近にはタタキ目が見られる。

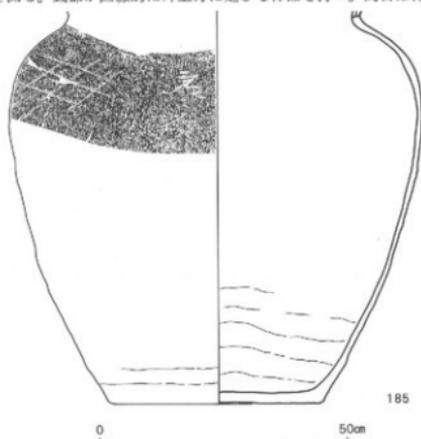
高台杯 (175) は口径13cm、器高4.6cmを測る。底部が直線的に外上方に延びる体部を持つ。高台は体部との境よりやや内側に付き、ほぼ直下に踏ん張って立つ。

碗 (176~178) は全て底部の破片であり、全容は良く判らないが、(177・178) は糸切り底である。

5. 陶器

碗と大甕が見られる。碗は底部ばかり5点見られ、削り出し高台、貼り付け高台と見られる。(181~183) は唐津系と思われるもので、(183) には絵付けの文様が見られる。

大甕 (185) は備前焼二石入りの甕で、「多」の記号と共に、「二石入」の文字が刻まれている。口縁部は欠失しているもの、器高は1mにも達する。



第69図 出土の備前大甕

木 器

昭和60年度の調査で出土した木器は、総数88点である。全て自然流路（大溝）からの出土で、溝内堆積の黒色粘土層からはほとんど検出されている。

自然流路は出土土器から見ると、弥生時代前期の溝が交差している関係から、弥生前期のものも含まれているが、大部分は古墳時代前半の土師器を中心とした時期のものであり、出土土器もほぼこの時期のものと考えて支障はないであろう。

木器の内訳は、杭などの土木建築部材を中心に、用途不明木器8点など、工具・農具・紡織具・生活用品・祭祀具が見られる。

1. 祭祀具

a. 斎串 (81)

一端を欠くか、両側辺に2カ所ずつの「V」字形の切り込みを入れる形態で、4カ所見られる。

現存長で17cm、幅1.4cm、厚み0.5cmで、表裏面とも手斧の痕跡が見られる。奈文研木器集成のC型式M式と考えられる。

b. 刀 (98)

全長31.1cm、幅1cmで柄と刀の境に挟りが加えられている。刃の部分は厚さ0.3cmで断面菱形を呈し、先端は尖っている。

2. 工具

a. 火鑽臼 (77~80)

木製品の中でも多く見られ、4点出土している。

全て加工面と面取りが加えられており、長方形ないしは台形を呈す。(80)は全容が知れる唯一のものであり、他は全て両端を欠いている。臼孔は全て片側面に限られており、側縁に6~12個見られるが、6個が最も多く、(78)のように一度通常の使用后、間隔を埋めていくような臼孔の再穿孔も見られる。

(80)は現存長28.9cm、幅2.1cm、厚さ1.9cmを測る。全般的な規模としては、長さ20数cm、幅2cm強のものが考えられる。臼孔は楕円形を呈し、内面は焦げているが、(79)の右端に見られる臼孔のように未使用と考えられるものも見られる。

b. 榫の子 (96)

心持材の一木を使用し、中央を削り取り、リボン状に形成したもので、断面がU字状の工具による加工痕が残る。中央と両端に加工を加えただけの形式で、全長15.6cm、幅4.3cm、厚さ2.3cmを測る。裏面半分を欠いている。

c. ヘラ状木器 (101)

残存長25.7cmを測り、約2分の1を欠失している。刃部は片面を削って作り出しており、先端に面取りの加工痕を残す。

3. 紡織具

a. 綜棒形木製品 (95)

長さ3.2cm、幅1cm、厚さ1.2cmの軸を作り出しており、経の開口具として綜棒をかける棒、綜棒と考えられる。残存長25.3cmで、一端を欠いているが、断面は紡錘形で幅3.4cmを測る。

4. 農具

a. 又鋤 (97)

8個の破片に破損しており、残り状態は良くない。

基部から緩やかに拡がって、挟り込み両突起を作り出し、更に扁平な2本の歯へと拡がる。残存長46.5cm、厚さ1cmを測る。刃部の長さは31.2cmである。

b. 杵 (102)

大部分が欠失しており、断定に困るものであるが、加工痕や断面の状況から杵の握部と考えられる。残存長8.3cmで、断面は6.5×6.3cmである。

c. 鋤 (107)

7個の小破片に割れており、鋤か權かと考えられるが、厚みから鋤の身の部分であろう。残存長16.2cm、幅9.6cmで厚みは0.65cmを測る。刃縁は両刃状となっている。

d. えぶり (108)

えぶりかと考えられるもので、横長の板材の下端をV字状に切り込んでいる。切り込みは6カ所程度見られるが、柄壺などは見られない。残存長42cm、幅9.8cm、厚さ0.7cmと大きい。

5. 生活用具 (容器)

a. 槽 (99)

舟形の槽であり、残存長45cm、残存幅7.5cm、高さ6.9cm、厚さ2.2cmを測る。破片の為全容は不明であるが、面取りは明確に見られる。

b. 盤 (100)

四脚盤の破片である。長方形の厚板を削り抜いており、口縁が立つ。足は低く削り出されており、2本残って見える。全長45.8cm、高さ8.3cm、厚み2.65cmを測る。

6. その他

a. 剣の鞘 (87)

後に転用された木製品であり、本来鞘として使用されていたと考えられる。幅5cm、厚さ0.85cmの両曲するもので、両端下面にわずかな平坦面を持つ。

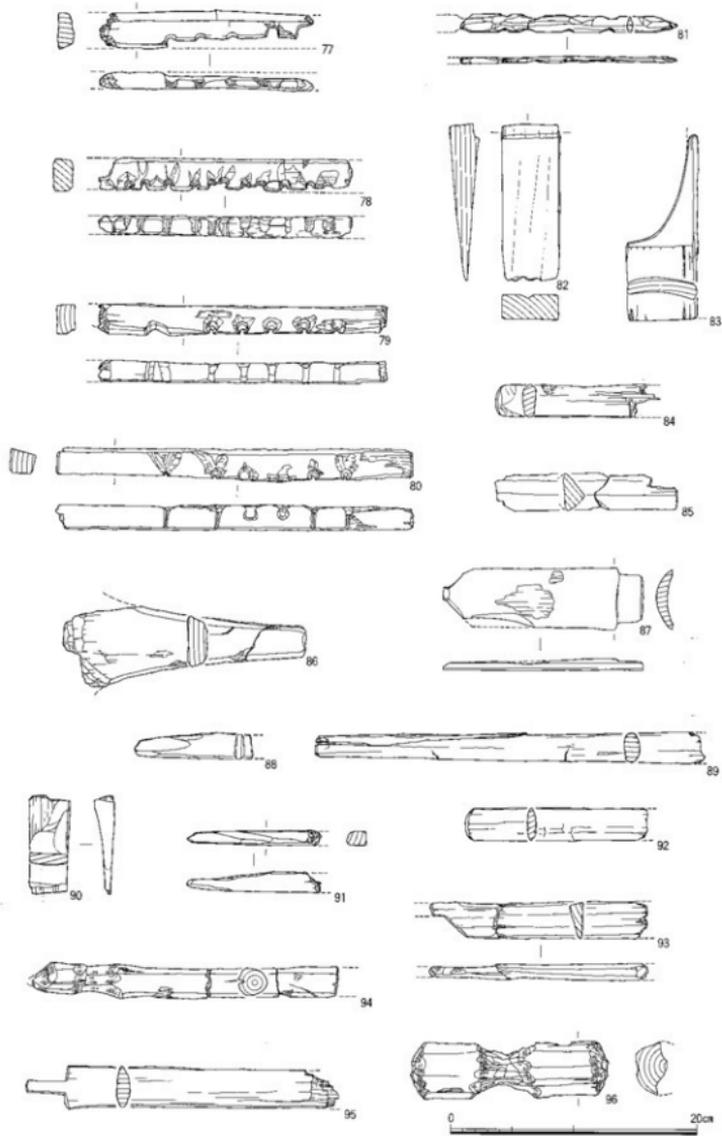
上述の木製品の他、加工痕を持つ用途不明木製品が多く見られるが、言葉の如く用途を決めるには困難が伴う。

また、今回図化したものの他にも、多くの杭・板材などの建築部材が出土している。

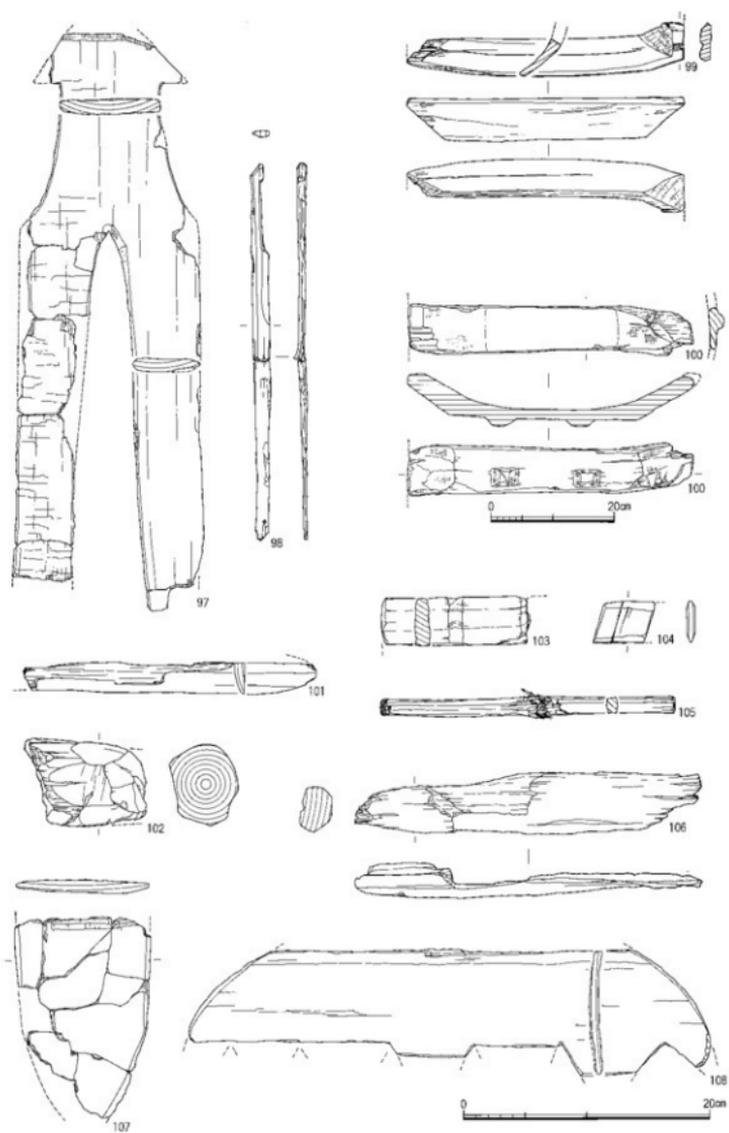
木器から想定すると、火鑽臼や刀、畜串などの組み合わせから、何らかの火に関する祭祀が考えられるであろう。

〔参考文献〕

- 平城宮発掘調査報告Ⅶ 奈良国立文化財研究所学報第26冊 昭和53年3月
- 播磨長垣遺跡 兵庫県文化財報告書12冊 兵庫県教育委員会 昭和53年3月
- 太田英蔵『紡織具』『日本考古学Ⅲ (弥生時代)』1966年
- 丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書 兵庫県教育委員会 1985年3月



第70図 自然流路出土の木器（1）



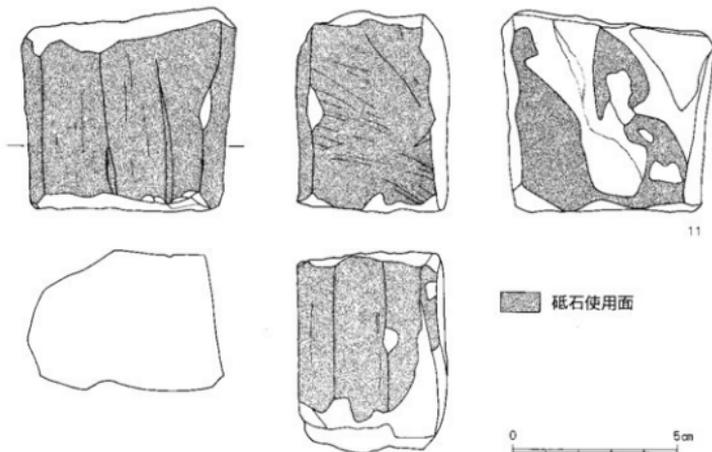
第71図 自然流路出土の木器（2）

石 器

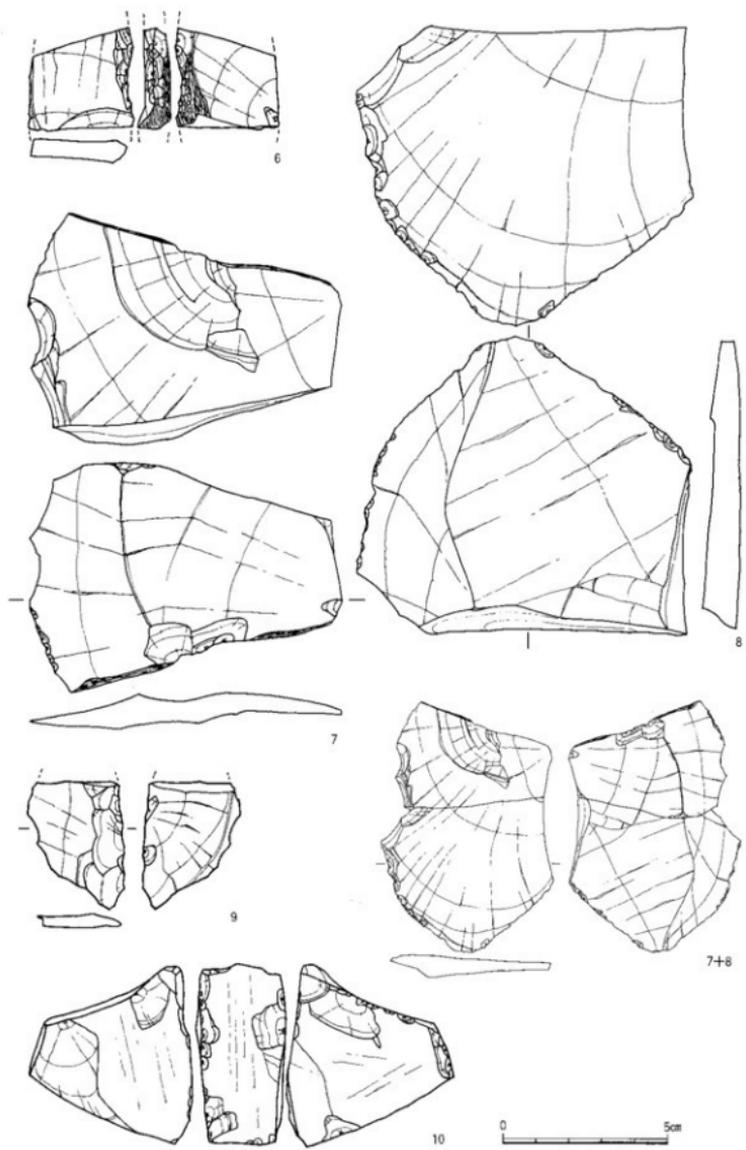
図化した石器は5点である。(6)は安山岩(サスカイト)製の楔形石器である。長さ・幅ともに欠損している。また一部に自然面を残す。(7)および(8)は安山岩(サスカイト)製の削器である。これらは接合することから、大形の剥片を2分割してそれぞれに刃部の加工を加えていることがわかる。また側縁の一部に細かな使用痕が認められる。(9)は安山岩(サスカイト)の剥片であるが、腹面に小さな剥離痕がみられ、使用によるものであると考えられる。(10)の石器は器種不明であるが、稜部には使用によると考えられる剥離痕が認められる。石材は安山岩(サスカイト)である。なお、(6)～(9)の表裏両面は比較的大きな剥離面で構成されており、素材となる剥片を剥離した石核は大形の剥片であろう。(11)は砥石である。断面図は不正六角形を呈し、各面とも使用されている。砂岩製。

表5 出土石器観察表

| 番号 | 器 種 | 石 材 | 長 度 cm | 幅 cm | 厚 さ cm | 重 量 g | 出土地点 |
|----|------|-----|-----------|---------|-----------|----------|--------------------|
| 6 | 楔形石器 | 安山岩 | (3.1) | (3.0) | 0.7 | 10.7 | C区 前期溝 |
| 7 | 削 器 | 安山岩 | (10.7) | 14.8 | 1.2 | 208.5 | J40G 前期溝 |
| 8 | 削 器 | 安山岩 | | | | | |
| 9 | 剥 片 | 安山岩 | (3.9) | 2.8 | 0.4 | 5.1 | C区 前期溝 |
| 10 | 不 明 | 安山岩 | 5.4 | 4.8 | 2.5 | 95.7 | 前 期 |
| 11 | 砥 石 | 砂 岩 | (6.1) | 6.0 | 4.2 | 254.5 | A20G 溝内 黒色粘土 |



第72図 出土の石器(1)



第73図 出土の石器(2)

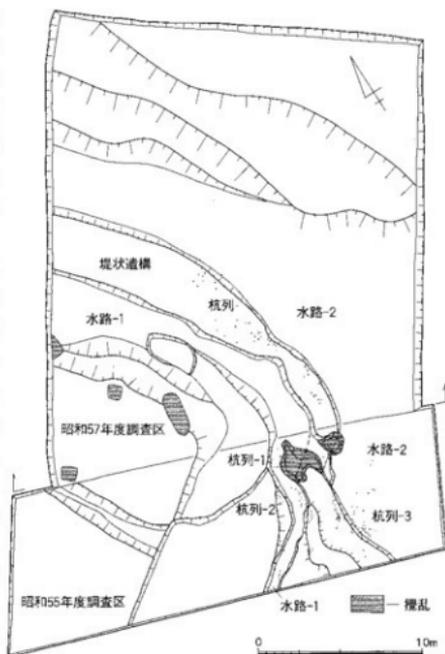
第5章 まとめにかえて

堂田遺跡の調査区は旧河道内であったため、まったく遺構を確認できなかった。よって、ここでは主に八反長遺跡の遺構を取り扱った。ただ、八反長遺跡も調査区の延長は長いものの、その幅が狭いため、十分に遺跡の性格を捉えるまでには至らなかったことを断っておきたい。また、遺物に関しては、八反長遺跡の昭和57年度溝2と昭和60年度各溝内出土の前期土器について、簡単に触れてまとめにかえたい。

1. 昭和55年度・57年度南調査区 の調査結果から

両地区は第4章で述べたとおり隣接した調査区であり、調査結果においても一連の遺構を検出している。両年度で確認した遺構の状況を接合したものが、第73図である。両調査区を貫いて北西から南西に延びる旧河道（旧河道2）の東・西には、縄文時代末から弥生時代初頭に形成された微高地が発達している。その西側の微高地は、第1章で調査区周辺城の等高線の状況から復元した、両田集落の位置する微高地に相当するものであり、明治28年の地形図に「岡田」集落の記載が見られることから、古くから利用（占有）されてきた古夢前川下流域の拠点の微高地のひとつだったものと思われる。ただ、調査区は集落遺跡の外れであったらしく、微高地上には溝の他に顕著な遺構は確認できなかった。両年度の調査とも調査区の幅が規定され調査面積が狭いため、微高地の占有状態をはじめとする遺跡の状況を十分に掌握するまでには至っておらず、遺跡の性格さえ十分に解決できないままとなっているのが現状である。

この旧河道の積極的な活用が見られる最初の時期は弥生時代後期であり、第2の時期は奈良時代後半から平安時



第74図 昭和55年度・57年度遺構図

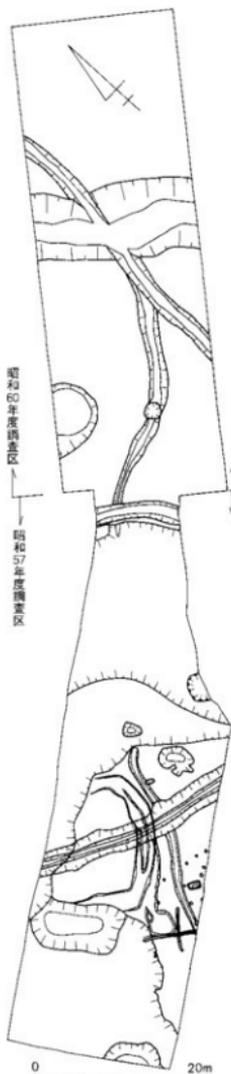
代の時期である。弥生時代後期に旧河道の中央部に構築されたと思われる堤状の土盛遺構は、護岸用の杭列を多数件いながら微高地に沿って屈曲している。昭和55年度の調査では、この堤状遺構によって分水された水路1で、水利に関連すると思われる置石が確認されている。

また、ここで注目したいのは、奈良時代後半から平安時代前半に属する水器類の出土状況である。前述したように、木器類が大量にまとまって出土している状況は、弥生時代後期の堤状遺構の東側、水路2に相当する範囲にほぼ限定されている。もっと端的に言えば、奈良時代後半の時期になってもこの旧河道の河川数は水田化されず、水利利用の「堤状遺構」が延々と保持されていたため、その東側の水路に流された木器類が、まとまって出土する結果になったものと思われる。したがって、検出した護岸用杭列は弥生時代後期のものだけではなく、奈良時代後半から平安時代にかけて追加・補修として設置されたものも多く含まれていると考えた方がより妥当なように思われる。播磨地域の平野部では、この時期にはすでに条里形の地割りが行われているが、この旧河道の流れていた狭い地域には及んでいない。水田として利用することのできない悪条件を抱えていたためであり、その根源はひとえに弥生時代前期から始まる「旧河道」がためである。しかし逆に言えば、この「水道」から周辺の地域は、水利を通して多大な恩恵を得ている。「葦」もそのひとつであり、葦串はその典型である。祭祀具を「水道」に流した主催者は、上流の現「岡田」集落の微高地に居を構えていた有力者に違いない。

2. 昭和57年度北調査区と昭和60年度の調査結果から

両年度の調査区も隣接しているが、昭和57年度の北調査区は生活用の道路を確保する必要から北に向かって著しく狭くなり、幸うじて昭和60年度の調査区とのつながりを確認できる。

昭和57年度の調査区の北端には、少なくとも弥生時代前期まで遡るであろう旧河道1が北西から南東に流れ、この両側に微高地が広がっている。昭和57年度に調査した微高地（以後「南微高地」）は、南調査区との間に形成された狭い微高地であり、その北と西側が旧河道1によって侵食されていることから、その本体部分は調査区の南東側に広がっているものと思われる。一方、昭和60年度の調査区は北側の微高地（以後「北微高地」）にあたり、それも調査区外にさらに広がる様子を示している。ただ、いずれの微高地とも一連の確認調査の結果と等高線による微高地の復元図からみる限り、決して基幹集落が存在したような大規模な微高地ではなく、河川間の比較的規模の大きい中洲程度のものと思われる。



第75図
昭和57年度・60年度遺構図

兩微高地とも、弥生時代前期からの遺構を検出しているが、遺構は溝ばかりで、その性格までは判断しがたい。ただ、微高地上に掘り込まれているため、人口掘削の遺構であることに間違いない。取り分け、昭和57年度調査の溝2内から出土した丸木船の転用と思われる木器は、溝1と交差する箇所幅とその長さがほぼ等しいため、溝2を跨いで掛けられていた、溝1の木桶様の木器ではなかったかと思われる。そのように考えると、直接溝2からではなく、その北側を流れる旧河道1から微高地内に水を引くための、用水施設が存在していたこととなる。

また、各溝内からは非常に遺存状況の良い土器が大量に出土しており、調査地区が集落に隣接する地点にあつているものと思われる。ただ、土器の型式から見ると、前期後半の比較的短い期間の土器しか出土しておらず、中期以降に下るものが見られない。また、その立地と微高地の規模からすれば、1型式の土器の期間で終息・移動する程度の、短命な集落の存在を想定することがもっとも妥当かもしれない。旧河道に挟まれた中洲状の小さな微高地内に構築された溝類は、「水」を制御するための諸施設であったようにも見受けられる。そうした場合、兩微高地上への集落の存在はしいて考えなくてもよいのかもしれない。

北微高地はこの時を以て再び占有されることはないが、南微高地には弥生時代後期と同末から古墳時代初頭にまたがる二時期の墓址が確認できるため、この期間南微高地は墓域として利用されている。当然居住域は、「岡田集落」微高地である。両年度の調査結果から、旧河道を挟んで居住域と墓域が区分される集落構造を提議しておきたい。

3. 八反長遺跡出土の前期弥生土器に関して

西播磨地域の弥生時代前期の土器に関しては、既に数多くの研究成果が発表されているが、本報告では距離的にも近い「丁・柳ヶ瀬遺跡」の発掘調査報告書に準ずるところが多い。全体的な土器の特色・傾向も類似した点が多く認められるため、出土土器の全般的な特徴・傾向に関しては、上記報告書に譲ることとし、ここでは加飾性を中心とした数量的な分類による特徴について簡単に触れるに止めたい。

本遺跡出土の前期弥生土器は、そのほとんどが溝内と二本の旧河道から出土しているため、一括性には乏しいと言わざるを得ない。形態的特徴では削出し突帯がまったく見られず、すべてが貼付け手法によるものであり、逆「L」字形態の口縁を持つ甕が共存していることから、「丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書」で言う「d段階」に属する土器とみている。甕(43)には頸部沈線文帯の下方に三角列点文があり、壺(18)の頸部外面には棒状浮文、口縁部内面には貼付け突帯による加飾、さらに口唇部・突帯に刻み目を持つ甕の存在等、いずれもこの段階を特徴付けるものである。甕の一部には沈線が多条化したもの、甕(28)のように頸部下方の沈線を螺旋状に施文した例のように、次の「e段階」の特徴を若干伺わせるものもあるが、貼付け突帯による流水文・波状文さらには円形浮文・半載竹管による施文などの典型的な「e段階」の土器がほとんど見当たらないため、「d段階」の中で納まるものとして捉えて差し支えないものとする。出土状況に一括性がないため時間的に若干の幅を持たせるとしても、上記の土器の特徴から考えると、ほとんどの土器は共存使用されていた程度の時間幅として捉え、数量的な処理を行った。

まず器種の構成から見ると、甕が55.7% (34点)と半数以上を占めるのに対し、壺は31.1% (19点)に止まる。その割合は約6:4となり、甕の割合が多いことに気付く。他の器種はすべて合わせても数パーセントであり、甕と壺でその大半を占めている。

次に数量的に多く、比較的形態差を把握しやすい甕を「沈線」「刻み目」という装飾的要素を中心と

して細分を行ってみた。まず、口縁部の形態によって「く」字形と逆「L」字形に大別すると、「く」字形（「S」字に近いものも含める）は67.6%（23点）、逆「L」字形は32.4%（11点）となる。逆「L」字形口縁型式の變が横行するといっても、その割合は約3割程度であり、依然従来からの「く」字形態の口縁部を持つ變が主流をなしていることが分かる。

この「く」字形を頸部付近の沈線の有無で分けると、沈線を有するものが43.5%（10点）、無いものが56.5%（13点）となる。沈線を有する10点を、口唇部等への刻み目の有無によってさらに細分すると、刻み目を持つもの70%（7点）、そうでないもの30%（3点）となる。同様に沈線のないものを細分すると、刻み目を持つもの30.8%、無いもの69.2%（9点）となり、沈線を有する型式のものとその割合がまったく逆になる。この「く」字形形態の變も厳密には口縁部が純然たる「く」字形となるものと、縄文時代の形態を引き継ぐ「S」字形に近いものに区分することは可能である。ただ、「く」字・「S」字両形態に区分したとしても、沈線と刻み目の施文の組合せにおいてはその割合が異なるものの、全般的には同様の傾向を示すようである。

一方、逆「L」字形の變は、沈線を持つものとそうでないものの比率が63.6%：36.4%となり、「く」字形の場合とその割合がまったく逆となっている。さらに、これに刻み目の有無の条件を与えると、沈線を持つ7点はそのすべてに刻み目を有し、沈線のないものは5：5の状態となる。

以上の分類と対比から考えて、[d段階]になってその割合が多くなる逆「L」字形口縁の變は、“有裝飾”を基本として誕生した變だったようにも思われる。片や「く」字形は、“裝飾”するものは逆「L」字形と変わらないほどに飾るが、“非裝飾”のものはあくまで飾らないといった二極の傾向が伺える。この二極の方向付けは、その用途・機能等に関連して分けられたものであろうが、今回の調査のような出土状況ではそれを明確にするまでの結論は得られなかった。ただ、逆「L」字形變が、時代が下るにつれて裝飾性が強くなる傾向にはあるようであるが、同時期と考えられるものでも、その沈線の条数にはかなりバラツキが見られるため、沈線の条数のみを以て型式的な前後関係をきめるには、かなり不確定な要素が多いようである。

表6 變における施文別分類表

| 變総数34点 | | | | | | | |
|--------------------|------------------|-------------------|-------------------|-------------------|-------------------|---------------------|---------------------|
| 逆「L」字形 11点・32.4% | | | | 「く」字形 23点・67.6% | | | |
| 有沈線 7点・63.6% | | 無沈線 4点・36.4% | | 有沈線 10点・43.5% | | 無沈線 13点・56.5% | |
| 有刻み目 7点 100% | 無刻み目 0点 0% | 有刻み目 2点 50% | 無刻み目 2点 50% | 有刻み目 7点 70% | 無刻み目 3点 30% | 有刻み目 4点 30.8% | 無刻み目 9点 69.2% |
| | | | | | | | |

結 語

昭和53年度に行った最初の確認調査開始依頼、こうして発掘調査報告書刊行までに、実に10年近い歳月が経過してしまいました。調査成果の即時性が求められ、広く公とすることが必要な埋蔵文化財であるにも係わらず、これだけの貴重な時間を延々と費やしてしまったことに、調査を担当したのとしてその責任を深く感じるばかりです。こうしている間に、「水尾川」の河川改修工事も終了し、今現地を訪れても調査当時を思い起こすものがすっかり少なくなってしまいました。時間の流れを痛感するばかりです。

慌ただしく報告書の刊行に向けて整理作業を進めていくなかで、遺跡周辺の等高線復元による敷地形図を作り上げてみますと、新設された「水尾川」が自然地形に逆らわず、実に理に合った場所（ほとんどが旧河道に沿う範囲）に設置されていることが分かり、工事を担当された方々の深い思索と科学的根拠がその基礎となっていたことを、今にして知るばかりです。

最近、私たちは広大な桃源郷を数多く夢見るばかりに、私たちを取り巻く『自然環境』を驚くばかりの速さで作り変えつつあります。その結果として、私たちの生活が豊かで便利になるかわらで、先人が古くから守り、伝えてきた『自然環境』や『歴史』が消えつつあることに気がついた反省からか、昨今にわかに世界的規模で「地球」を守ろうとする動きが急激に高まりつつあります。古くから豊かだと自他ともに認め、深く複雑でしかも穏やかだった私たち日本の自然も、日々その顔だちが変わり、時には私たちを脅かす恐怖ともなることが多くなってきました。新しく便利な環境と生活を創り出すことが、従来の自然環境を駆逐しつくしてしまう日も近いのではないかと思われるほどです。

自然からの逆襲の兆候が各地で見えはじめている今、私たちは「地球」を次の世代へ引き継ぐための自然環境の創造を行うべき時にさしかかっているように思われます。

このような大切な「地球」の上の小さな営みである埋蔵文化財の調査も、ただ単に事務的に処理されたり、研究者の中で勝手に論議されるといった低い次元の「科学」に押し止めておくことは、そろそろ終わりにすべき時が来ているのではないかと思います。異種分野の諸科学が複雑に交錯しあい、時には時間さえも有形成するのではないかと錯覚してしまうような科学的な現代社会にあって、「埋蔵文化財」だけが例外であってはならないように思われます。開発に対してアクティブであった側が、自然環境の破壊を積極的にホローする策を取っているように、遺跡の発掘調査と研究もその成果を社会に還元し、「科学」分野の構成員の一員として、果たすべき役割・進むべき道を見定めなくては、地球を破壊する先兵と誤解されかねない現状が続くだけです。

多方面に多くの犠牲を払って行った発掘調査の成果が、地球に優しい生活環境の創造にわずかも寄与できれば、自ずと豊かな生活が蘇ってくることでしょう。

圖 版



両遺跡周辺航空写真(昭和22年米極東空軍撮影)

▲印・堂田、●印・八反長



トレンチ調査状況
(東より)



旧流路砂礫層断面
(東より)



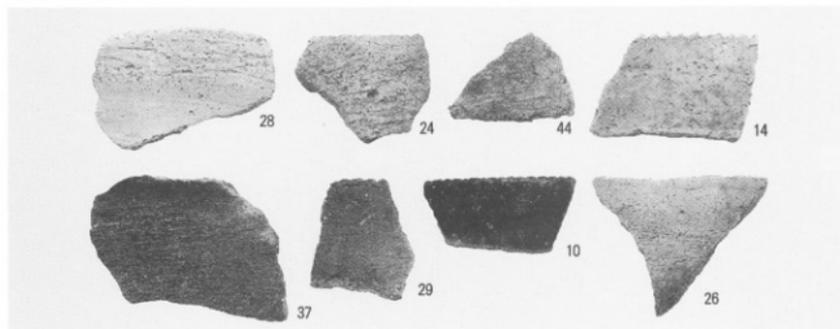
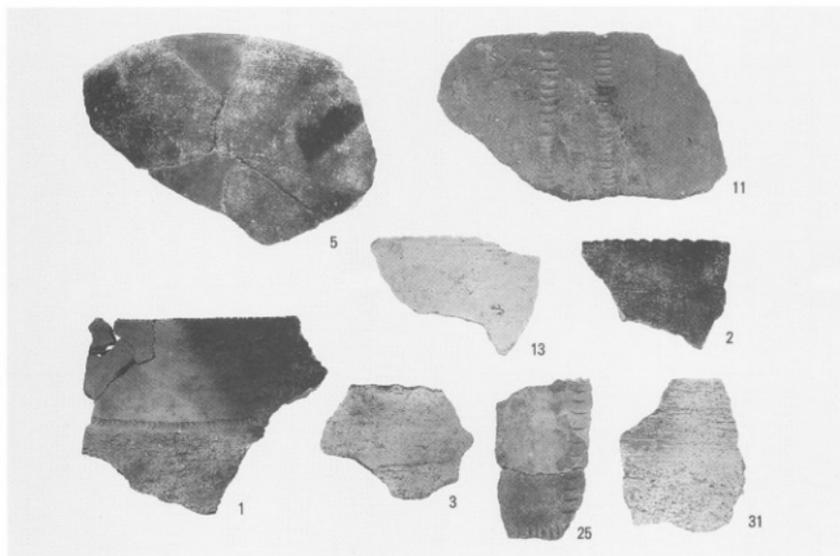
黒色ビット層断面
(東より)



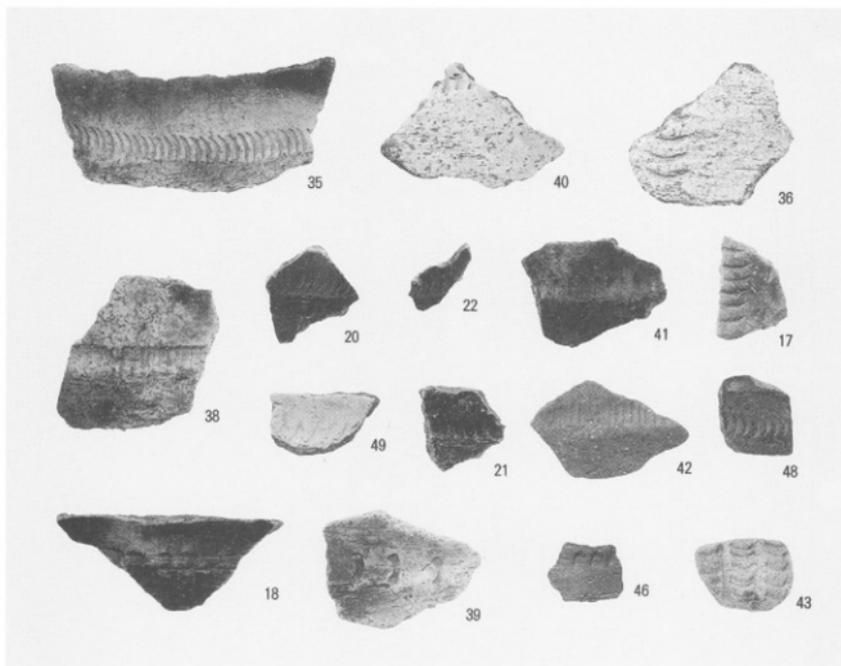
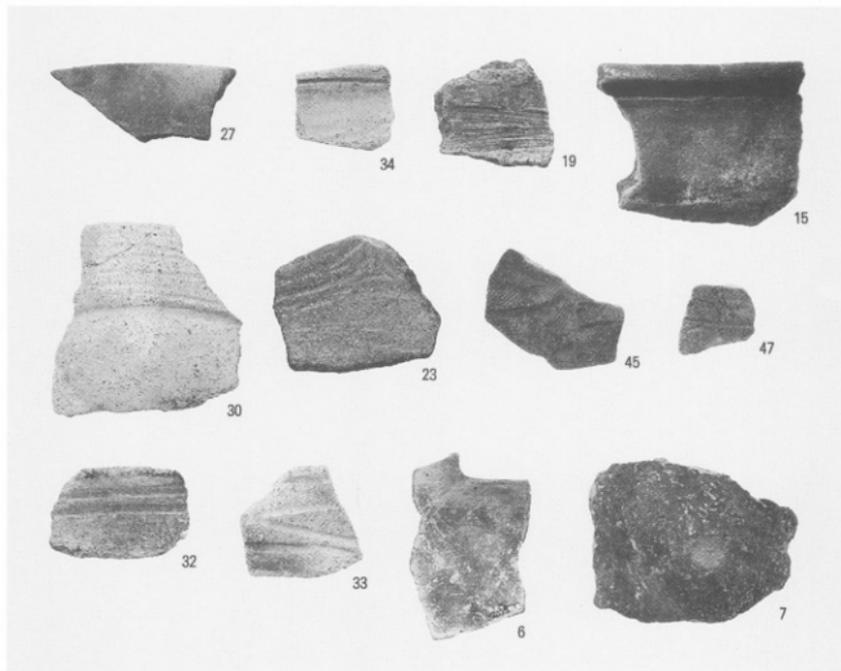
9



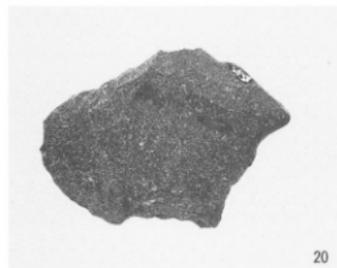
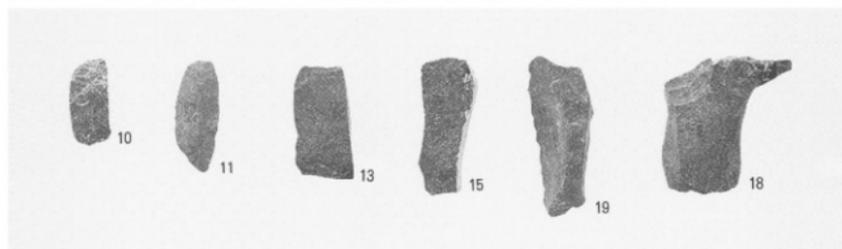
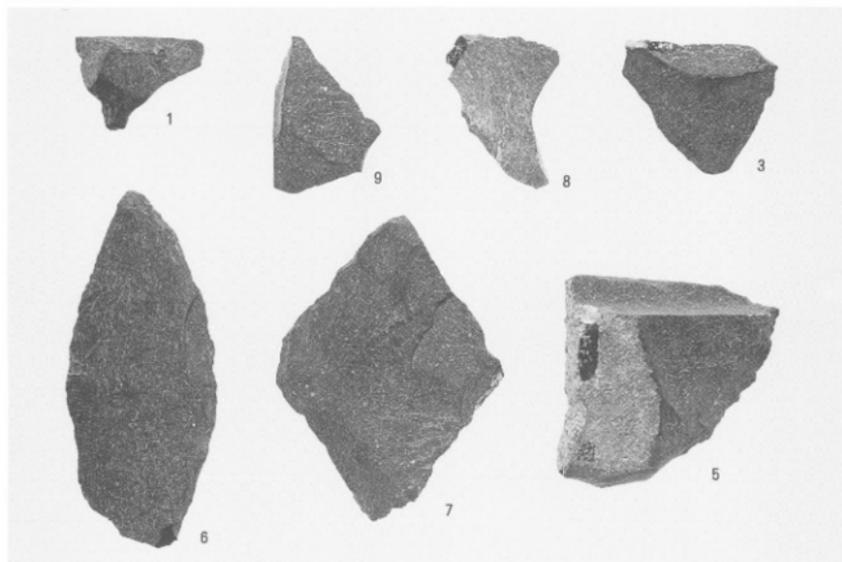
13



出土の土器 (13は須恵器 他は縄文土器)



出土の縄文土器





調査区全景
(西より)



木器出土状況
(東より)



木器出土状況
(北より)



水路1と杭列
(東より)



水路1と杭列
(北より)



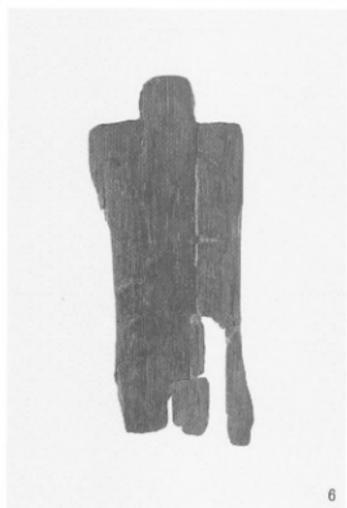
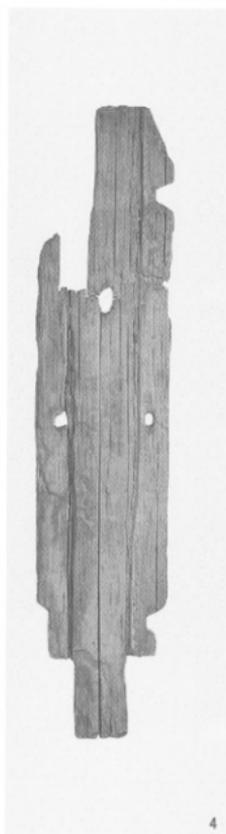
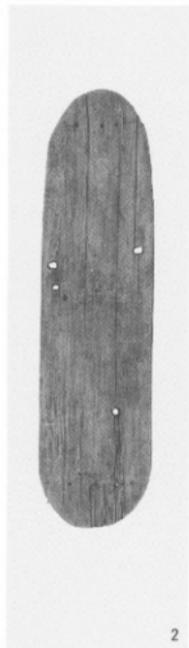
木器出土状況
（南より）



木器出土状況
（東より）



木器出土状況
（東より）



調査区全景
（東より）



遺跡現状（南より）



遺跡現状（北より）

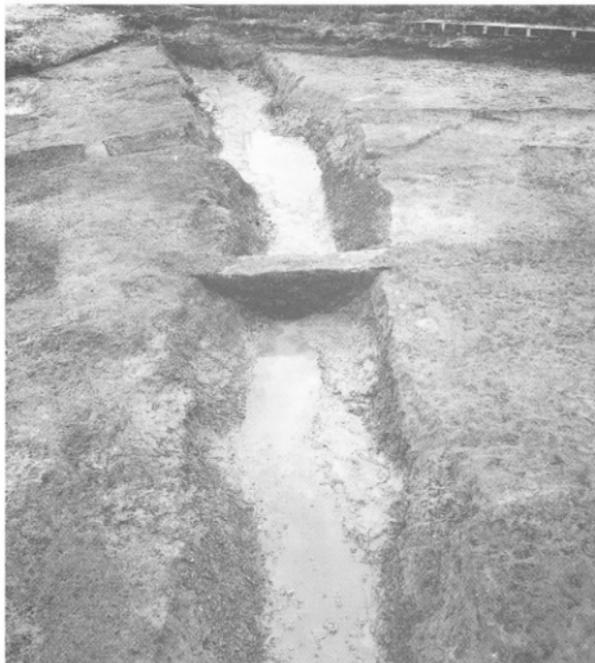




北調査区全景（北東より）



溝1内杭列（南より）



北調査区全景 (西より)



溝2断面 (西端)



溝2断面 (中央)



溝2内木槌状木器出土状況
（西より）



同 上（北より）



溝2内前期弥生土器出土状況



同上

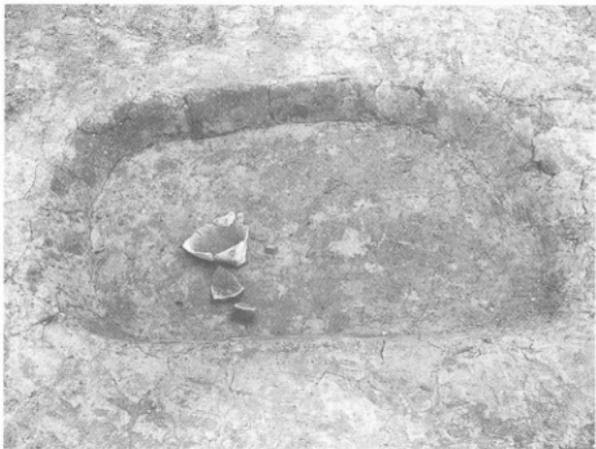


同上

土墳墓（東より）



同 上（南より）



土墳墓と掘立柱建物址（東より）



方形周溝墓状遺構
（南より）



同 上（東より）



臺棺出土状況（西より）





旧河道 2 全景
(東より)



堤状遺構と杭列
(東より)



同 上 (西より)



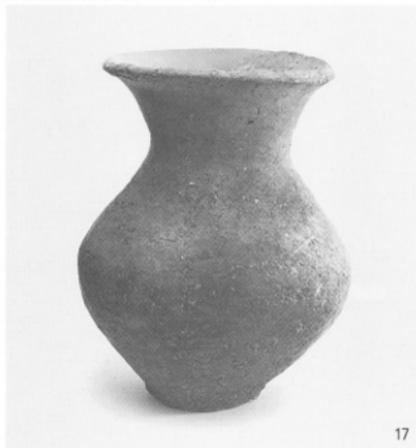
旧河道 2 内
木器出土状況
(西より)



同 上 (東より)



以上4枚
旧河道2内
木器出土状況



17



18



28



31



36



44



43



45

溝2内出土の土器（2）



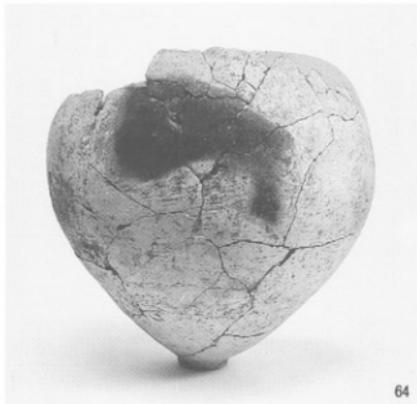
48



49



51



64

溝3内出土の土器

方形周溝墓状遺構出土の土器



97

前期弥生土器



98

前期弥生土器



11

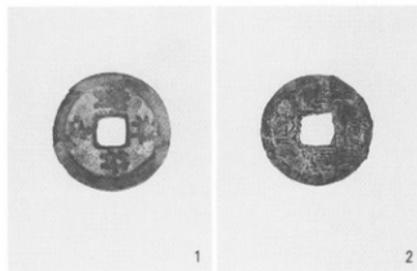
後期弥生土器



102

須恵器

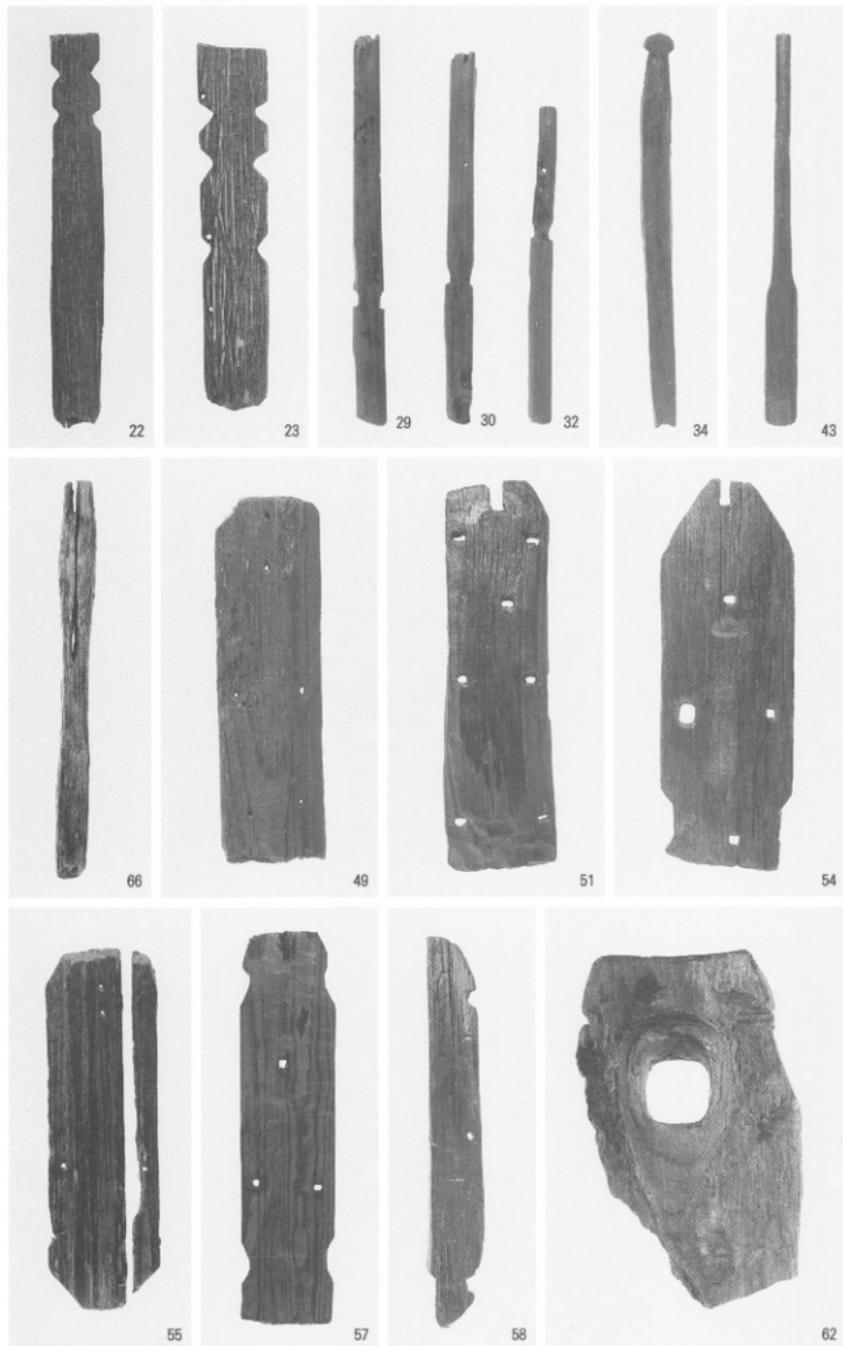
旧河道 2 内出土の土器・銅銭



1

2

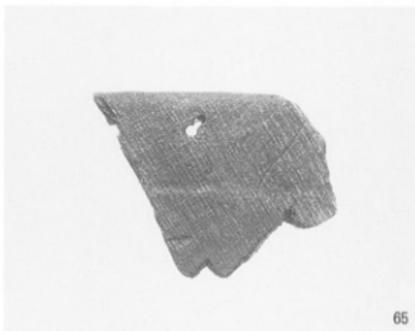
銅 銭



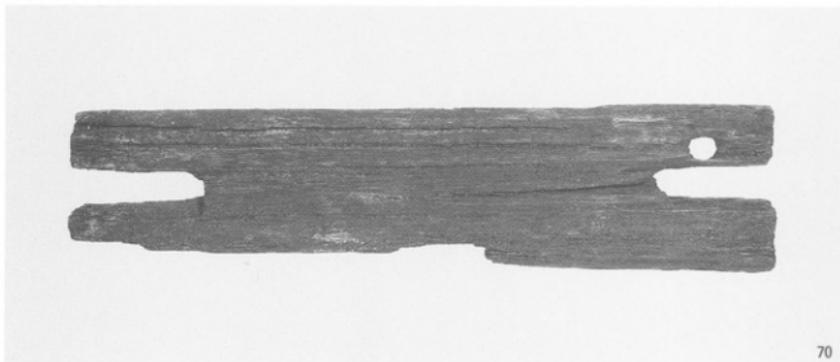
旧河道 2 内出土の木器（1）



64

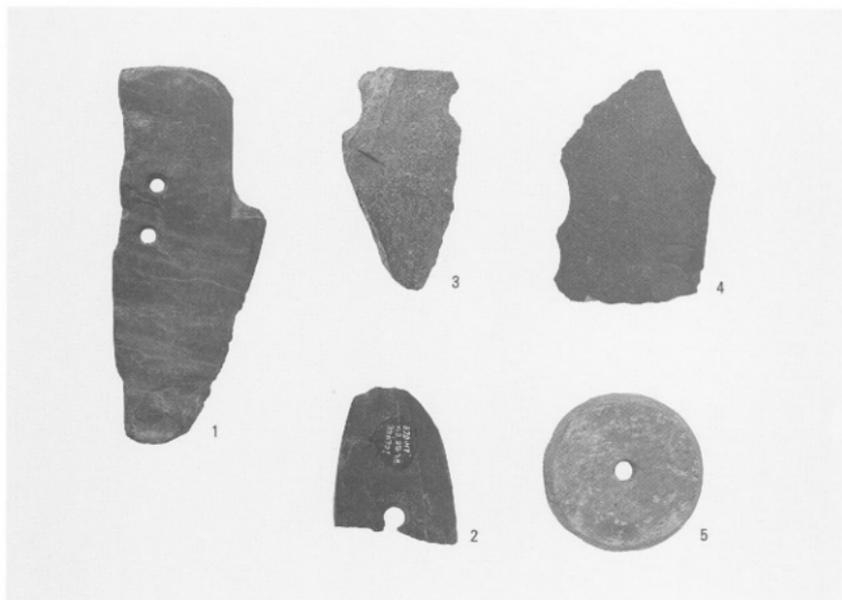


65



70

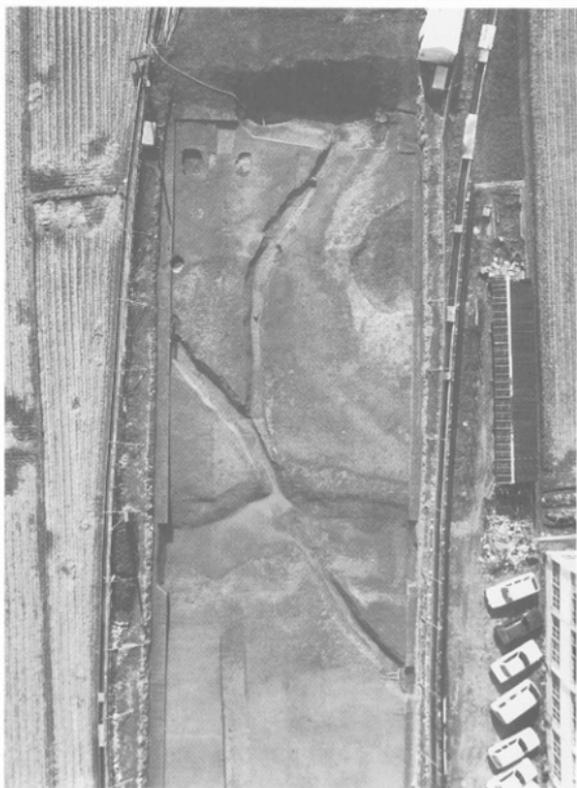
旧河道 2 内出土の木器（2）



出土の石器（5は北調査区出土）



調査区全景
(南より)



調査区全景



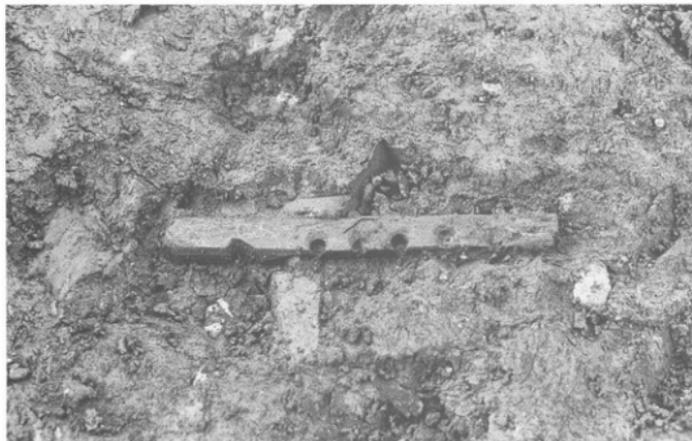
溝2断面



溝1・2断面
（右：溝2）



溝1内
土器出土状況



火鑪臼出土状況



樋の子出土状況

紡織具出土状況



農具出土状況



釜出土状況





106



107



109



112



114



116



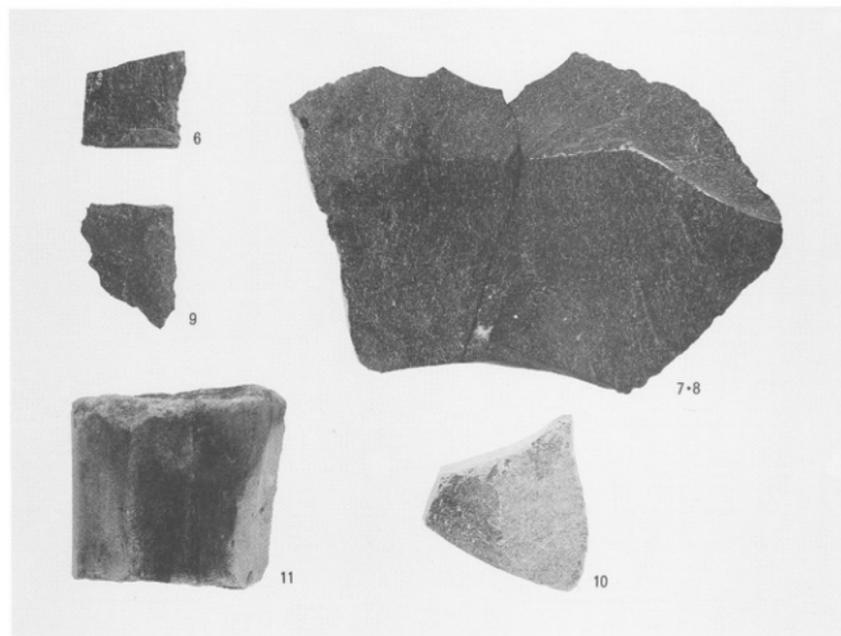
121



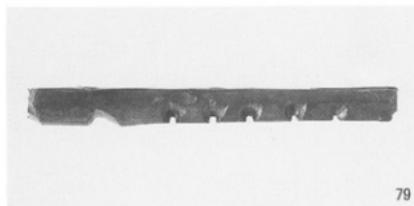
122



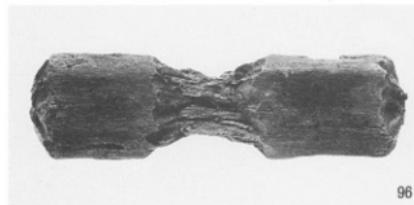
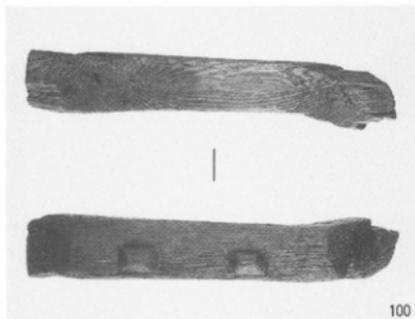
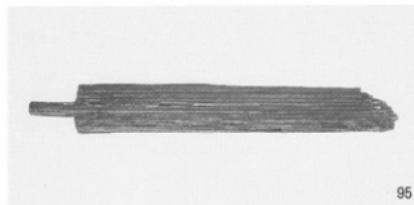
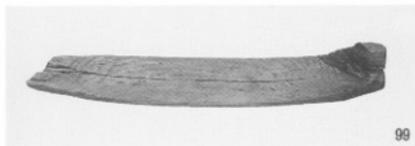
溝内出土の土器（2）



出土の石器



出土の木器



出土の木器

兵庫県文化財調査報告書 第108冊

堂田・八反長遺跡

平成4年3月31日 発行

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通1丁目10番1号